

佐原市神田台遺跡

1978年12月

千葉県教育委員会

佐原市神田台遺跡

千葉県立佐原女子高等学校第2運動場用地の調査

千葉県教育委員会

序 文

利根川下流に接して位置する佐原市は、近世における水上交通路の要所として栄えてきた町であります。今でも水路に見られる石垣は往年の面影を残すところ
です。

さて、このたび県立佐原女子高等学校では校庭の中にあるグラウンドでは狭すぎるため第2グラウンドの造成を検討してまいりました。これは数年来の懸案でもあり、生徒数の増加に伴い急ぎ解決しなければならない問題となってきました。

そこで、今年度にはいり用地取得の見込みもついたため、急換工事着工が決定されるに至りました。

しかし、グラウンド予定地には遺跡が所在しているところから、その取扱いについては関係諸機関と度重なる検討を続けてまいりましたが、付近には予定地にかわる適当な土地が見当たらないため、止むを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

今回調査された神田台遺跡は、奈良・平安時代の集落跡であり、当時の生活の一端がひも解かれたと言えます。今までに調査例の少ない佐原市周辺では貴重な資料を提供できたものと思います。これらの資料が、今後の学校教育での教材、あるいは郷土の歴史を知るうえでも一般の市民の方々にも広く活用されることを願って止みません。

最後に、本書が刊行されるにあたり、炎天下のもとで発掘調査に携わった(財)千葉県文化財センターの諸氏、調査に快く御協力くださった県立佐原女子高等学校、佐原市教育委員会及び関係諸機関に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

和年53年12月

千葉県教育委員会教育長 今 井 正

凡 例

1. 本書は、千葉県立佐原女子高等学校第2運動場造成に伴い発掘調査を実施した佐原市 神田台（かんだだい）遺跡の調査報告書である。
2. 調査は、千葉県教育委員会の委託を受け、県教育庁文化課の指導を得て、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査、整理作業には、調査研究員池田大助、同奥田正彦が従事した。
4. 報告書は、第1章1が県教育庁文化課作成になるほかは、上記2名が分担して執筆した。分担は次のとおりである。
第1章2、第2章1・2・4・5、第3章1・2、第4章2・3 池田大助
第1章3、第2章3、第3章3、第4章1 奥田正彦
なお、図版1の航空写真は、千葉日報社の提供によるものである。
本書の編集は西野 元が行った。
5. 墨書土器については鈴木仲秋氏の御教示をいただいた。

佐原市神田台遺跡

千葉県立佐原女子高等学校第2運動場用地の調査

目 次

第1章 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 遺跡の位置と環境	1
3. 調査の経過	4
第2章 遺 構	6
1. 遺構の種類と時期	6
2. 竪穴住居	6
3. 溝	28
4. 土城	28
5. 小穴群	30
第3章 遺 物	31
1. 遺物の概要	31
2. 縄文土器	31
3. 竪穴住居出土の遺物	35
第4章 ま と め	64
1. 縄文土器について	64
2. 008出土墨書土器について	64
3. 竪穴住居の時期	65
参考文献	67

図版目次

- 1 遺跡 遺跡周辺
- 2 遺構 1 002 (東側から) 2 003 (南側から)
- 3 遺構 1 004 (南側から) 2 002~005 (南側から)
- 4 遺構 1 005 (東側から) 2 005遺物出土状況
- 5 遺構 1 006 (南側から) 2 007 (東側から)
- 6 遺構 1 008 (南側から) 2 009 (西側から) 3 007~010
- 7 遺構 1 011 (南側から) 2 012 (南側から)
- 8 遺構 1 013 (南側から) 2 南側台地全景 016・017・018 (東側から)
- 9 遺物 縄文土器(1)
- 10 遺物 縄文土器(2)
- 11 遺物 001 出土遺物
- 12 遺物 003・004 出土遺物
- 13 遺物 005 出土遺物
- 14 遺物 005 出土遺物
- 15 遺物 006・007 出土遺物
- 16 遺物 007 出土遺物
- 17 遺物 008 出土遺物
- 18 遺物 008 出土遺物
- 19 遺物 008 出土遺物
- 20 遺物 008 出土遺物
- 21 遺物 009・010・011 出土遺物
- 22 遺物 012 出土遺物
- 23 遺物 013 出土遺物
- 24 遺物 013 出土遺物
- 25 遺物 013・014 出土遺物
- 26 遺物 018 出土遺物、表面採集遺物

挿 図 目 次

1	周辺遺跡分布図（佐原東部 1/25,000）	2
2	遺跡地形及び調査区域図	5
3	遺構配置全体図	7
4	001 実測図	8
5	002 実測図	9
6	002 カマド実測図	9
7	003 実測図	10
8	003 カマド実測図	10
9	004 実測図	11
10	004 カマド実測図	12
11	005 実測図	13
12	005 カマド実測図	14
13	006 実測図	15
14	006 カマド実測図	16
15	007・014 実測図	17
16	007 カマド実測図	18
17	竪穴住居主軸方向	18
18	008・009 実測図	19
19	008 カマド実測図	20
20	009 カマド実測図	20
21	010 実測図	21
22	010 カマド実測図	21
23	011 実測図	22
24	011 カマド実測図	23
25	012 実測図	23
26	012 カマド実測図	24
27	013 実測図	25
28	013 カマド実測図	26
29	015 実測図	27
30	016・017 実測図	28

31	016・017・018 配置図	29
32	018 Rの遺物出土状態	30
33	縄文土器拓影図(その1)	32
34	縄文土器拓影図(その2)	33
35	001 出土遺物実測図(その1)	36
36	001 出土遺物実測図(その2)	37
37	003 出土遺物実測図	37
38	004 出土遺物実測図	38
39	005 出土遺物実測図(その1)	38
40	005 出土遺物実測図(その2)	39
41	005 出土遺物実測図(その3)	40
42	005 出土遺物実測図(その4)	41
43	006 出土遺物実測図	42
44	007 出土遺物実測図(その1)	42
45	007 出土遺物実測図(その2)	43
46	007 出土遺物実測図(その3)	44
47	008 出土遺物実測図(その1)	46
48	008 出土遺物実測図(その2)	48
49	009 出土遺物実測図	50
50	010 出土遺物実測図	51
51	011 出土遺物実測図(その1)	51
52	011 出土遺物実測図(その2)	52
53	012 出土遺物実測図(その1)	52
54	012 出土遺物実測図(その2)	53
55	012 出土遺物実測図(その3)	54
56	013 出土遺物実測図(その1)	54
57	013 出土遺物実測図(その2)	55
58	013 出土遺物実測図(その3)	56
59	013 出土遺物実測図(その4)	58
60	013 出土遺物実測図(その5)	60
61	015 出土遺物実測図	62
62	018 出土遺物実測図	62
63	表面採集遺物実測図	62

表 目 次

1	周辺遺跡一覧	3
2	001 出土遺物表 (その1)	36
3	001 出土遺物表 (その2)	37
4	003 出土遺物表	37
5	004 出土遺物表	38
6	005 出土遺物表 (その1)	38
7	005 出土遺物表 (その2)	39
8	005 出土遺物表 (その3)	40
9	005 出土遺物表 (その4)	41
10	006 出土遺物表	42
11	007 出土遺物表 (その1)	42
12	007 出土遺物表 (その2)	43
13	007 出土遺物表 (その3)	44
14	008 出土遺物表 (その1)	47
15	008 出土遺物表 (その2)	49
16	009 出土遺物表	50
17	010 出土遺物表	51
18	011 出土遺物表 (その1)	51
19	011 出土遺物表 (その2)	52
20	012 出土遺物表 (その1)	52
21	012 出土遺物表 (その2)	53
22	012 出土遺物表 (その3)	54
23	013 出土遺物表 (その1)	54
24	013 出土遺物表 (その2)	55
25	013 出土遺物表 (その3)	57
26	013 出土遺物表 (その4)	59
27	013 出土遺物表 (その5)	61
28	015・018 出土遺物、表面採集遺物表	63

第1章 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

昨今、高等学校への進学率の増加とそれに伴う新設校建設、あるいは既設校の設備充実が県教育委員会の大きな問題となっている。この解決策の一環として、このたび佐原女子高等学校でもグラウンド造成の計画を具体化した。

同校では、校庭を兼ねたグラウンドを保有しているにもかかわらず、授業、各種のクラブ活動などに使用するにはあまりに狭すぎ、第2グラウンドの建設を考慮してきた。そこで、今年度には、用地の取得、予算上の措置が完了したため、急務グラウンド造成工事を着工することになった。工事に先立ち、昭和53年5月8日に県教育庁財務課から埋蔵文化財の所在について問い合わせがあり同月11日には、文化課と現地踏査を行った。その結果、グラウンド用地内には土師器の散布が濃密に認められた。

その後、度重なる協議の結果、代替用地のめどがたたないこと、年度内にグラウンド造成工事が完了すること等の条件があり、施工業者である石井工業株式会社でも早期工事中工が不可能な場合、工事が完了しないとのことで、計画変更が困難な状況となっていた。そのため、発掘調査による記録保存も止むを得ないと結論に至り、調査は、(財)千葉県文化財センターが実施することとなり、昭和53年6月1日から同年7月15日にわたって実施された。

2. 遺跡の位置と環境

本遺跡は、佐原市字神田台ホ374番地に所在する。よって、遺跡の名称は字名をとり、「神田台遺跡」と呼称することにした。

この地に遺跡が所在することは、今まで知られておらず、今回の調査で明らかとなった。

遺跡は、佐原市街西側を北に伸びる舌状台地上にあり、西より入る小谷により台地がややくびれた部分にあたる。東側台下に県立佐原女子高等学校の校舎がある。

台地は、標高約38mで、斜面は急で、とくに北東側部分は、崩落の危険が著しく、近年防災工事が実施されたばかりである。斜面には、スダジイ、シログモ、クスノ木等の広葉常緑樹が多くスギがわずかに混じっていた。台上は、近年まで果樹園であったが、調査時には、草地となっており、スギ、マキの植木が若干残されていた。

遺跡の所在する佐原市は、千葉県の北側を画して東流する利根川に面し、下総台地の北縁が沖積低地と接する部分に位置する。市城の中心部は、南・西側の台地を背に、利根川を北に見る沖

積地に発達している。近世初頭以降、利根川の治水事業が進むとともに商業都市として栄えてきたが、現在は、穀倉地帯の中心地として農業都市となっている。市内を流れる小野川沿いの町並に往時の面影をうかがうことができる。

利根川には、大小の支川が流入し、複雑に入組んだ侵食谷を形成している。この地域では、これらの谷にはさまれて台地は比較的幅が狭くなっている。台地上は、古くから人間生活の場となり、多くの遺跡がこれを物語っている。縄文時代早期の遺跡として著名な、西ノ城貝塚、城ノ台貝塚は7～8kmの範囲に位置する。遺跡周辺にも、縄文時代から古墳時代以降に亘る遺跡を数多くみることができる。ただ、土取等によりすでに消滅した遺跡も多い。

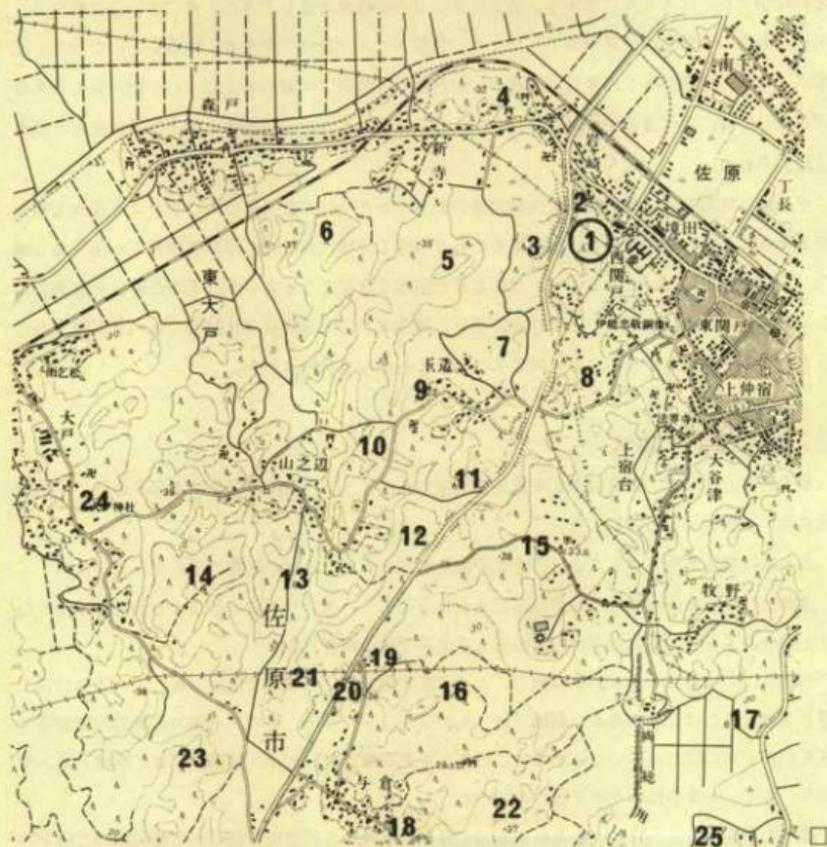


図1 周辺遺跡分布図 (佐原東部 1/25000)

番号	遺跡名	時期	所在	報告書	備考
1	神田台遺跡		佐原市神田台		
2	岩ヶ崎遺跡	田戸下・淳島Ⅱ	佐原市岩ヶ崎	岩ヶ崎遺跡 佐原市教育委員会	
3	野中横穴群		佐原市岩ヶ崎字中台	野中横穴群 S46.2	
4	岩ヶ崎貝塚		佐原市岩ヶ崎稲荷神社内		
5	新寺古墳		佐原市新寺		
6	玉造古墳群		佐原市玉造森戸地先		
7	仏師台遺跡	真間・国分	佐原市玉造仏師台	仏師台遺跡 S48 東京文化史学会	
8	岩ヶ崎城跡	中世	佐原市岩ヶ崎字城山		
9	玉造砦跡	中世	佐原市玉造域之内		
10		鬼高・真間	佐原市玉造		
11	玉造貝塚	中期・鬼高	佐原市玉造		
12		下小野他	佐原市玉造宮作		
13		国分他	佐原市山之辺		
14		加曾利E・安行系	佐原市山之辺		
15	橋替貝塚		佐原市牧野字橋替		
16		加曾利E他	佐原市牧野		
17	与倉包含地		佐原市与倉		
18		加曾利E	佐原市与倉		
19		加曾利B	佐原市与倉		
20			佐原市与倉		
21		加曾利E・安行系	佐原市与倉		
22	与倉御堀跡	中世・館跡	佐原市与倉御堀		
23	白幡古墳群	茅山下・黒浜	佐原市与倉附近		
24	大戸神社包含地	田戸下	佐原市大戸大戸神社周辺		
25		加曾利B	佐原市大根		

表1 周辺遺跡一覧

本表作成に際しては下記文献を参照した。

- 遺跡分布調査報告1（千葉県香取郡大須川流域及びその周辺）
1976 矢戸三男・大村裕
- 佐原市遺跡分布図（佐原市中近世遺跡分布図）
佐原市教育委員会
- 仏師台遺跡発掘調査報告
東京文化史会

水郷の名で親しまれている台下の水田は、かつて、常陸風土記に「香取海」、万葉集に「流れ海」と呼ばれた内陸水域であった。現在の手賀沼、印旛沼、霞ヶ浦は、いずれも香取海の入江で海上潟、安是海を通して、銚子口から太平洋に続いていた。香取・鹿島の両宮は、香取海の両岸に、相対するように置かれたものであった。

これら内陸水域は次第に陸化が進み、近世以降、利根川の治水事業の進展とともに、現在の形に近づいたものである。

3. 調査の経過

調査は、5月31日に現地の状況を確認し、6月5日より7月15日まで実施した。遺跡調査は、座標測量、方眼杭設置後、発掘区を設定し、削平面の清掃、遺構の検出より始めた。6月7日までに、台地南側部分で、住居跡11基(001~011)、溝(015)、柱穴群(018)、土壌(016・017)の所在を確認した。住居跡はすべて土師器を出土する竪穴住居と判断された。住居跡の発掘は、中軸線とこれに直交する線を断面観察用の土手として残すように行い、溝は、4ヶ所に断面観察用の土手を残し、土壌・柱穴群は、それぞれの状況に応じて発掘を行った。

台地の中央部は道路とするためかなり以前に削平されていた。そのため調査は台地南側部分を中心に進めた。台地北側部分は、小範囲ながら原地形を残しており、遺構が残っている可能性があった。この時期は連日の晴天続きで、土層の乾燥が甚しく、遺構の確認、発掘はかなり困難であったが、6月12・13日に雨が降って、土層が見やすくなったため、14日から北側部分の調査を行い、15日までに土師器を出土する住居跡2基を確認した。

遺構の平面形実測は、グリッドを利用して、遺構を水系で割付け、遣り方測量で行った。一辺を1mの正方形に割付け、各辺は、グリッドの辺に平行させた。

住居跡の床面精査を行ったところ、7月6日、007と切り合い関係にある014の周溝と壁を確認した。最後に溝の実測、遺跡の全景写真撮影を行い、7月15日発掘調査を終了、7月17日に終了確認を行った。

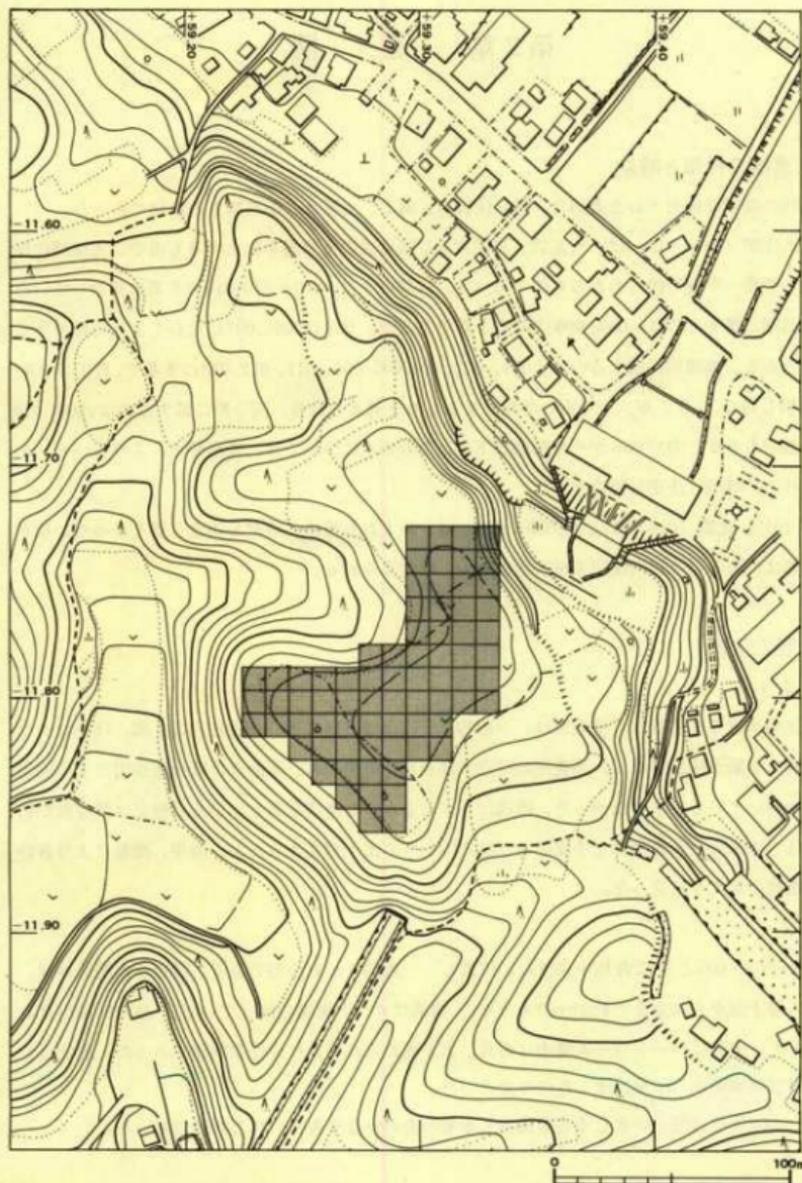


図2 遺跡地形及び調査区域図 (1/2500)

第2章 遺構

1. 遺構の種類と時期

今回の調査で検出された遺構は、竪穴住居14、溝1、土壇2、小穴群1の計18であった。

竪穴住居(001~014)は、鬼高式、真間式及び国分式の土師器を出土するもので、古墳時代後期から奈良・平安時代にわたるものであった。14基のうち、007~010・014の5基は複合していた。

鬼高期に属するのは、003、006、007の3基であるが、003は006、007に比してより時期が下るものである。真間期に属するのは、001、002、004、005、009、011、012、013の8基で、新田の2期に大別し得る。001が、より古い時期になるものと考えられる。国分期に属するのは、008、010の2基であるが、中で008がやや時期が下る。なお014については、鬼高期か、より古いといえるだけで、時期は決定し得なかった。

溝(015)、土壇(016、017)、小穴群(018)は、いずれも性格、時期を決定し得なかった。018の一部は、あるいは竪穴住居の柱穴の痕跡かとも考えられる。

2. 竪穴住居

001

台地中央近くに位置し、平面形は、一辺約6mのほぼ方形に近い。主柱穴は4個、ほかにカマド右側に1個が検出される。調査開始時点ではかなり削平され、床面及び断面観察用の土手周辺部分が残っているにすぎなかった。周溝はとぎれながらもほぼ全周している。壁高は残存部で約30cmほどであった。遺物は土手周辺及び柱穴内からの出土が多かったが、削平、攪乱により各時期の遺物の混入が目立った。

002

001~003・005と共に台地中央付近に位置し、一辺約3mと小型である。残存した掘込みは、ローム層上面から床面まで約20cmであった。周溝はカマド両端で終っていた。柱穴は検出されなかった。床面はハードローム層中にあり、よく固められており良好な状態であった。遺物は、覆土及び周溝中から少量出土したのみであった。

001・002周辺は削平が著しく各遺構とも本来の姿がかなり失われた状態であった。

003

台地南側のほぼ中央部に位置し、002~005と2~4m程度の間隔をおいて検出された。一辺は約3.4mで方形に近いが、北側壁が南側壁に比べ約40cmほど短くなっているため、西側の壁をそ

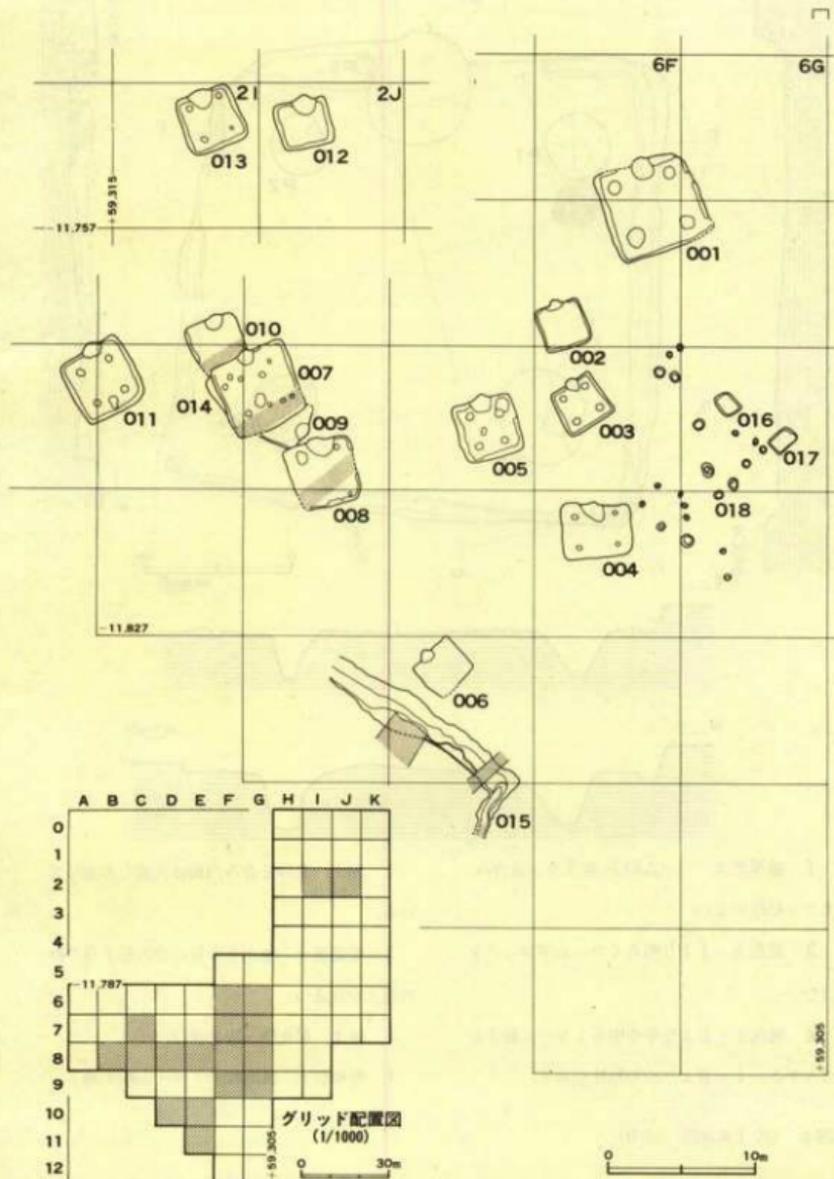
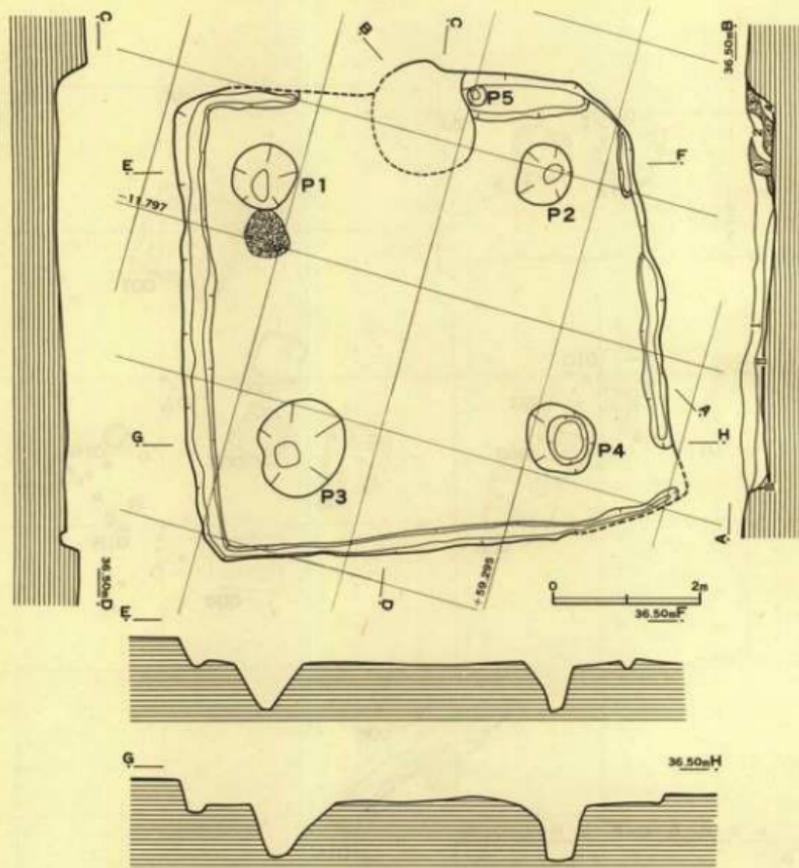


図3 遺構配置全体図



- | | |
|---|--|
| <p>I 暗褐色土 ローム粒子、焼土を少量含み、あまり粘性がない。</p> <p>II 褐色土 Iより明るくロームブロックを含む。</p> <p>III 褐色土 IIよりやや明るくローム粒子が混入する。I・IIよりやや粘性がある。</p> | <p>1 粘土 荒砂を含み内面は火成し赤変している。</p> <p>2 暗褐色土 焼土を大量に含み粘土質の砂の混入が目立つ。</p> <p>3 焼土 炭化物・灰を含む。</p> <p>4 暗褐色土 焼土粒子・ローム粒子混入。</p> |
|---|--|

図4 001実測図 (1/80)

れに合わせてゆがませ、平面形の修正を行っている。また、カマドもやや東に寄るような形になり、P₅との位置がかなり近づいた形になっている。

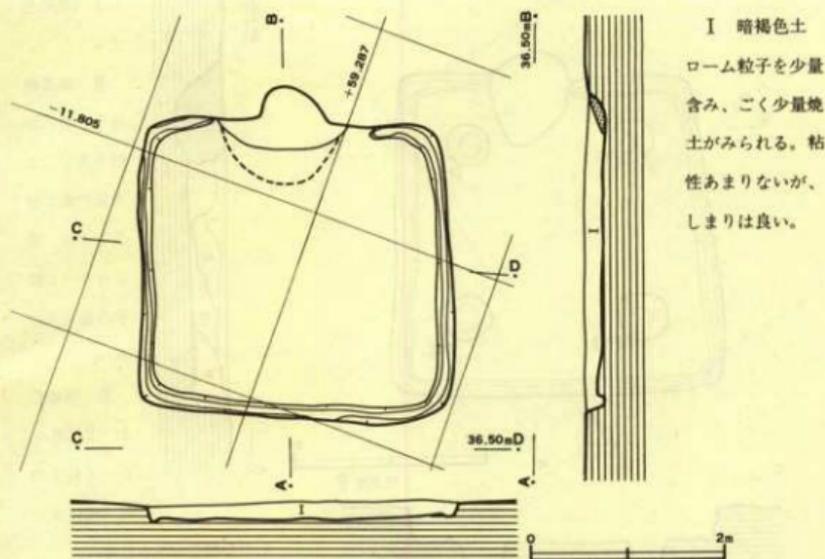
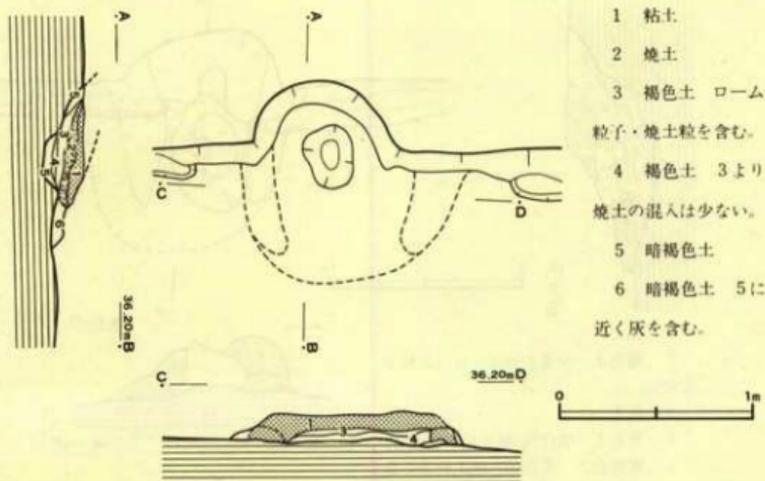


図5 002実測図 (1/60)

I 暗褐色土
 ローム粒子を少量
 含み、ごく少量焼
 土がみられる。粘
 性あまりないが、
 しまりは良い。



1 粘土
 2 焼土
 3 褐色土 ローム
 粒子・焼土粒を含む。
 4 褐色土 3より
 焼土の混入は少ない。
 5 暗褐色土
 6 暗褐色土 5に
 近く灰を含む。

図6 002カマド実測図 (1/30)

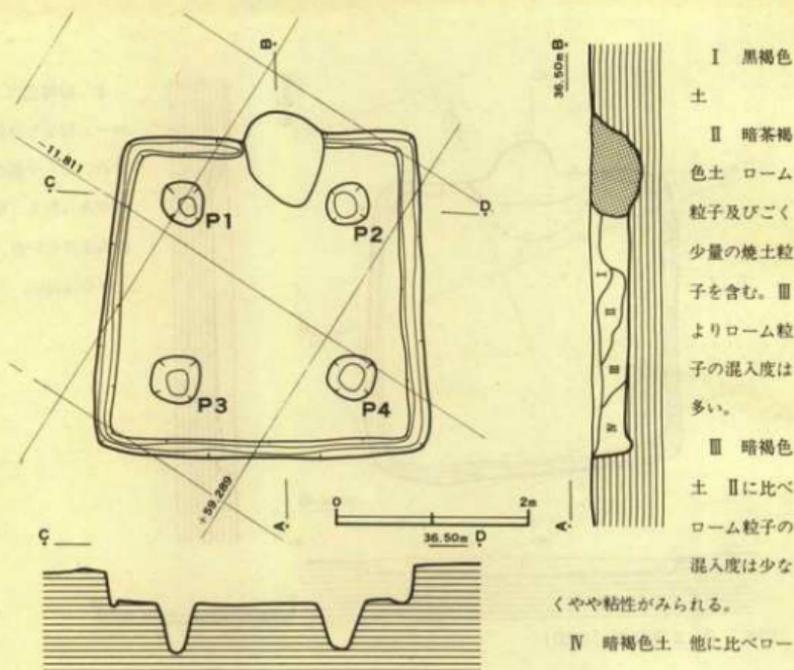


図7 003実測図 (1/60)

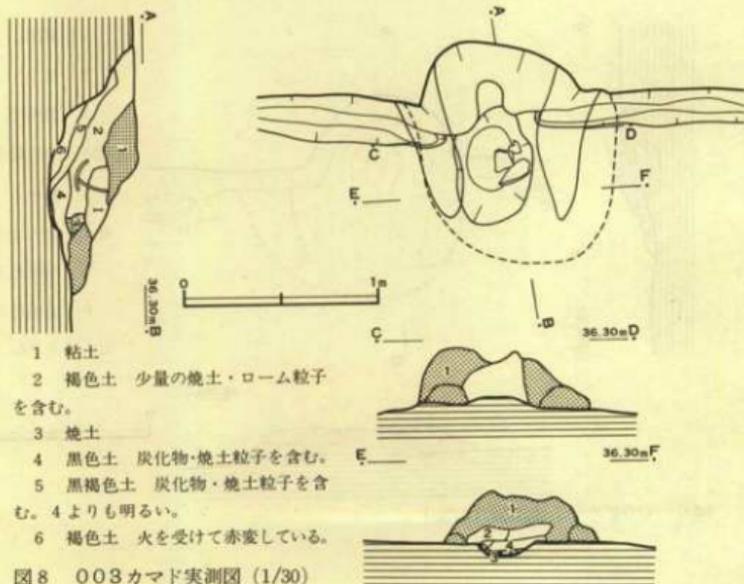


図8 003カマド実測図 (1/30)

周溝は15~20cmの巾で全周していたが、カマド東側の部分は他より深く掘込まれていた。床面はほぼ水平に近く良好な状態であった。柱穴は4個、等間隔の位置であった。

003及び005は削平が最も少なく、良好な状態であった。

004

南側台地中央に位置する一群中の南端に位置する。床面直上まで削平され、また擾乱を受けたため、床面も、ごく一部が残っていたにすぎなかった。長辺約4.6m、短辺約3.6mで各隅部はやや丸みをおびた長方形であった。4個の柱穴は各四隅をむすぶ対角線上に位置している。床面は、図にトーンで示した以外の部分が残るにすぎないが、かなりの凹凸があり、軟弱であった。周溝は検出されなかった。覆土は、少量のローム粒子及び焼土粒子を含み、粘性はあまりない状

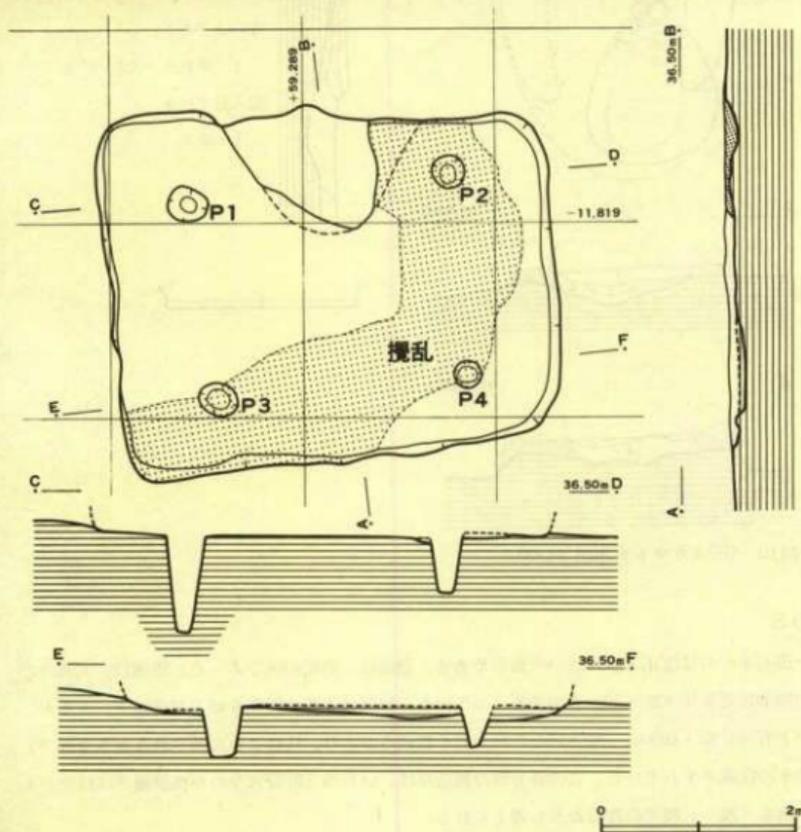


図9 004実測図 (1/60)

態であった。

カマド付近は、攪乱が甚しく、袖の付根部分しか残っていない状態であった。遺物は、わずかに残ったカマド内及び覆土中から出土したが、少量であり、明確に時期を決定し得る資料とはならなかった。

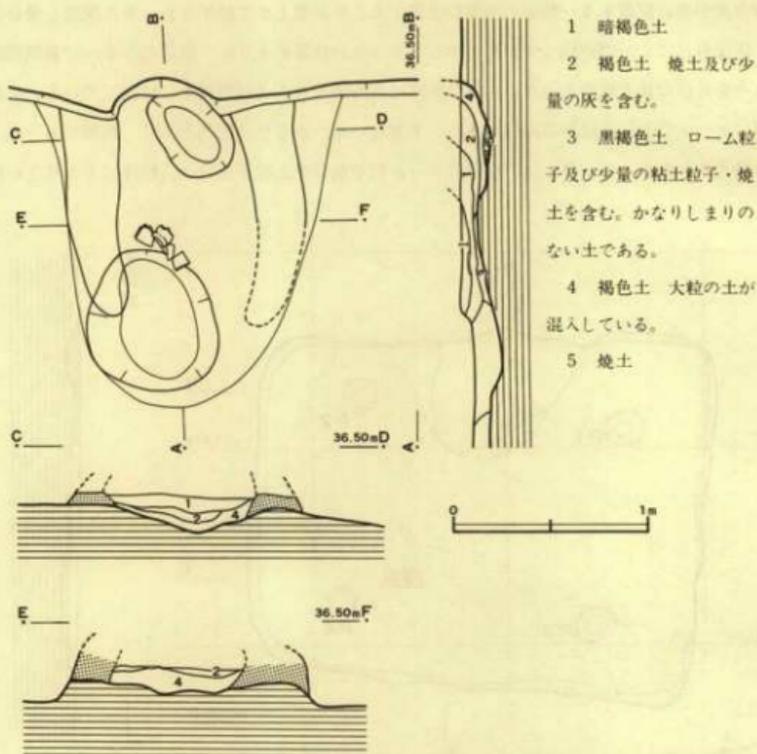


図10 004カマド実測図 (1/30)

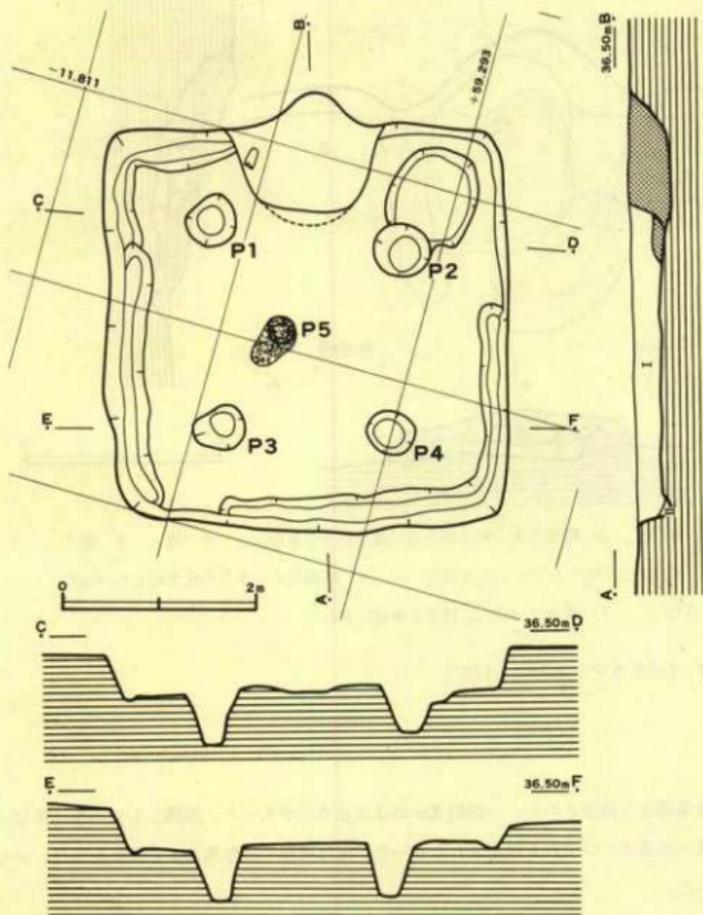
005

一辺約4mのほぼ正方形に近い平面形である。壁高は、最高40cmであった。周溝は、北東及び南西隅部付近を除き20~30cmの巾でめぐっていた。柱穴は4個で四隅を結ぶ対角線上にあるが、カマド右側に80×100cm、深さ10cmの長方形の掘込みがあり、P₂はこれに押されるような形で、ややその位置がずれていた。この長方形の掘込みは、いわゆる貯蔵穴なのか機能面では疑問があり、物を「置く」程度の施設かとも考えられる。

中央やや西側のP₃は内部に焼土が満ちており、周辺の床面も火熱を受けて赤変していた。屋内

炉の一種と思われる。

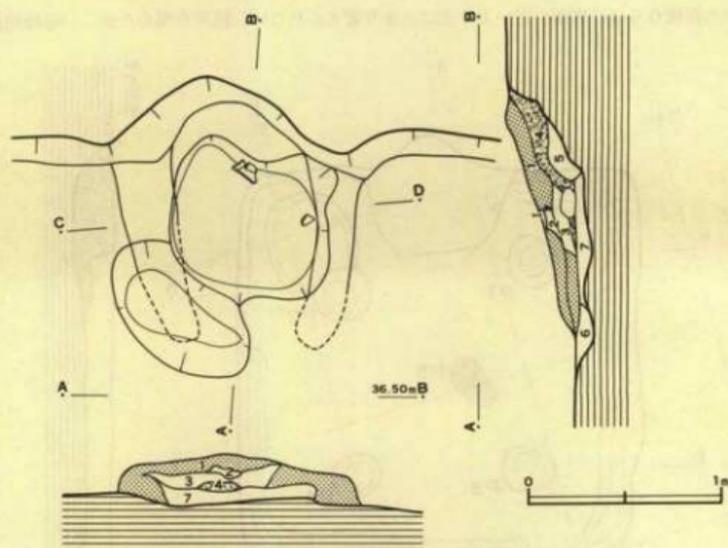
遺物は、カマド内からの出土が主で覆土内からは少量であった。P₄付近には勾玉及び土製支脚等がまとまって検出された。この支脚は柱を抜いたあとと放棄されたものと思われた。しかし、柱をぬいた直後ならば、床面に近いあり方はあまり考えられない。柱穴を埋めたか。一定時期放置



- I 暗褐色土 ローム粒子・焼土粒を含む粘性は少ない。下層に向いローム粒子が多い。
- II 褐色土 Iに比べ焼土粒子・ローム粒子等の混入物が多くみうけられ、粘性も増す。

図11 005実測図 (1/60)

された後かと考えられよう。ただし、断面からは、住居全体を埋込んだ様子は認められなかった。



- 1 粘土 2 暗褐色土 粘土粒子及び焼土粒子を含む。 3 灰 4 焼土
 5 暗褐色土 ロームブロックを含む。 6 暗褐色土 多量の焼土粒とローム粒子を含む。 7 褐色土 ローム 粒子を多量に含む。

図12 005カマド実測図 (1/30)

006

調査区最南端から検出された。一辺約3mのほぼ正方形であった。四隅ともかなり角ばっている。柱穴・周溝は、いずれも検出されなかった。床は樹根・耕作等により攪乱を受け、かなり凹凸があった。

遺物は極めて少量で、明確に時期を決定しうるものは認められなかった。石製紡錘車が1点出土した。

007

009・010・014と三方で複合している。短辺約5m、長辺約5.6mの長方形である。現存する壁高は約20cmであった。床面は、多少凹凸があった。この台地が以前果樹栽培を主としていたため

根による攪乱と考えられるが、西側の014とは床面の高さが近く、その関係もあると思われる。柱穴は9個検出されたが、014との関係から、P₁・P₂・P₆・P₈が007に属するものである。

これは、本遺跡の住居の柱穴がすべて四隅を結ぶ対角線上にあるため、007でも上記の4個を相当させた。柱穴の深さは、床面から30~40cmであった。P₄は、深さが10cmと浅く、位置的にも不明である。P₃・P₅・P₇・P₉は014に属するであろうが断定はできない。

周溝は、カマド東側で部分的に切れるほかほぼ全周していたと思われるが、009と複合した南側では、明瞭ではなかった。

床面上トーンで示した部分は炭化物の出土した範囲である。約80×100cmの範囲で床面上から検出されたが、住居内において火を使用した痕跡や、火災による焼失の痕跡は認められなかった。また、断面の観察からは、後に混入した様子も認められなかった。内容も炭化物のみで、焼土や灰が大量に混入することもないため、カマドからかき出したとも考えられなかった。

014は、大半を007と010に切られ、隅部と一辺のみが検出されただけであった。床面の高さ

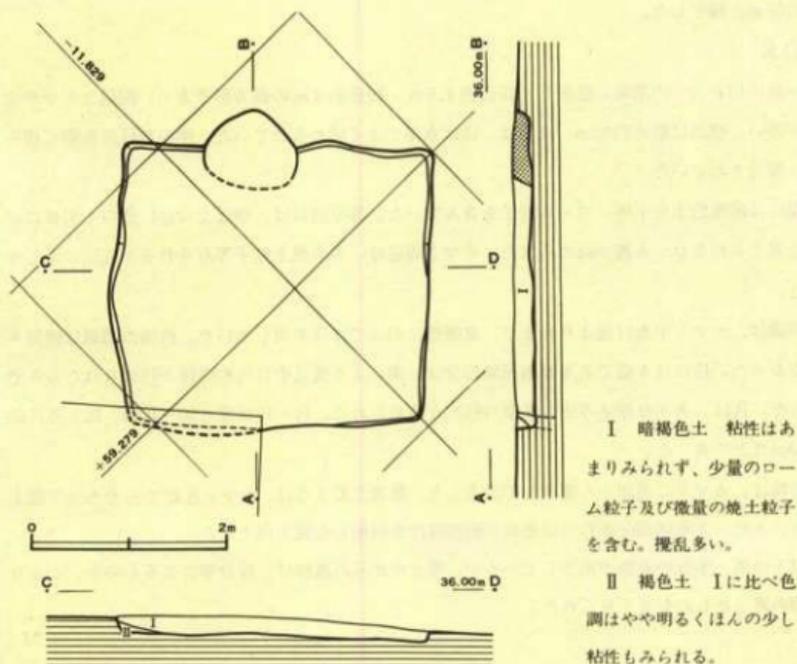


図13 006実測図 (1/60)

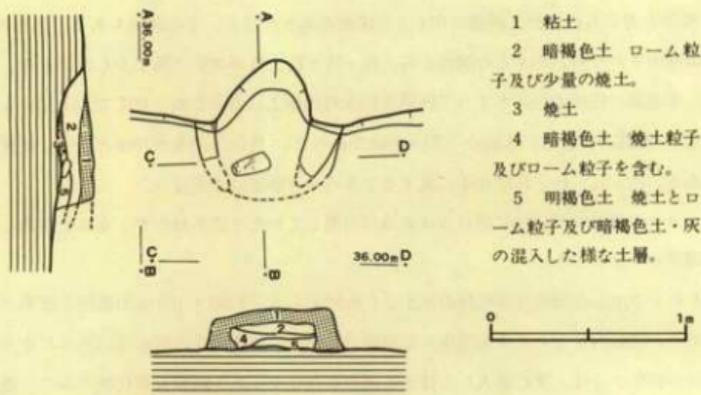


図14 006 カマド実測図(1/30)

は、007 とほぼ同じであり、20~30cmの掘込みと、やや荒れた床面が残されたのみであったが、床面は割合に固められていた。周溝は検出されなかった。柱穴も前に述べたようにどれが伴うかは明らかにし得なかった。また、時期を決定し得る遺物も出土しなかった。一辺約4m程度の方形の住居と推定した。

008

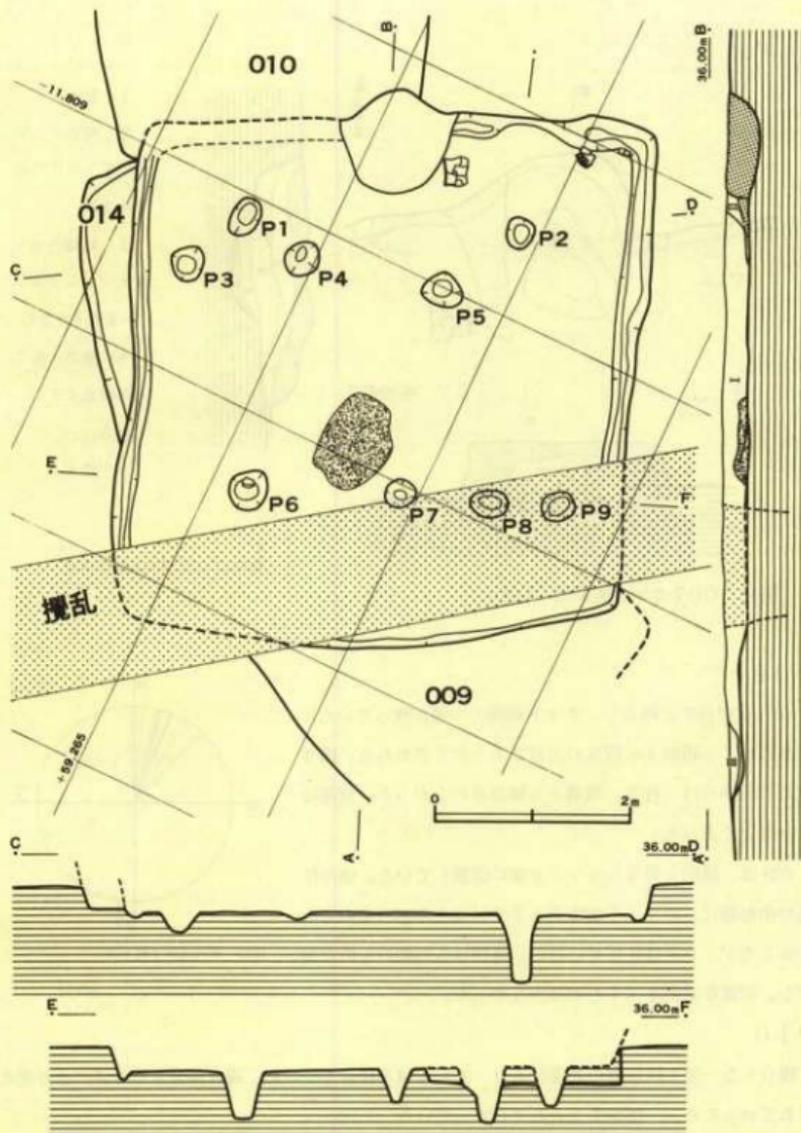
一連の切り合いの南端に位置し、長辺約4.5m・短辺約4mの長方形である。四隅ともやや丸み強い。壁高は最大約40cm、床面は、ほぼ水平でよく固められていた。中央部付近を溝に切れ、攪乱されていた。

覆土は暗褐色土を主体にローム粒子を含んでいた。部分的には、壁近くには、壁のくずれによると考えられるローム塊が認められた。カマド周辺は、多少焼土粒子等みられるが変化に乏しかった。

周溝は、カマド中央付近より始まり、東側壁に沿ってほぼ半周していた。西側の周溝は確認されなかった。柱穴は4個であるが南西隅部分は、溝による攪乱中にP₄の痕跡が認められたのみであった。P₁は、大きな掘込み中に2個の柱穴が認められた。P₁・P₂は深さ30~40cm、P₄・P₅は深さ20cmほどであった。

遺物は、カマドの両側から集中して出土した。黒書土器2点は、カマド左側からそろって出土した。また、北東隅部分からは須恵器の胴部破片を利用した硯が出土した。

以上の他、多数の遺物が出土しているが、覆土中からの遺物は、複合等によるものか、かなり時期の異なったものも多く見られた。



- I 暗褐色土 ローム粒子を含み、炭化物混じりの焼土ブロックをも含んでいる。粘性はあまりみられない。
- II 砂質層 カマドより流れ出た砂まじりの粘土を中心とする。
- III 攪乱
- IV 炭化物 I に混入した感じのもので下に行くとも炭化物の混入度は大きい。

図15 007.014実測図 (1/60)

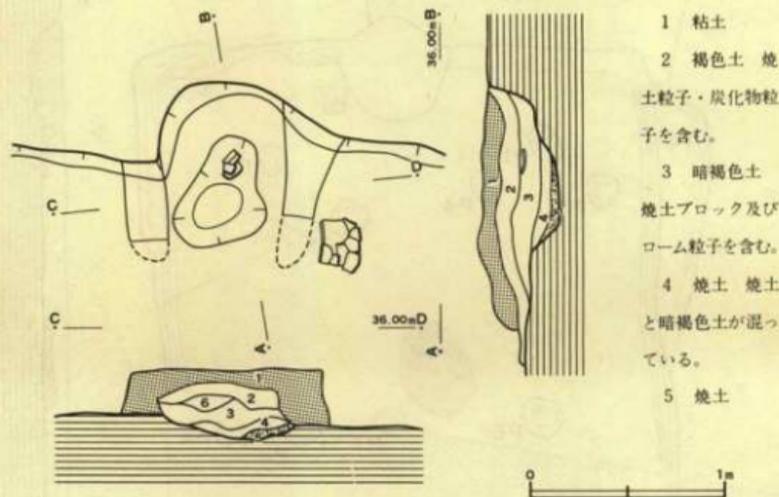
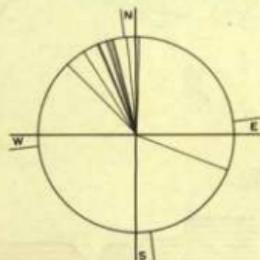


図16 007カマド実測図 (1/30)

009

007及び008と複合し、カマド両側の一部が残っていたにすぎない。一辺約4m程度の方形であったと思われる。残された部分からは、柱穴、周溝とも確認されなかった。壁高は5cmほどであった。

009は、通例と異なりカマドが南に位置していた。他の住居の中軸線は、カマドを北方向として、ほとんど一定の方向を示したが、009は正反対に近い。遺物は各時期のものが混在し、明確な時期を示すものは少なかった。



[図17 竪穴住居主軸方向

010

複合した一連の住居群の北端にあり、007・014と複合していた。複合部分を畑の溝により攪乱されていたため、一部が失われてしまっていた。

一辺約3m程度の方形で、四隅はやや丸みをおびる。周溝は西壁に沿った約2mほどの部分にみられたが、他の部分には認められなかった。カマドは、やや東側に寄って設けられていた。柱穴は検出されなかった。

出土遺物は土器の小破片が多く、また攪乱、耕作による混入がみられた。

007-010の先後関係は、断面の観察による複合順と出土遺物からすれば次のようになる。

014 → 007 → 009 → 008
 ||
 010

014 に関しては、時期を決定する遺物をまったく欠くが、複合関係からは最も古いと考えられる。007 は鬼高期、009 は明らかではないが真間期頃・008・010 は国分期と考えられる。

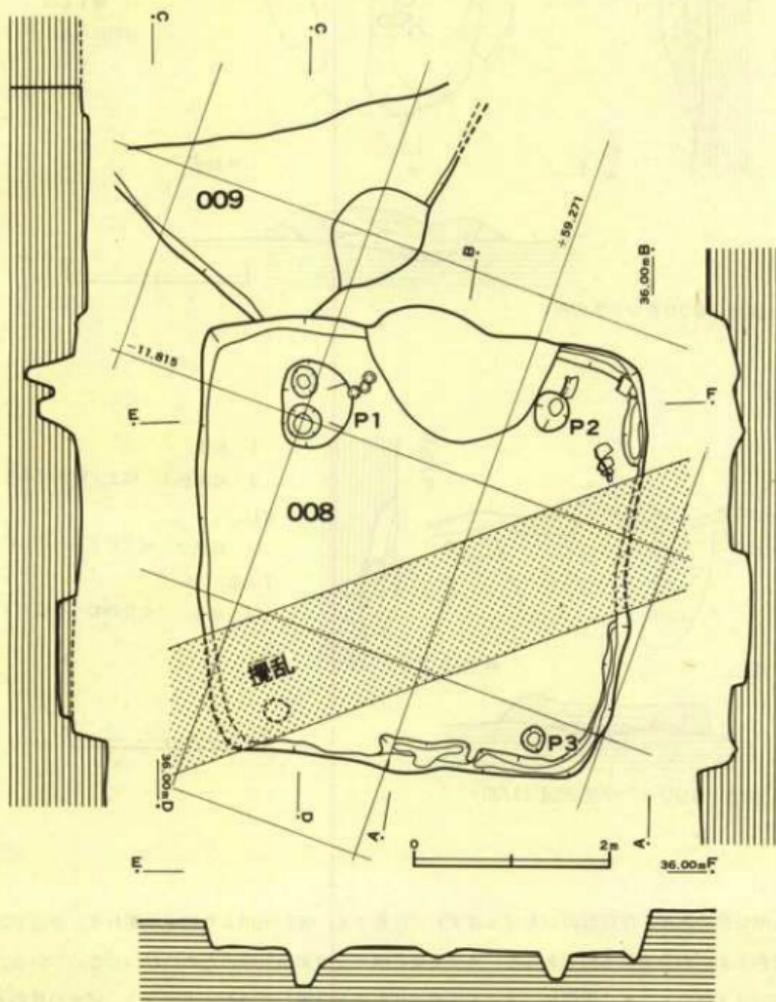


図18 008, 009実測図 (1/60)

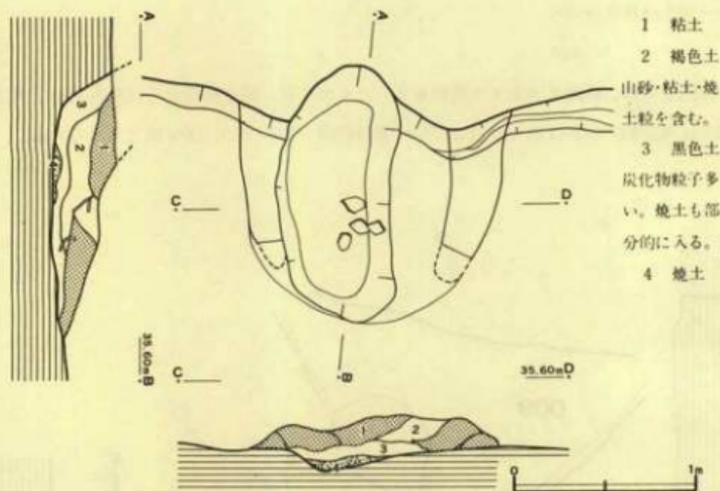


図19 008カマド実測図

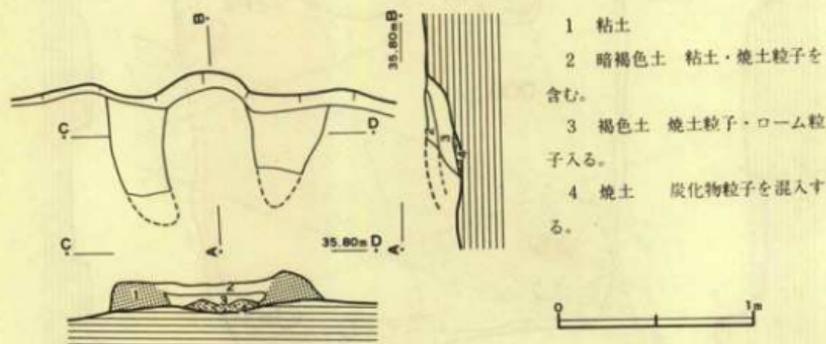


図20 009カマド実測図 (1/30)

011

南側台地の西端、住居群のいちばんはずれに位置する。007・010より約4m離れる。平面形は一辺約4.4mのやや長方形であった。カマド東北隅がやや突出気味のためいびつになっている。支柱穴は4個であった。周溝は、カマド両端で切れるが全周していた。カマドは、植木の移動や砂利穴があったため、大半が破壊されていた。

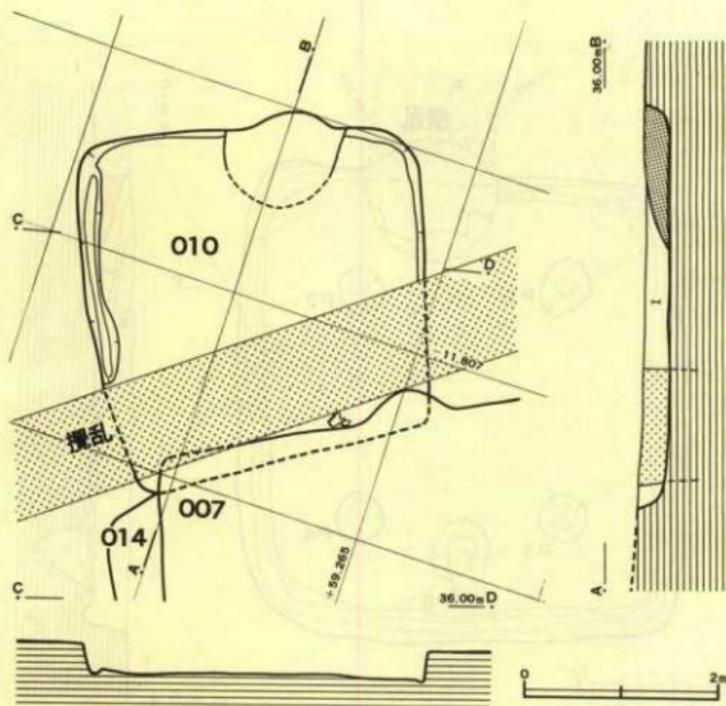


図21 O10実測図 (1/60)

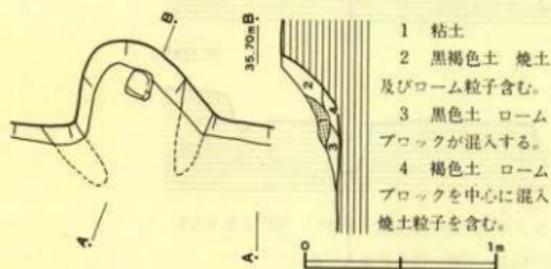
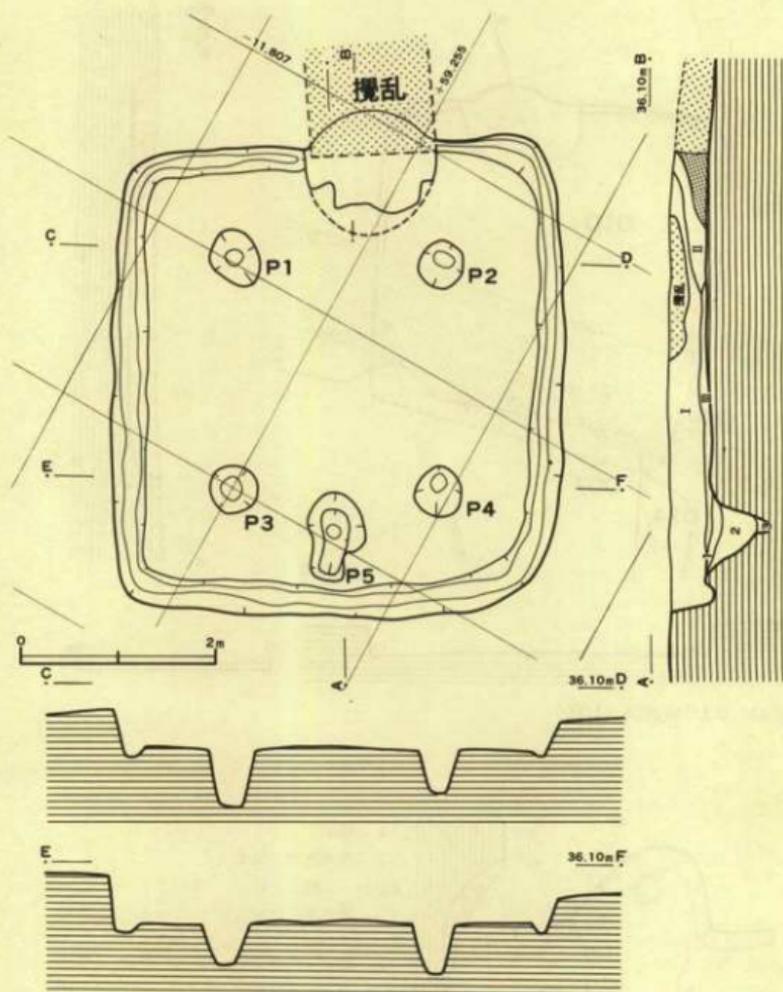


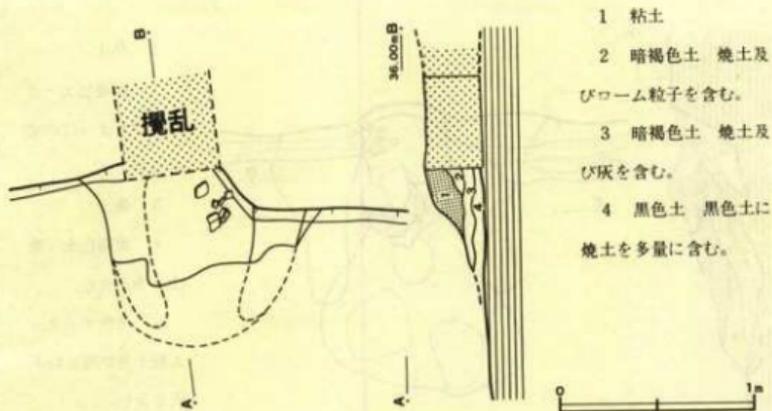
図22 O10カマド実測図 (1/30)

P₀は、約80×50cmの凹形と方形を組合せたような形で、床面から約80cm掘込まれていた。カマド側の凹形部分は、ほぼ垂直に掘込まれ、方形部分の壁は、南に向って斜になっていた。出入口に伴う施設の一つと考えられたが、他の住居にはこのような柱穴は認められなかった。



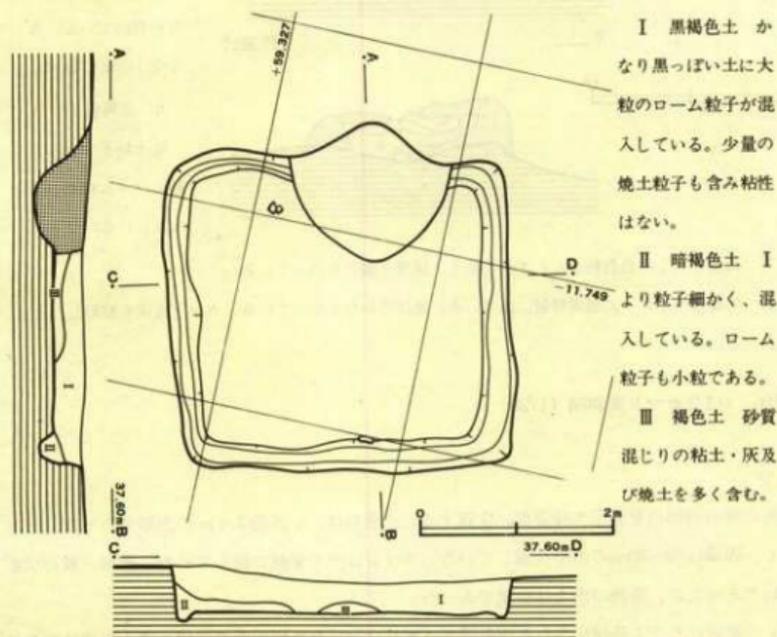
- I 暗褐色土 ロームブロック及び少量の焼土粒子を含む。粘性あまりない。
- II Iに似るがカマドからの粘土・山砂・灰等の混入が多い。
- III 暗褐色土 Iに比べ色調はやや暗く、粘性も多少みられる
- 1 暗褐色土 IIIに比べローム粒子の混入があり、色調はやや明るく粘性はない。
- 2 暗褐色土 1に比べロームブロックの混入がめだちやや暗い。
- 3 暗褐色土 ロームブロック・ローム粒子を含む。2より粘性がみられる。

図23 O11実測図 (1/60)



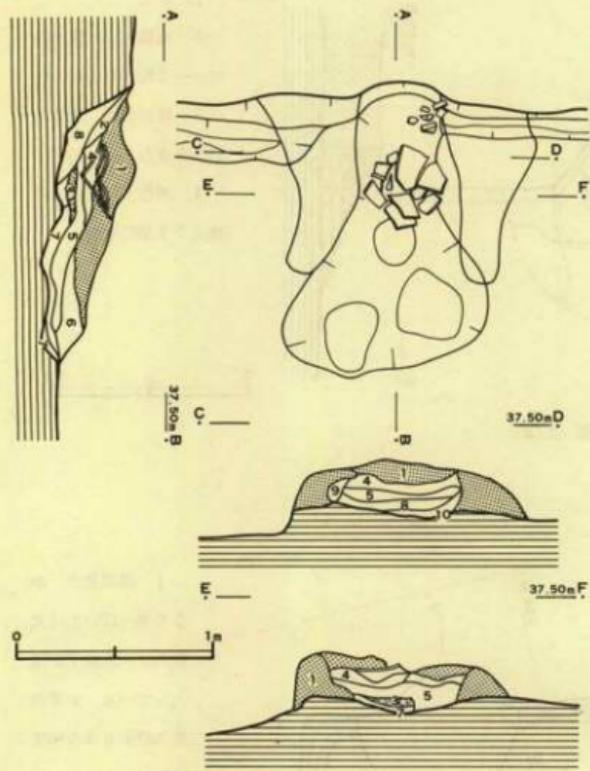
- 1 粘土
- 2 暗褐色土 焼土及びローム粒子を含む。
- 3 暗褐色土 焼土及び灰を含む。
- 4 黒色土 黒色土に焼土を多量に含む。

図24 O11カマド実測図 (1/30)



- I 黒褐色土 かなり黒っぽい土に大粒のローム粒子が混入している。少量の焼土粒子も含み粘性はない。
- II 暗褐色土 Iより粒子細かく、混入している。ローム粒子も小粒である。
- III 褐色土 砂質混じりの粘土・灰及び焼土を多く含む。

図25 O12実測図 (1/60)



- 1 粘土
- 2 暗褐色土 火を受けたように赤変している。
- 3 焼土
- 4 黄褐色土 焼土を多く含む。
- 5 黒色土 ローム粒子及び焼土粒子灰を含む。
- 6 黄褐色土 ローム粒子及び多量の焼土粒子を含む。
- 7 褐色土 掘り方を埋めている。火を受けた赤変している。
- 8 黒褐色土 灰・焼土粒子を含み大粒のローム粒子の混入みられる。

- 9 褐色土 1の白色粘土がくずれて焼土・灰等と混じり合っている。
- 10 暗褐色土 ローム層漸移層に似ている。焼けてかたくなっている。カマド火床を整形したと思われる。

図26 012カマド実測図 (1/30)

012

北側台地の利根川を見下す縁辺部に位置する。平面形は、一辺約3.6mの方形であった。柱穴はなく、周溝は20-30cmの巾で全周していた。カマドはやや東側に偏っていた。遺構の残存状態は良好であったが、遺物の出土は少量であった。

012の東側にもう1基検出されたが崖際ぎりぎりになるため傾斜面の保護を考え調査は行わなかった。

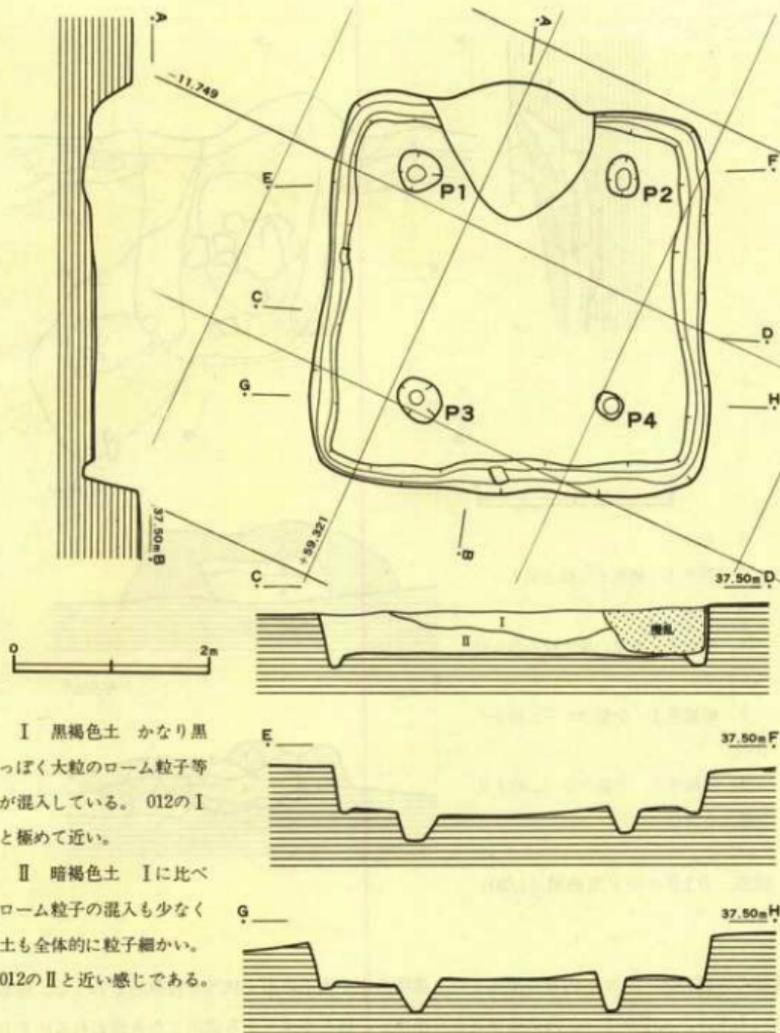
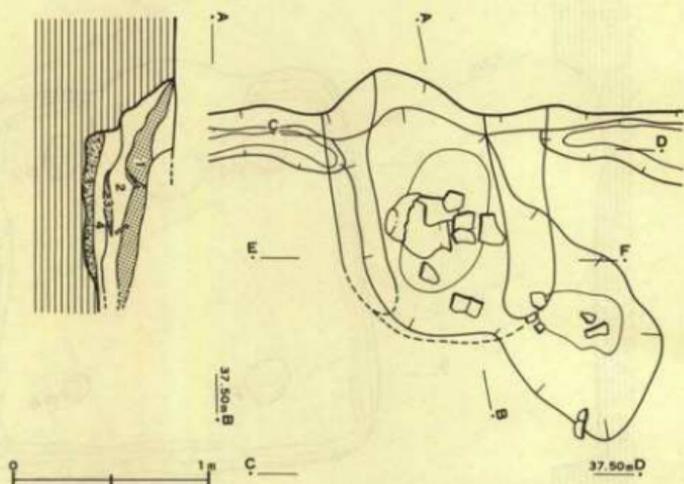


図27 013実測図 (1/60)

013

012と2m離れて検出された。平面形は一辺約4mの方形であった。北側壁が南側壁よりやや短いため、やや台形状をなす。柱穴は4個、周溝は全周していた。南壁中央部カマド正面の周溝内から縄文時代の石皿片が踏み台のようにした状態で検出された。



- 1 粘土
- 2 褐色土 褐色土に焼土混入。
- 3 焼土
- 4 黒色土 多量の焼土粒の混入がみられる。
- 5 暗褐色土 少量のローム粒子を含む。
- 6 暗褐色土 少量のローム粒子及び焼土を含む。

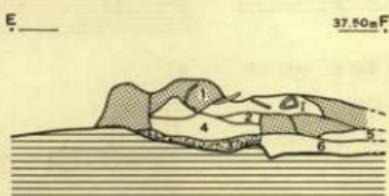
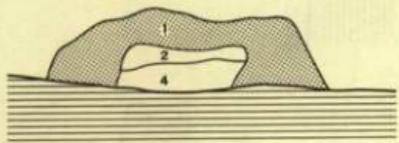


図28 O13カマド実測図 (1/30)

遺物の大部分は、カマド内から出土した。遺物の中で土玉の出土状況が特徴的であった。総数34点の土玉は、大半がカマド内火床付近から出土し、他もカマドから流出したと思われる灰まじりの土層中から発見された。土玉は、完形のものが多い。焼成が良好なものと、二次焼成を受けてもろくなったものがある。この出土状態が、土玉の製作（焼成）状況を示すものか、あるいは、使用状況を示すものかは、直ちには断じ難い。

カマドについてみると、断面（図28-5・6）に示されているように、以前に掘り方があり、これを埋めてカマドを構築している。この掘り方からは土器片が出土したが、掘り方の意味については、明らかにし得なかった。

- 1 暗褐色土 ローム粒子、稀にロームブロックを含む。
- 2 黒色土 ローム粒子、稀にロームブロックを含む。
- 3 暗褐色土 色調は1よりも明るい。ローム粒子、ロームブロックを含む。
- 4 暗褐色土 色調は3よりも明るい。ローム粒子、ロームブロックを含む。
- 5 暗茶褐色土 ローム粒子、焼土粒を含む。
- 6 黒褐色土 ローム粒子、ロームブロック、稀に焼土粒を含む。
- 7 暗茶褐色土 ローム粒子、ロームブロック、焼土粒を含む。
- 8 暗茶褐色土 色調は7よりも暗い。ローム粒子、ロームブロック、稀に焼土粒を含む。

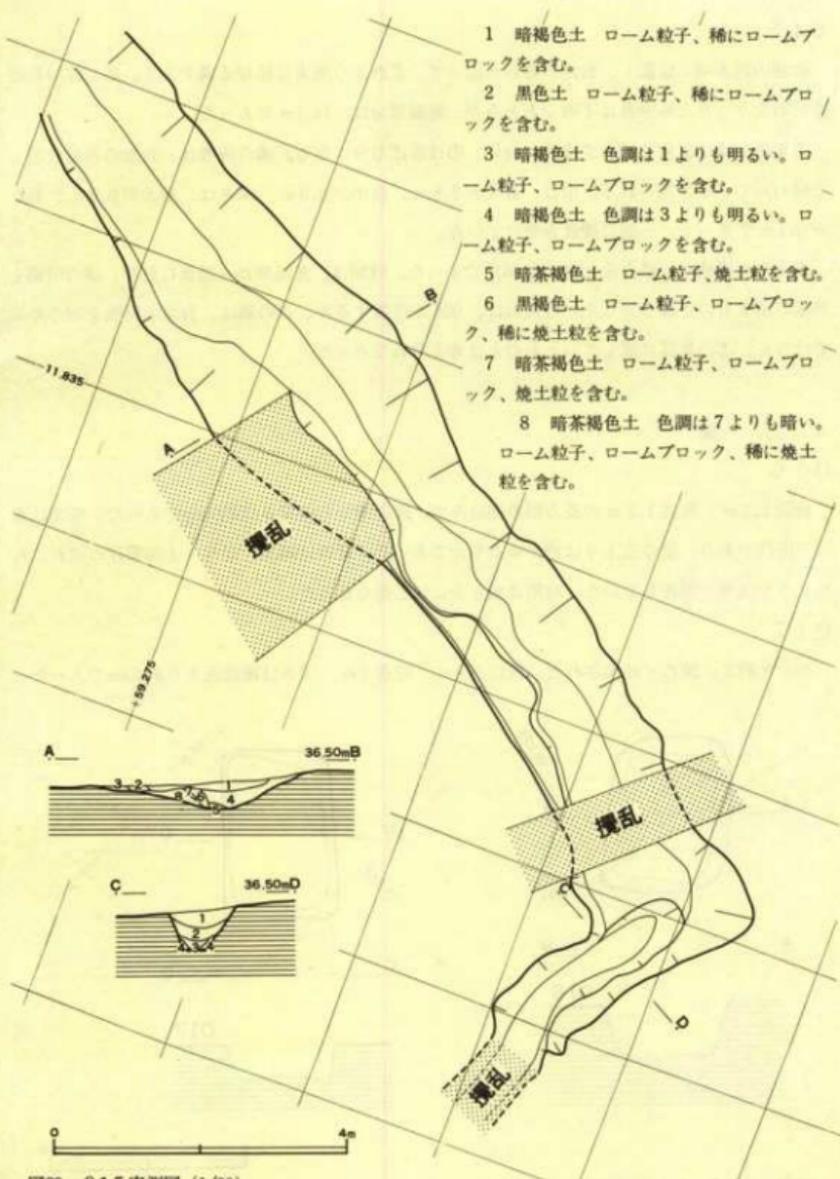


図29 O15実測図 (1/80)

3. 溝

015

台地の西南端に位置し、台地の縁辺に沿って、北西から南東に延びる溝である。溝全体の発掘を行わなかったため全長は不明であるが、発掘部分は、14.6mであった。

南東端でほぼ直角に折れて南西に向い、巾はほぼ半分になる。溝の両端は、台地の斜面に沿って終わっていると思われる。巾は、最大が2.8m、最小が0.9m、深さは、最大が0.6m、最小が0.4mであった。一部に擾乱を受けていた。

出土した遺物は、ほとんどが土器細片であった。時期は、鬼高期から近世に亘り、溝の時期を明確に示すものではなかった。付近には、006が位置するが、この溝は、台地の周囲を回るものではなく、この集落に属していたものとは考えられなかった。

4. 土 城

016

長辺1.5m、短辺1.2mの長方形の掘込みで、確認面からの深さは約60cmであった。底面はかなり凹凸があり、壁の立上りはややゆるやかであった。遺物は縄文土器片・土師器片が流れこんだような状態で混在していた。時期は明らかにし得なかった。

017

016と約3m離れて検出された。長辺1.8m、短辺1m、深さは確認面より約40cmであった。

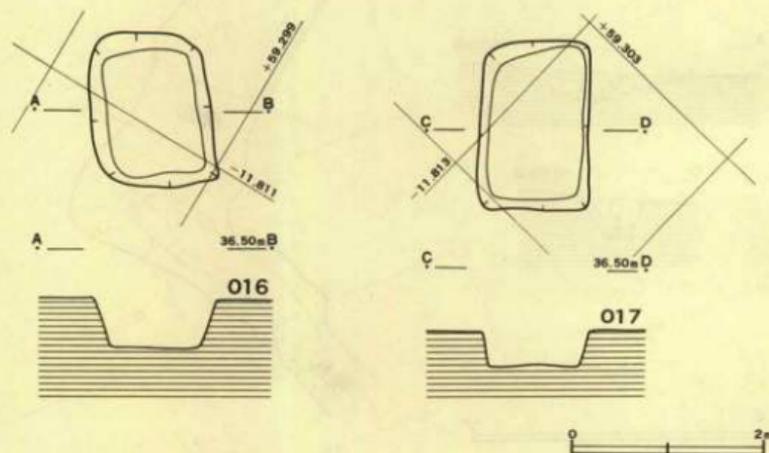


図30 016.017実測図 (1/60)

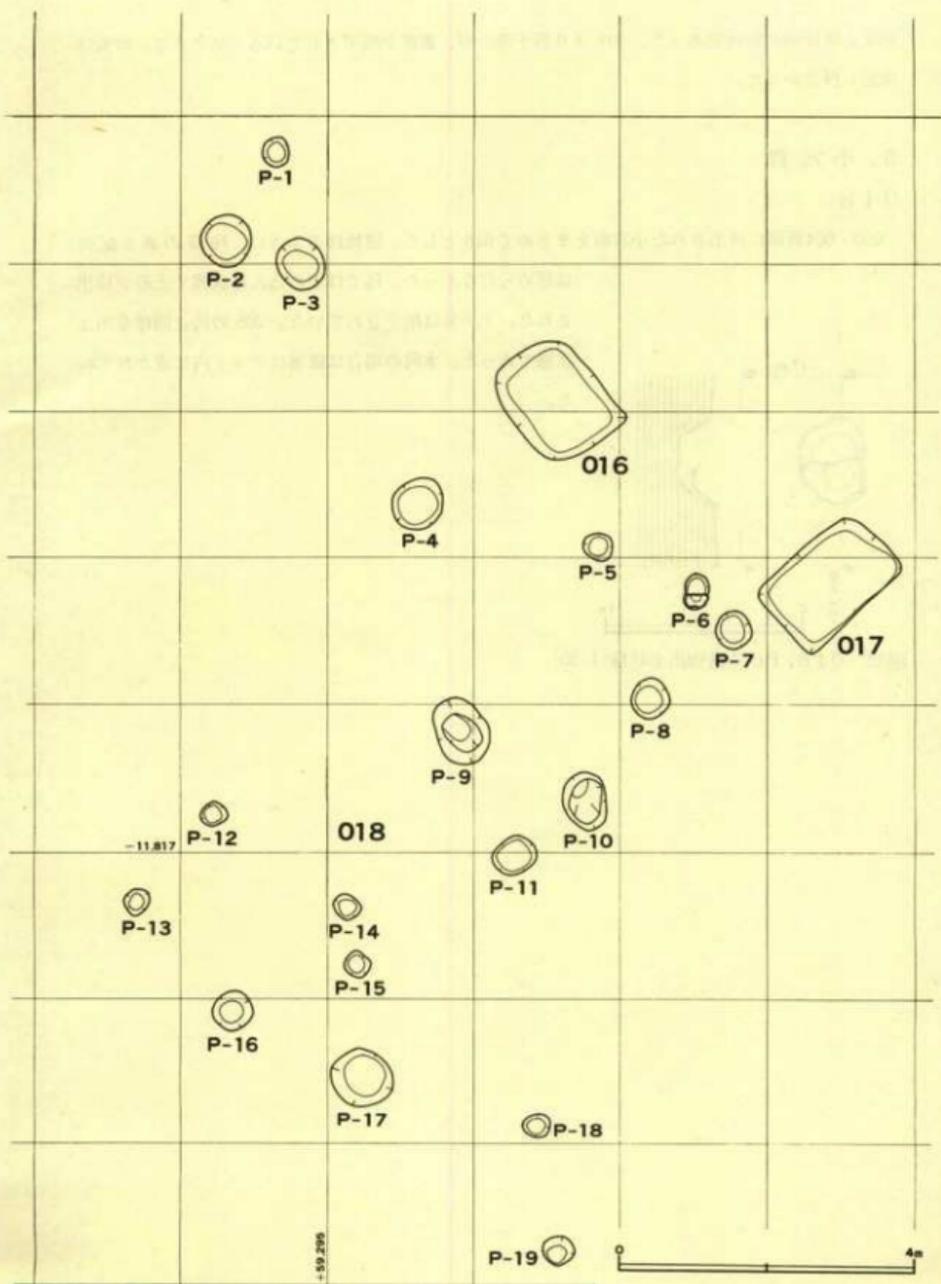


图31 016.017.018配置图 (1/80)

016 とほぼ同じ形状であった。016 より若干浅いが、表面が削平されているためである。時期は決定し得なかった。

5. 小穴群

018

003・004西側に検出された小穴群をまとめて018とした。建物跡のように、柱筋の通る配列は認められなかった。P₆では埋め込んだ状態で土器が検出された。上半分は削平されていた。005のP₆と同様な出土状態であった。本例の場合は確実にピット内に置かれていた。

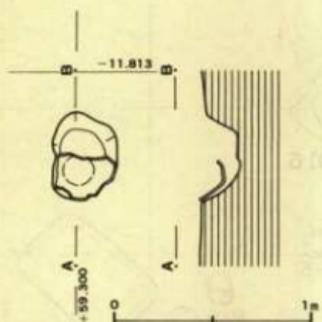


図32 018. P₆の遺物出土状態(1/30)

第3章 遺物

1. 遺物の概要

出土遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、陶器、石器であった。土師器、須恵器が多かったがこれらのほとんどは、竪穴住居から出土した細片が大多数を占め、カマド内、カマド付近から若干の完形品、完形に復元可能な土器が出土した。縄文土器は、いずれも破片で、ほぼ全域から出土した。

石器は、4点にすぎなかった。なお、各遺構から量の多少はあるが、焼石が出土した。

遺構出土の遺物は2節に示したが、002・014出土の遺物は図示していない。002は、遺存状態が悪く、遺物は全部が細片であった。内面にかえりのある須恵器の坏蓋、須恵器坏の破片が出土した。014は、007・010と複合し、覆土中から出土した遺物は007・010出土遺物とほとんど区別ができず、床面直上の遺物も検出できなかったため、明確に014に属する遺物は確認できなかった。

なお、遺物実測図の中で、断面に輪積み成形の接合部位を示した箇所があるが、これは、遺物において接合が明瞭に観察された部位のみを図に示したものである。

2. 縄文土器

縄文土器は、ほぼ全域から出土した。表土除去後、残された包含層中及び古墳時代以降の竪穴住居の覆土中からの検出でありすべて破片であった。縄文時代早期（三戸式）の土器を主体とし中期に属する土器も出土している。なお、縄文時代の遺構は検出されなかった。

第1群土器

第1類 (図33 1～17)

基本的な施文として、横位または縦位に走る細い沈線を有する土器を本類とした。全体として焼成は良好で胎土も緻密であるが、石英細砂粒の混入がみられる。色調は黄褐色で、内・外面ともよく研磨されている。口縁部は平縁で、ほぼ垂直に近く立上がるもの(2・4・5・17)と、やや外反するもの(1・3・7・13)及び波状になるものがある。また、3・8・13のように器面と同様の細い沈線を口唇部に加えるものもある。口縁部は大半が平縁であるが、1のように内側が大きく傾斜するものと、13のように外側が傾斜するものがある。

沈線は、横走と縦走が多いが5・9・10のように縦と横の沈線を組合わせた区画を設け、内側を斜向沈線で埋めているものもある。16は薄手で、焼成は良好・内面もよく研磨されている。条痕が外面にのみ施されている。

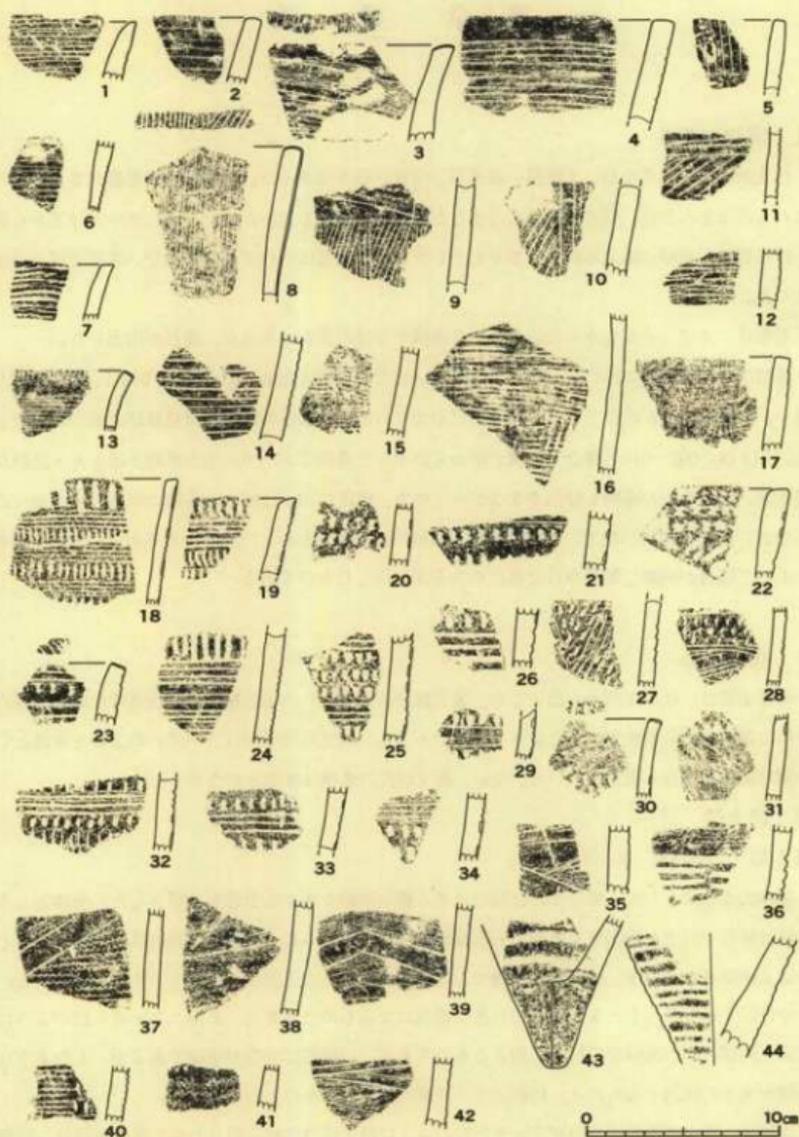


图33 繩文土器拓影图 (1)

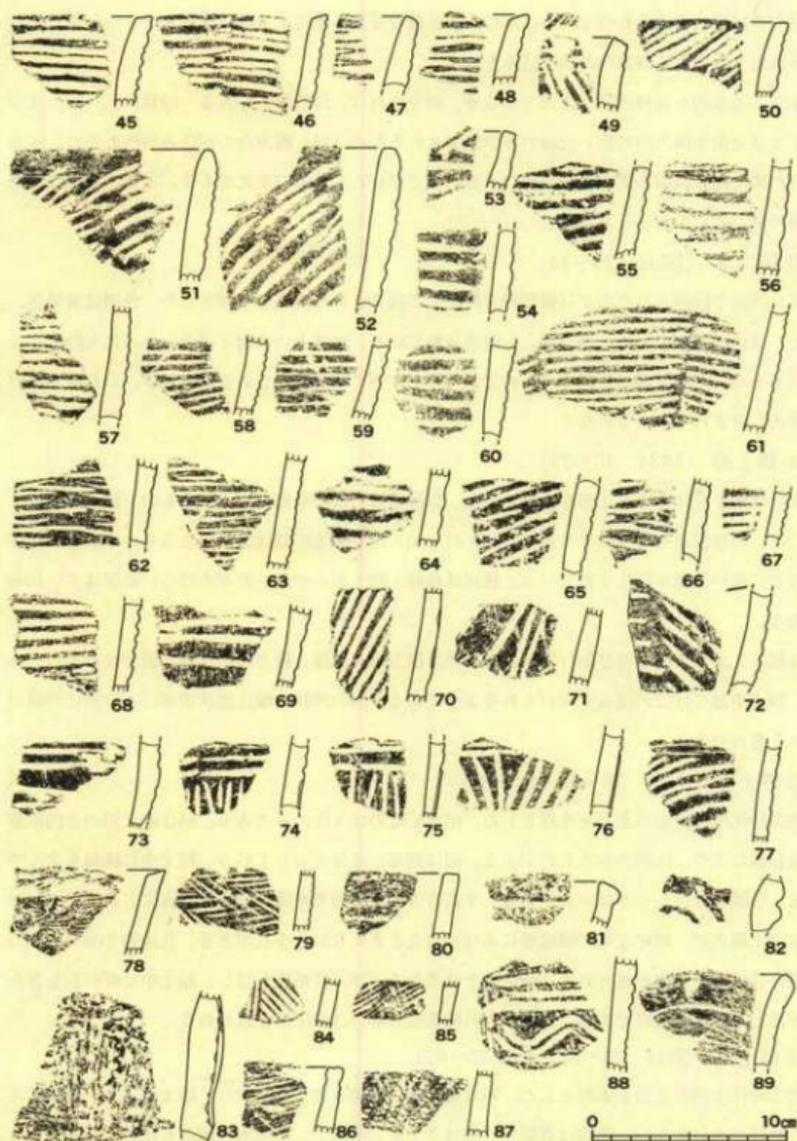


图34 绳文土器拓影图 (2)

第2類土器 (図33 18~34)

18が本類の代表的なものである。縦に入る半截竹管文と横走る細い沈線を(3~5条)入れへら状施文具による縦方向の切り込みを施す。

本類の基本的な文様構成は上記であるが、細分すれば、口唇部から入る一段目の太い縦の沈線の下ほぼ全面が横方向の細い沈線のみで施文されるもの(24)、縦方向の切込みの代わりに、区画された横位置の沈線の間を半截竹管による刺突で埋めたもの等の変化がある。本類土器には器壁外面の荒れたものがみられた。

第3類土器 (図33 35~44)

細い沈線で区画された内が貝殻腹縁を押圧して施文された土器を本類とした。色調は黄褐色、胎土、焼成ともに良好で、内外面とも研磨されている。36は太い沈線と組合わさったものである。胴部下半は、太い沈線に変化するものであろう。すべて胴部破片である。本類は、いわゆる田戸下層式に含まれるものであろう。

第4類土器 (図34 45~77)

太い沈線を主体とする土器を本類とした。口縁部は、ほぼ垂直に立上がるもの(46・51・52・54)と、口唇部がやや外反するもの(45・47~50)とがある。53は波状になるものである。49は口唇部に細い沈線が刻込まれている。焼成は良好・胎土がやや荒いのがめだつ、器厚は8~15mmである。

沈線は、大半が横走及び斜行する。74~76は横方向の沈線と縦方向の沈線を組合せたものである。胴下半部にはこの構成が用いられるようである。53の波状口縁は波状頂部にA字形に沈線が入ると思われる。

第2群土器 (図34 78・83・84・86)

縄文時代早期後半の土器を本類とした。出土したのは4片のみである。84は縦と斜の方向の細い隆起線により、区画されるものである。83は胴部に隆帯を有している。胎土中に繊維を含んでいる。摩滅がはげしくボロボロである。半截竹管による刺突が隆帯にそって施文されている。86は茅山下層式で、破片左側に焼成前にあけられたと考えられる小孔がある。孔径約3mmで、穴の周辺には使用した痕が見られず、補修孔とは異なる。78は黄褐色を呈し、胎土中に細砂粒を含み内外面とも良好な焼成である。施文は、貝殻条痕あるいは背圧痕と思われる。

第3群土器 (図34 79~82・85・87~89)

縄文時代中期の土器を本群とした。79は綾杉状の沈線を施文しており、胎土は黒色、焼成はあまり良好とはいえない。色調は黄褐色。88はやや荒い胎土で、器壁内外面ともに荒れ気味である。胎土中に細かい石英粒を含み、赤褐色を呈する。79は五領ケ台式、88は阿玉台式であろう。

81・82は加曾利E式である。その他80・85・87は、縄文時代中期に属すると思われるが、細片

であり形式を比定できない。87はかなり荒いL $\left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right.$ の斜縄文が施されている。89は、かなり焼成の悪い黄褐色を呈する土器で、ゆるやかな波状口縁をもつと思われる。補修孔がある。表面は摩滅しており、文様は不明である。拓本では沈線がみられる。縄文時代前期後半ぐらいに位置づけられよう。

3. 竪穴住居出土の遺物

001 (図35・36・表2・3)

ほとんど被線となった受部をもつ土師器環と須恵器は鈕付坏蓋、小形高台付盤が出土した。真間式であるが、他に鬼高式の環、甗取手が出土した。これは擾乱が著しいためと考えられる。

土器のほかには、面取土玉、鎌形石製模造品が出土した。土玉は他の住居からも多く出土したが、面取りを施したものは、本例1点のみである。鎌形石製模造品は、刃巾が広く、似た形の自然石から作られている。

003 (図37・表4)

土師器の環は、鬼高式最終末期、の形態を示す。

004 (図38・表5)

土師器は環、甗である。環はロクロ成形で、口径と底径の差が小さく、やや深いものである。真間式である。須恵器は、甗、鈕付坏蓋である。甗は胎土が精製され、焼成も良好であるが、坏蓋は胎土が荒く、焼成も甗に比べると良くない。生産地が異つたためと考えられる。

005 (図39~42・表6~9)

土師器は丸底の環で、椀形はない。須恵器の環は椀形である。土師器の甗は、口縁部が強く外反し、口唇が立ち上がる。胴部の最大径は上半部にあり、下半部は縦方向にヘラなどで整形が施されている。真間式の中頃である。土器のほかには、土製支脚2点、土玉3点、土錘4点、メノウ製勾玉の尾部1点が出土した。

006 (図43・表10)

ヘラ記号のある土師器の環、滑石製紡錘車である。坏片は、受部をもつ環の体部~口縁部であり、ヘラ記号は体部に施されている。ヘラ記号を施された環は、007・008からも出土した。3点とも体部にヘラ記号が施されており形態も似ている。006からは、ほかにも受部をもつ環の破片が出土した。鬼高式である。滑石製紡錘車は截頭円錐形で、側面に2条の沈線がある。

007 (図44~46・表11~13)

すべて土師器で、甗、甗、環がある。環はすべて受部をもつ丸底のものである。鬼高式である。時期は異なるが、縄文時代の磨石片が出土した。

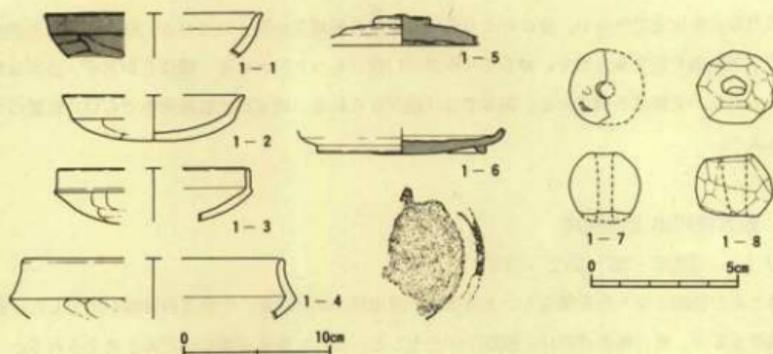


図35 001 出土遺物実測図 (その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
1-1 (001) (0001)	赤彩環 口縁部 瓦	口縁部は外傾して立ち上がり、やや外反する。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、へう削り整形。 内面、口縁部、よこなで調整。体部、へう磨き。	褐色、灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
1-2 (001) (0003)	環 口縁部 一底部 瓦	丸底の浅い環である。口縁部は外傾して立ち上がり、 やや外反する。体部と底部との区別はない。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、へう削り整形。 内面、全体にへう磨き。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、柱穴P ₁ 内
1-3 (001) (0001)	環 口縁部 瓦	丸底の浅い環である。口縁部は体部より直立する。受 部をもち、体部と底部との区別はない。 外面、口縁部、よこなでへう磨き。体部、へう削り整 形。内面、口縁部、よこなでへう磨き。体部、へう磨き。	灰褐色、灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
1-4 (001) (0001)	環 口縁部 瓦	やや大きな環である。口縁部は内傾して立ち上がり、 上半部で外反する。受部はほとんど縁になっている。器 壁は厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、へう削り整形。 内面、口縁部、よこなで調整。体部、へう磨き。	褐色、灰褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中
1-5 (001) (0004)	環 蓋 端部を 欠く	扁平な擬宝珠形の蓋をもつ。天井部は厚手である。 外面、天井部、回転へう削り整形。 ロクロ成形。右回転。	灰色、灰色 緻密、荒い砂を多く 含む 良好	須恵器、柱穴P ₁ 内
1-6 (001) (0002)	高台付 盤 底部瓦	やや小さな盤である。体部は内傾しながら立ち上がり 厚さを減じて口縁部に向う。底部は中央が厚く、周辺に いくに随って薄くなる。底部中央が僅かに高台より下 に出る。付け高台をもち、断面は、外側がほぼ垂直な台形 である。 外面、底部、回転へう削り整形が施されているが、明 瞭な削り跡はない。体部、回転へう削り整形。高台部、 回転で調整。 ロクロ成形。右回転。	灰色、灰色 緻密、細砂を少量含 む 良好	須恵器、柱穴P ₁ 内
1-7 (001) (0004)	土玉 全体瓦	ほぼ球形。 整形は良い。面取りは不明。	褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、柱穴P ₁ 内、6g
1-8 (001) (0001)	面取土 玉 完形	整形は良い。表面に面取りが施されている。	暗赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 14g

表2 001 出土遺物表 (その1)

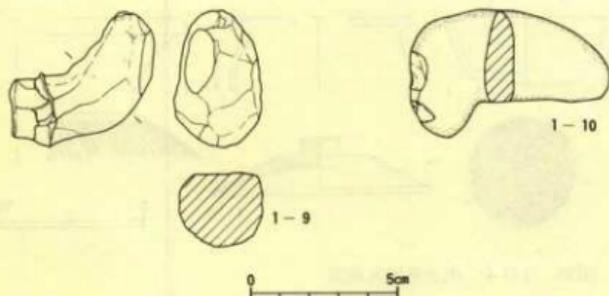


図36 001 出土遺物実測図(その2)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
1-9 (001) (0001)	甌の取 手はほぼ完 形	鈎状に曲った、短い取手である。甌の側面に差し込まれてあったと思われる。 手捏ね成形。	赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中
1-10 (001) (0001)	鎌形石 製模造 品はほぼ完 形	刃部が厚く、峰部が薄い。形状から鎌を模したと思われる。 峰部を打ち欠いて薄くしている。似た形の自然石を磨いて成形。	灰黒色と灰色とのま だら。	覆土中、頁岩、 38g

表3 001 出土遺物表(その2)

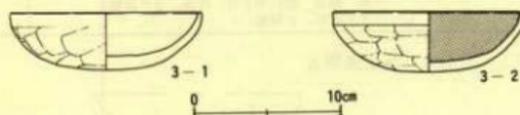


図37 003 出土遺物実測図

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
3-1 (003) (0004)	環 完形	丸底の環である。口縁部はやや強く内彎し、口唇は上を向く。体部と底部との区別はなく、ゆるやかに内彎しながら口縁部に至る。 外面、口縁部、よこまで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、全体によこまで調整。	黒色、黒褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、床直上
3-2 (003) (0001)	内黒環 全体迄	丸底の環である。口縁部はほぼ直立する。体部と底部との区別はなく、ゆるやかに内彎しながら口縁部に至る。外面、口縁部、よこまで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこまで調整。体部、ヘラ磨き。	赤褐色、黒色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 内 レベル、35.96m

表4 003 出土遺物表

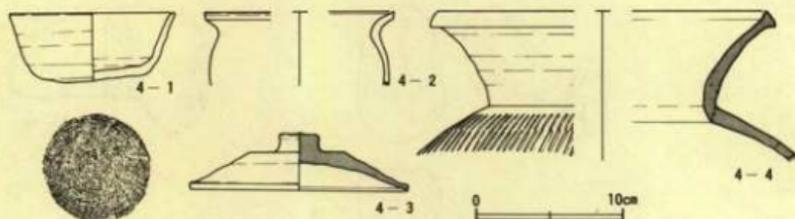


図38 004 出土遺物実測図

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
4-1 (004 ,0006)	ほぼ完 形	体部は底部から屈曲して、直線的に立ち上がり、上半部でやや外反して口縁に至る。底部は外側にやや膨らむ。内面の底部と体部との境にしめをもつ。底部、回転ヘラ切りのままとと思われる。ロクロ成形、右回転。	赤褐色、灰褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 内、 レベル、36.20m
4-2 (004 ,0005)	小形壺 口縁部 ~胴部 1/2	ひきしまった頸部から外反した口縁部をもち、口唇はやや立ち上がる。胴部は肥厚する。胴部は玉子形を示すと思われる。胴部から厚さを減じて内彎しながら底部に向う。外面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部、割製のため整形は不明。内面、などで調整。輪積み成形。	褐色、褐色 やや密、細砂を多く 含む 良	土師器、カマド 内一括
4-3 (004 ,0011)	環蓋 端部1/2 欠	縁は短い円筒形で、上面中央が僅かに突出する。天井部は厚く平坦である。体部は天井部から外傾して、厚さを減じながら直線的に増部に至る。端部は外側へ折れ曲り、小さなかえりが垂下する。外面、天井部~体部、回転ヘラ削り整形。ロクロ成形、右回転。	灰色、灰色 緻密、荒い砂を多く 含む 良	須恵器、覆土中
4-4 (004 ,0009)	壺 口縁部 ~胴部 1/2	ひきしまった頸部から強く外反して口縁部に至る。口縁部は縁帯状になってやや垂れ下がり、口唇は内傾して立ち上がる。胴部は頸部から厚さを減じながら大きく開く。外面、胴部、軽い叩き目。内面、などで調整。ロクロ成形、右回転。	灰色、灰色 緻密、細砂を少量含 む 良好	須恵器、床直上

表5 004 出土遺物表

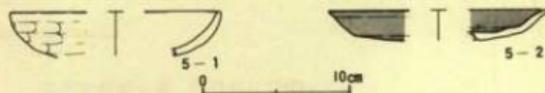


図39 005 出土遺物実測図(その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
5-1 (005 ,0008)	環 口縁部 1/2	丸底の環と思われる。ゆるやかに内彎する体部からやや強く内彎する口縁部に至る。口唇は開き気味である。外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、全体によこなで調整。	褐色、褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
5-2 (005 ,0008)	赤彩環 口縁部 ~底部 1/2	盤状の浅い環である。浅い体部から大きく開いた口縁部が立ち上がる。口唇はやや外反する。内面の体部と口縁部との境に段をもつ。外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこなでヘラ磨き。体部、ヘラ磨き。両面赤彩。	断面、褐色 密、細砂を少量含 む 良	土師器、覆土中

表6 005 出土遺物表(その1)

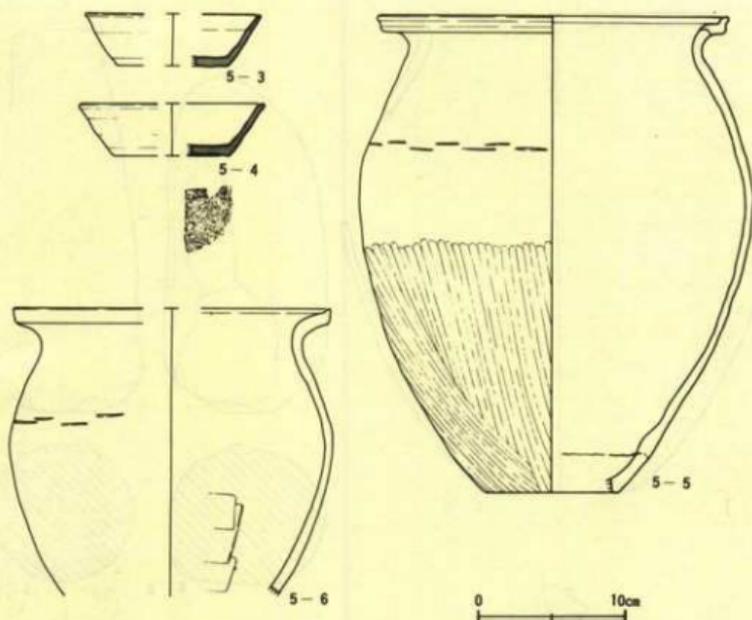


図40 005 出土遺物実測図(その2)

遺物番号	器形 保存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
5-3 (005 .0008)	坏 全体 $\frac{1}{4}$	底部はやや厚手である。体部は底部から鋭く立ち上がり、やや内彎して口唇に至る。口唇は僅かに、しかし強く外反する。 外面、底部、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	灰色、灰色 緻密、細砂を極少量含む 良好	須恵器、覆土中
5-4 (005 .0007)	坏 口縁部 ~底部 $\frac{1}{4}$	底部はやや厚手である。体部は底部から外傾して直線的に立ち上がる。口唇は僅かに外反する。 外面、底部、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	灰色、灰色 緻密、細砂を極少量含む 良好	須恵器、カマド内一拵
5-5 (005 .0004)	甕 底部欠	ひきしまった頸部から口縁部がほぼ直角に外反し、口唇は立ち上がる。胴部は玉子形で、最大胴径は中央からやや上にある。 外面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部下半部、ヘラなどで調整。内面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部などで調整。 輪積み成形。	赤褐色、灰褐色 やや密、荒い砂をやや多く含む 良	土師器、柱穴P。 上 レベル、35、27m
5-6 (005 .0005)	甕 口縁部 ~胴部 $\frac{1}{4}$	ひきしまった頸部から肥厚した口縁部が外反し、口唇はやや立ち上がる。胴部は玉子形で、最大胴径は胴部上半部にある。 外面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部、叩き目。内面、などで調整。ヘラ当て跡。 輪積み成形。	赤褐色、赤褐色 やや密、荒い砂を多く含む 良	土師器、カマド内 レベル、36、09m

表7 005 出土遺物表(その2)

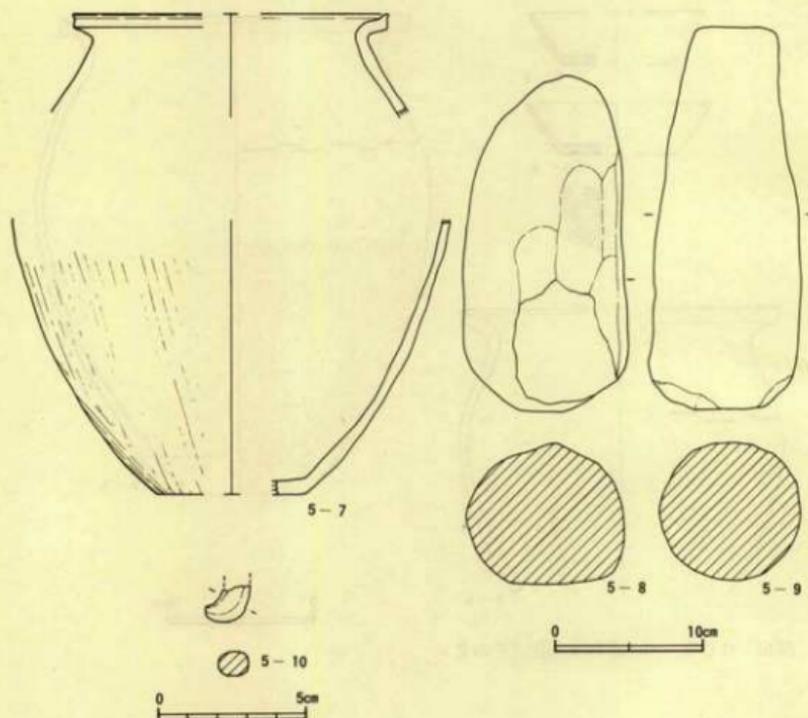


図41 005 出土遺物実測図（その3）

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調（外内） 胎土・焼成	備考
5-7 (005) (0010)	壺 口縁部写 胴部一 底部	ひきしまった胴部から強く外反した口縁部をもち、口唇は立ち上がる。胴部は玉子形を示す。胴部の開きがやや大きい。 外面、口縁部一帯部、よこなで調整。胴部下半部、ヘラなどで整形。内面、口縁部、よこなで調整。胴部、などで調整。 輪積み成形。	赤褐色、灰褐色 やや赤、寛い砂を やや多く含む 良	土師器、柱穴内 内
5-8 (005) (0003)	土製支 脚 全体写	断面は円に近い楕円形である。全体の形は不明であるが、5-9と同形と思われる。	赤褐色 粗、砂質、寛い砂を 多く含む やや良	土師器、柱穴P、 上 レベル、35.46m
5-9 (005) (0002)	土製支 脚 完 形	細長い円錐形の頸を切った形である。断面は、ほぼ円形である。	赤褐色 粗、砂質、寛い砂を 多く含む やや良	土師器、カマド 内 レベル、36.00m
5-10 (005) (0001)	勾玉 尾 部	表面の整形は良い。	白色と茶色とのまだら	床直上、メノウ 製、2g レベル、36.02m

表8 005 出土遺物表（その3）

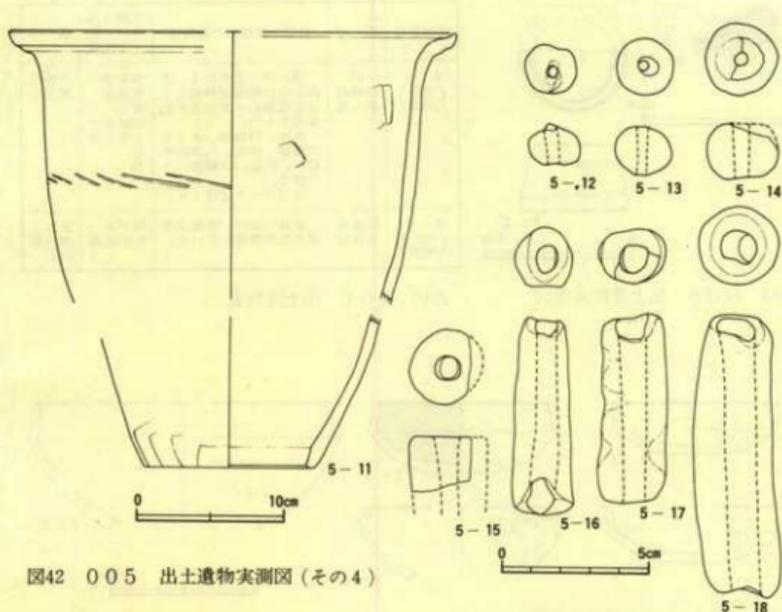


図42 005 出土遺物実測図(その4)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
5-11 (005 0008)	甕 口縁部 写 底 部	口縁部は強く外反し、口唇はやや立ち上がる。口縁部外面に段をもつ。頸部と胴部との区別はなく、やや内彎しながら底部に至る。 外面、口縁部、よこまで調整。胴部上半部、印き目。胴部下端、ヘラ削り整形。内面、胴部、ヘラ当て跡。胴部下端、面取り。	灰褐色、灰褐色 やや密、荒い砂を多く含む 良	土師器、覆土中
5-12 (005 0008)	土 完 玉 形	やや扁平な球形。 整形は不良、面取りなし。	赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 3g
5-13 (005 0008)	土 玉 ほぼ 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 6g
5-14 (005 0008)	土 玉 全体 完 形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の両側面取り。	赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 9g
5-15 (005 0008)	土 鐘 端部 のみ	円筒形。 端は平らに整形されている。	赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 8g
5-16 (005 0008)	土 完 鐘 形	円筒形。 両端は未整形。	赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 28g
5-17 (005 0008)	土 鐘 ほぼ 完 形	円筒形。 両端は平らに整形されている。指によるなで調整の跡がある。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 35g
5-18 (005 0007)	土 完 鐘 形	円筒形。 両端は未整形。	褐色 密、やや荒い砂を少量含む 良	土師器、カマド 内一筋、71g

表9 005 出土遺物表(その4)

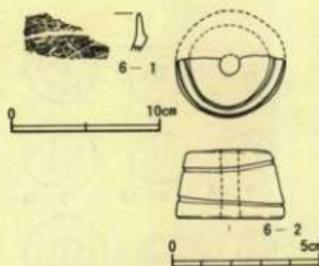


図43 006 出土遺物実測図

遺物番号	器形	器形・成整形の特徴等	色調(外内)・胎土・焼成	備考
6-1 (006) (0004)	環 口縁部 断面	浅い環と思われる。体部から口縁部が外傾してほぼ直線的に立ち上がる。受部をもつ。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、ヘラ磨き。 体部にヘラ記号「X」	明褐色 明褐色 密 細砂をやや多く含む 良	土師器 覆土中
6-2 (006) (0005)	紡錘車 全体写	截頭円錐形。両面は使用のための摩耗している。	緑がかった暗灰色	床直上 滑石製 28g

表10 006 出土遺物表

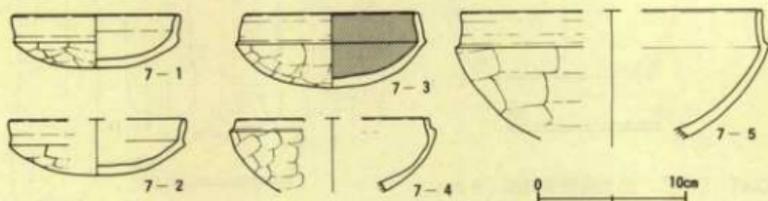


図44 007 出土遺物実測図(その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
7-1 (007) (0003)	環 口縁部 ~体部 1/4	丸底の浅い環である。口縁部はやや外傾して立ち上がる。受部をもち、受部上でしめをもつ。体部と底部との区別はなく、器壁は厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこなでヘラ磨き。体部、ヘラ磨き。	赤褐色、灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、柱穴P。 上 レベル、35.50m
7-2 (007) (0010)	環 全体写	丸底の浅い環である。口縁部は直立する。受部をもち受部上でしめをもつ。体部と底部との区別はなく、器壁は厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこなでヘラ磨き。体部、ヘラ磨き。	口縁部、黒色。体部 暗褐色。内面、暗褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
7-3 (007) (0014)	内黒環 ほぼ完 形	丸底のやや深い環である。口縁部は内傾して立ち上がり、やや内傾して口唇に至る。体に近い受部をもつ。体部と底部との区別はなく、器壁は厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこなでヘラ磨き。体部、ヘラ磨き。	口縁部、黒色。体部 暗赤褐色。内面、黒色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、床直上
7-4 (007) (0010)	環 口縁部 ~体部 3/4	体部の深い鉢に近い形の環である。口縁部は内傾して立ち上がる。受部をもつ。器壁は体部上端で肥厚し、又体部の中央に近づくと厚くなる。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部~体部中位、よこなでヘラ磨き。体部下半部、ヘラ磨き。	黒褐色、暗褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
7-5 (007) (0007)	環 (鉢) 口縁部 ~体部 1/4	大形の環である。口縁部は直立し、僅かに外反して口唇に至る。受部をもつ。体部は深く、鉢に近い形になる。器壁はやや厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ磨き。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 内 レベル、35.47m

表11 007 出土遺物表(その1)

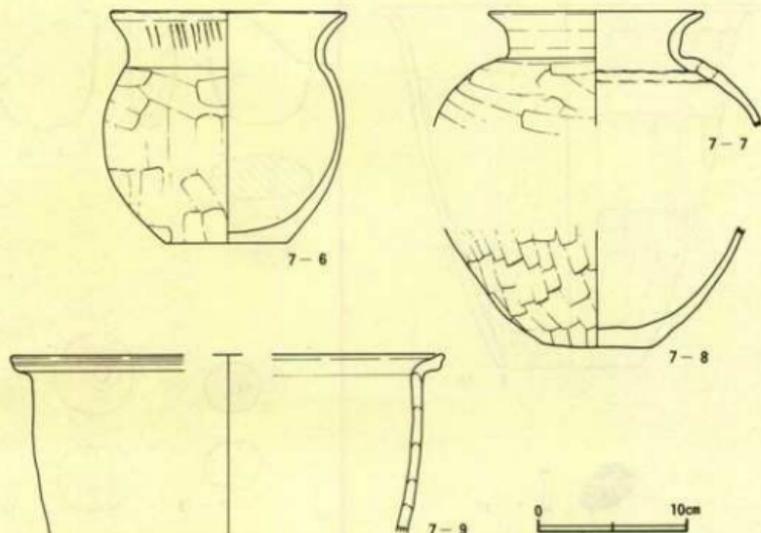


図45 007 出土遺物実測図 (その2)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
7-6 (0001)	甕 口縁部 ~胴部 欠	やや小形の甕である。ひきしまった胴部から外反した口縁部をもち、口唇はやや内彎する。口縁部は肥厚する。胴部と胴部との境に稜がある。胴部は球形に近く、広めの底部をもつ。口径と最大胴径がほぼ同じで、最大胴径はほぼ中位にくる。 外面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部、軽いヘラ削り整形。底部、ヘラ削りの後によこなで調整。内面、口縁部~胴上部、よこなで調整。胴部~底部、なで調整。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、床直上 レベル、35.47m
7-7 (0008)	甕 (壺) 口縁部 ~胴部	肥厚した胴部がやや外反して立ち上がり、強く外反して口縁部を形成する。胴部と胴部との境に段をもつ。胴部は上端が肥厚し、厚さを減じながら球状に内彎する。 外面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部、ヘラ削り整形。内面、口縁部~胴部、よこなで調整。胴部、なで調整。 輪積み成形。輪積み跡が胴部と胴部との境に見られる。	灰褐色、灰褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、捜乱溝 内 7-7と同一個 体と思われる
7-8 (0007)	甕 底部	底部は厚く、厚さを減じながら内彎して立ち上がり、胴部に至る。胴部の器壁は薄い。 外面、胴部~底部、ヘラ削り整形。内面、胴部~底部 なで調整。	灰褐色、黒色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、捜乱溝 中 7-7と同一個 体と思われる
7-9 (0010)	甕 (壺) 口縁部 欠	口縁部はほぼ直角に外反し、口唇はやや立ち上がる。口唇下に沈線をもち、口唇内面に微かに段をもつ。胴部と胴部との区別はなく、ゆるく内彎しながら底部に向う。胴部の器厚はほぼ一定である。 外面、口縁部、よこなで調整。胴部、なで調整。輪積み部に叩き目。内面、口縁部、よこなで調整。胴部、なで調整。 輪積み成形。	灰褐色、褐色 密、やや荒い砂をや や多く含む 良	土師器、覆土中

表12 007 出土遺物表 (その2)

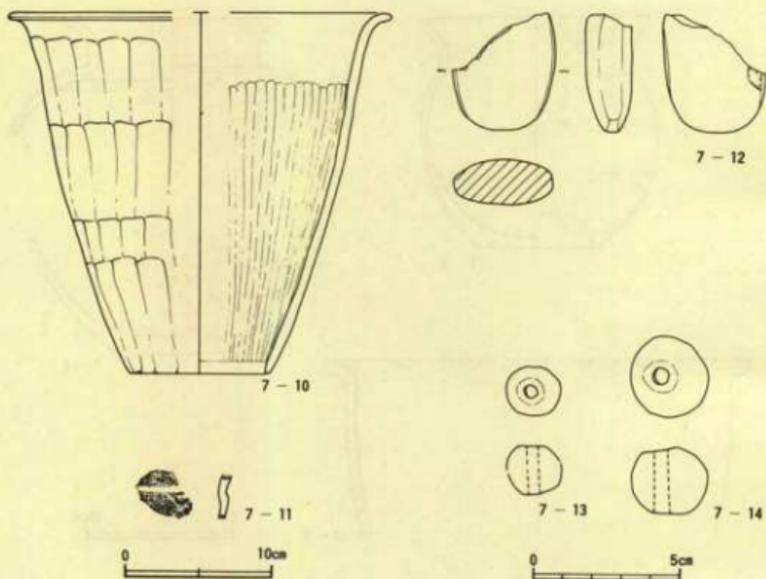


図46 007 出土遺物実測図(その3)

遺物番号	器形 遺存度	器形・或整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
7-10 (007 ,0006)	瓶 口縁部 ~底部	口縁部は強く外反する。胴部と頸部との区別はなく、やや内彎しながら底部に至る。器壁はほぼ一定である。外面、口縁部、よこなで調整。胴部、ヘラ削り整形。内面、口縁部~胴部上端、よこなで調整。胴部、ヘラなで整形。	黒褐色、褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 内レベル、35.44m
7-11 (007 ,0001)	杯 (鉢) 体部~ 口縁部 断面	受部をもつ鉢形に近い杯の体部~口縁部である。口縁は欠損している。口縁部は体部から外傾して立ち上がる。外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、ヘラ磨き。外面、体部、ヘラ記号「×」	赤褐色、黒色 密、やや寛い砂を少量含む。 良	土師器 床直上 レベル、35.47m
7-12 007-0005	磨石 全体片	長方形に近い楕円形と思われる。短辺の面には叩き跡があり、その他の面は磨かれている。	青灰色	覆土中、安山岩 238g
7-13 (007 ,0004)	土玉 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側が面取りされている。	赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中 4g
7-14 (007 ,0010)	土形 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側が面取りされている。	赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中 15g

表13 007 出土遺物表(その3)

008 (図47・48、表14・15)

土師器の甕、坏と須恵器の甕・壺、破片を利用した硯である。土師器坏のうち4点には墨書がある。4点のうち、1点はカマドの内部、2点はカマドの脇から出土しているのでこれらの墨書土器は、カマドに対する供献の品とも考えられる。墨書土器に関係する遺物としては、須恵器の甕片を利用した硯が出土した。斜線の部分が使用された箇所、網状の部分は、密が黒墨、薄いが朱墨の痕跡である。須恵器のうち8-14は胎土に特徴のある甕片である。胎土は黒色であるが、焼成は比較的良好である。国分式の古い時期である。

坏片のうち1点にヘラ記号があるが、この坏は鬼高式で、007から混入したと考えられる。また、灰釉長頸瓶の口縁部片が1点出土しているが、時期は008出土遺物よりも、やや新しいので他からの混入と考えられる。

009 (図49、表16)

遺構が、007・008と複合していたため、遺存状態が悪く、出土遺物は少なかった。土師器の坏甕の口縁部の形態は、真間式の新しい時期を示すと考えられる。土器のほかには土鍾が3点出土した。

010 (図50、表17)

遺構の擾乱が著しかったため、遺物はほとんどが細片である。土師器の坏、甕の口縁部の形態は、国分式の古い時期を示すと考えられる。底部外面に墨書のある坏1点、須恵器の高坏の脚部片1点、土鍾1点が出土している。

011 (図51・52、表18・19)

土師器の坏と甕である。坏はやや深い丸底である。甕は、口唇が僅かに立ち上がるものと、丸いものがある。真間式の古い時期である。

012 (図53～55、表20～22)

土師器の坏と甕である。坏は浅い丸底である。甕は口唇が僅かに立ち上がるものと、やや尖り気味で立ち上がりのないものがある。甕の口縁部にヘラ記号をもつものがある。真間式の新しい時期である。鬼高式の甕の取手が1点出土したが、他からの混入と考えられる。

013 (図56～60、表23～27)

土師器の坏・甕・甔と須恵器の坏、蓋坏である。ほかに土玉がまとまって出土した。土師器のうち坏は、やや深い丸底のものと、ロクロ成形による椀形のものがある。甕は、口唇が僅かに立ち上がる。甔は、鬼高式の最終末の形態を示している。真間式中頃と考えられる。

土玉は全部で34点出土した。球形で孔の片側が面取り整形されているものが最も多い。

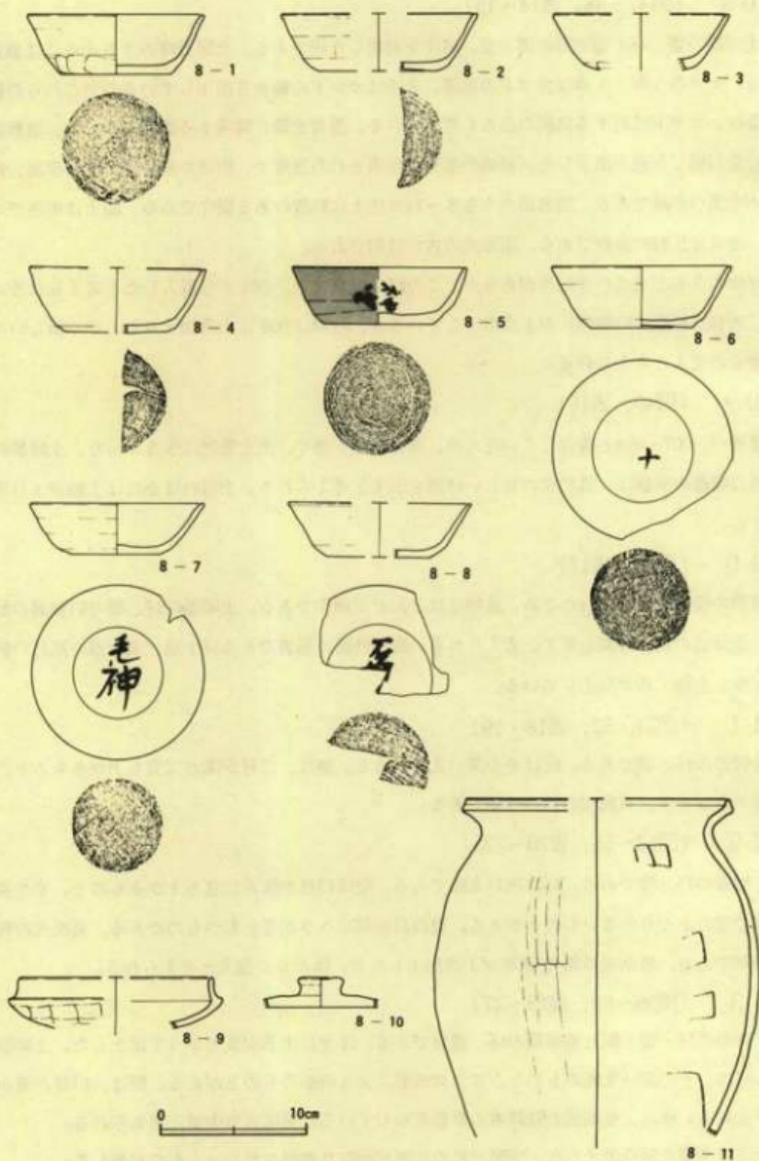


図47 008 出土遺物実測図(その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
8-1 (008) (0004)	環 ほぼ完 形	口径に比べて底部がやや広い環である。底部はやや厚い。体部は底部から内彎して強く立ち上がり、上半部でやや外反して口径に至る。 外面、体部下半部、ヘラ削り整形。底部、糸切りの後にヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	暗赤褐色、灰黒色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 脇 レベル、35.48m
8-2 (008) (0015)	環 口縁部 一底部 欠	やや深い環である。底部はやや上げ底で内彎して立ち上がり、体部に至る。体部は僅かに内彎する。口径はやや外反する。 外面、底部、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	褐色、褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
8-3 (008) (0015)	環 口縁部 一底部 欠	体部は底部から屈曲して立ち上がり、ほぼ直線的に口径に至る。口径はやや外反する。 外面、体部下端、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
8-4 (008) (0015)	環 全体欠	底部はやや薄手である。体部は底部から屈曲して立ち上がり、やや内彎しながら口縁部に至る。口径はやや外反する。 外面、底部、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	赤褐色、灰褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中
8-5 (008) (0009)	赤彩 墨書 環 ほぼ完 形	やや浅い環である。底部内面中央がやや振らむ。底部は厚手である。体部は底部から屈曲して立ち上がり、やや内彎して口径に至る。 外面、底部、回転ヘラ削り整形。体部下半部、回転ヘラ削り整形。 外面、体部一底部、赤彩、体部、墨書「神宮」。 ロクロ成形、右回転。	赤褐色、赤褐色 密、やや荒い砂を多く含む 良	土師器、カマド 内 レベル、35.16m
8-6 (008) (0003)	墨書 環 口縁部 欠	やや深い環である。底部はやや上げ底である。体部は底部から屈曲して立ち上がり、直線的に口径に至る。口径はやや外反する。 外面、底部、回転糸切りの後、ヘラ削り整形。 外面、底部、墨書、「十」。 ロクロ成形、右回転。	褐色、褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 脇 レベル、35.50m
8-7 (008) (0005)	墨書 環 ほぼ完 形	やや浅い環である。底部内面中央が振らむ。体部は底部からゆるやかに内彎して立ち上がり、直線的に口径に至る。口径は僅かに外反する。 外面、底部、ヘラ削り整形。 外面、底部、墨書、「毛神」。 ロクロ成形、右回転。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 脇 レベル、35.46m
8-8 (008) (0015)	墨書 環 口縁部 一底部 欠 底部中 央欠	底部からゆるやかに内彎して立ち上がり、体部に至る。体部は直線的で、口径がやや外反する。体部はやや大きく開く。 外面、底部、ヘラ削り整形。 外面、底部、墨書、「石〇…」。 ロクロ成形、右回転。	褐色、褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中
8-9 (008) (0015)	環 口縁部 一底部 欠	浅い環である。口縁部はやや内縮する。受部をもつ。体部と底部との区別はないと思われ、器壁は厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、口縁部、よこなでヘラ磨き。体部、ヘラ磨き。	灰褐色、灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
8-10 (008) (0014)	内黒 環 蓋 紐部	紐は背の低い数形を示す。 外面、天井部、ヘラ削り整形。内面、ヘラ磨き。中央部から放射状にヘラなでが施されている。	褐色、黒色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、機乱溝 内
8-11 (008) (0002)	甕 口縁部 一胴部 欠	ひきしまった胴部から強く外反した口縁部をもち、口径は立ち上がる。口径の内面に段をもつ。胴部は縦長の横円形で、最大胴部は、ほぼ中央である。 外面、口縁部一胴部、よこなで調整。胴部、ヘラなで整形。内面、口縁部、よこなで調整。胴部、板状のものを当てた跡がある。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 脇 レベル、35.40m

表14 008 出土遺物表(その1)

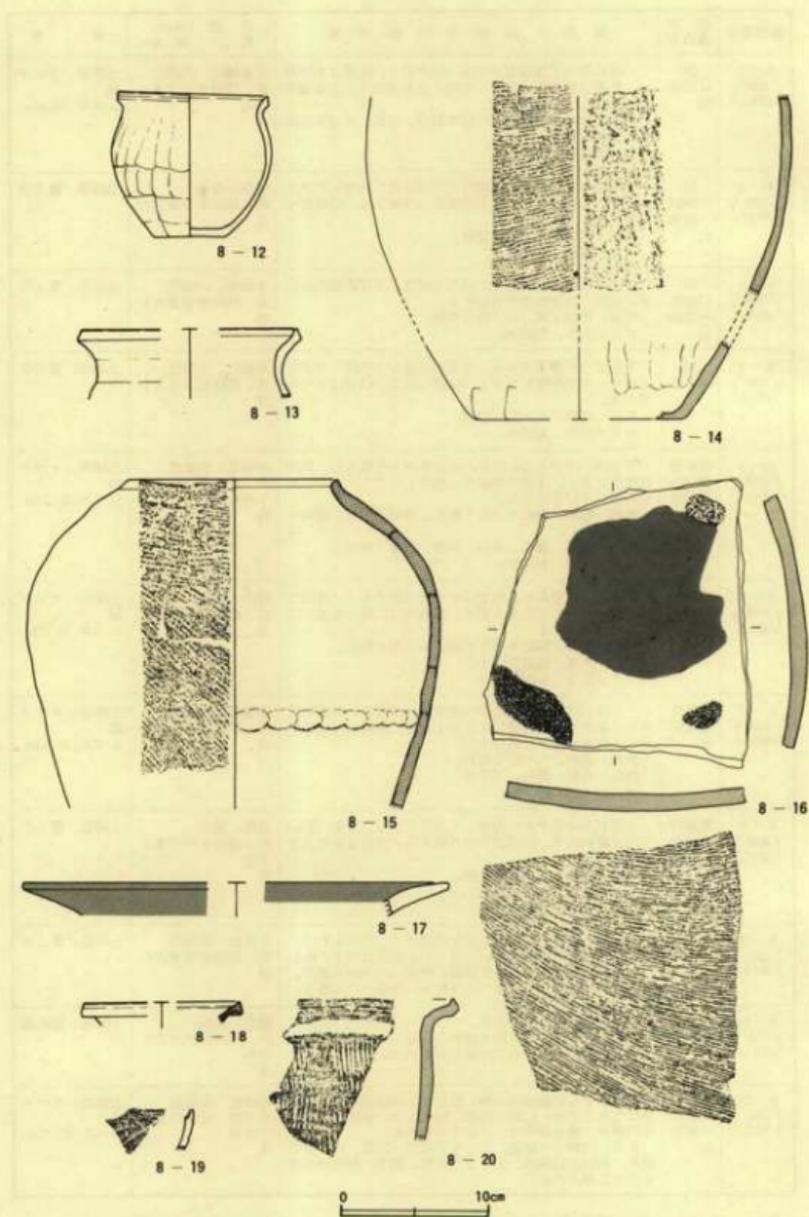


図48 008 出土遺物実測図(その2)

遺物番号	器形 透存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
8-12 (008) (0013)	甕 口縁部 3/4欠	小形の甕である。ひきしまった頸部から短い口縁部が外反する。口唇は立ち上がり、内面に段をもつ。口縁部及び頸部は器壁がやや厚い。胴部はすぼまりの玉子形で最大胴径は、中央よりやや上にくる。 外面、口縁部～頸部、よこなで調整。内面、へう削り整形。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を多く含む 良好	土師器、カマド 内 レベル、35.53m
8-13 (008) (0015)	甕 口縁部 3/4	ひきしまった頸部から外反して口縁部に至る。口唇はやや内傾して立ち上がる。胴部はやや内彎しながら広がると思われる。 外面、口縁部～頸部、よこなで調整。内面、口縁部、よこなで調整。頸部、指押えの跡。	赤褐色、赤褐色 密、荒い砂をやや多く含む 良好	土師器、覆土中
8-14 (008) (0019)	甕 胴部3/4 底部3/4	胴部は楕円形と思われる。底部は薄手である。胎土に特徴があり、黒色を示す。 外面、胴部、甲き目、などで調整。内面、胴部、当て具の跡。よこなで調整。	灰黒色、黒色 緻密、やや荒い砂を少量含む 良好	須恵器、床直上
8-15 (008) (0015)	無頸壺 口縁部 一胴部 3/4	胴部は玉子形と思われる。通常ならば頸部となる部位から小さな口縁部が直立する。 外面、胴部、甲き目。内面、胴部、などで調整。指押えの跡。	赤褐色、灰色 密、荒い砂をやや多く含む 良好	土師質須恵器 覆土中
8-16 (008) (0001)	甕 片	甕の胴部片である。外面に甲き目をもつ。内面中央部が摩耗している。墨、朱墨が付着している。墨、朱墨両用の甕と思われる。	暗灰色、暗灰色 緻密、細砂をやや多く含む 良好	須恵器、周溝内 土層直上 レベル、35.48m
8-17 (008) (0015)	赤彩壺 口縁部 3/4	口径の大きな壺形土器と思われる。厚手の口縁部が口唇へいくに随って薄くなる。口唇は角張っている。 外面、よこなで調整。内面、よこなで調整。 両面赤彩。	褐色、褐色 密、細砂を多く含む 良好	土師器、覆土中
8-18 (008) (0015)	長頸瓶 口縁部 3/4	口縁部が大きく開く。口縁は縁帯を形成し、やや垂れ下がる。口唇は立ち上がる。全体に灰釉がかかっている。	灰色、灰色 淡緑色の灰釉がかかっている 緻密、砂粒はほとんどなし 良好	灰釉陶器、覆土中
8-19 (008) (0014)	黒彩杯 体部断面	受部をもつ杯の体部。 外面、体部、へう削り整形。内面、体部、へう磨き。 外面、体部、へう記号「×」。	黒色、黒色 密、細砂をやや多く含む 良好	土師器、擾乱溝内
8-20 (008) (0015)	甕 口縁部 一胴部 断面	胴部から強く折れ曲った口縁部をもち、口唇は立ち上がる。口唇直下が面取りされている。頸部と胴部との区別はなく、胴部はやや内彎しながら底部に向う。 外面、口縁部、回転よこなで調整。胴部、甲き目。内面、口縁部、回転よこなで調整。胴部、などで調整。	暗灰色、暗灰色 緻密、やや荒い砂を少量含む 良好	須恵器、覆土中

表15 008 出土遺物表(その2)

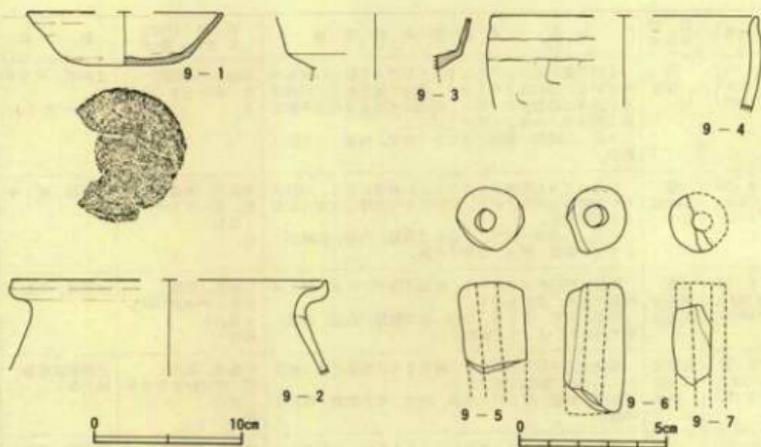


図49 009 出土遺物実測図

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
9-1 (009 .0001)	坏 口縁部 欠	底部と体部との境にくびれがある。体部は直線的に立ち上がり、中間からやや外反する。口唇は僅かに内彎して丸くなる。体部の開きはやや大きい。外面、底部、へう削り整形。ロクロ成形、右回転。	暗褐色、暗褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師質須恵器 覆土中
9-2 (009 .0001)	甕 口縁部 一部欠	ひきしまった頸部から強く外反した口唇をもち、口唇は垂直に立ち上がる。頸部はやや肥厚する。胴部は器厚を減しながら開く。外面、口縁部～頸部、よこなで調整。内面、口縁部よこなで調整。	明褐色、褐色 やや密、荒い砂を多く含む 良	土師器、覆土中
9-3 (009 .0001)	高台付 坏 体部欠	底部は厚く、高台を付けた跡がある。体部は底部から外傾して直線的に立ち上がる。ロクロ成形、右回転。	灰色、灰白色 緻密、やや荒い砂を少量含む 良好	須恵器、覆土中
9-4 (009 .0001)	鉢 口縁部 一部欠	頸部と胴部との区別はなく、胴部からやや外反して口縁部となり、口唇は丸い。胴部は内彎しながら底部に向う。外面、口縁部、よこなで調整。胴部、へう削り整形。内面、口縁部、よこなで調整。胴部、なで調整。輪積み成形	褐色、灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
9-5 (009 .0001)	土 甕 全体欠	円筒形。 片側の端が残っており、平らに整形されている。	赤褐色 やや密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 12g
9-6 (009 .0001)	土 甕 端部欠	円筒形。 端が平らに整形されている。側面の一部が縦に面取りされている。	赤褐色 やや密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 19g
9-7 (009 .0001)	土 甕 片	円筒形と思われる。	赤褐色 やや密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 5g

表16 009 出土遺物表

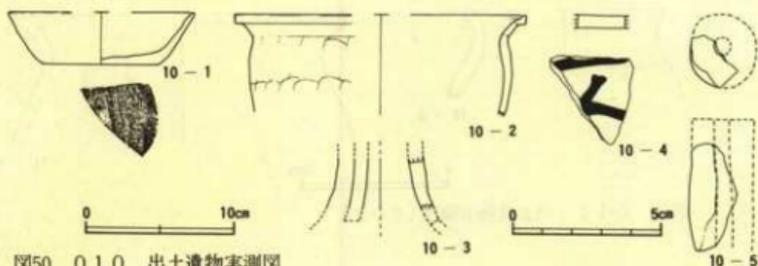


図50 010 出土遺物実測図

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
10-1 (010) (.0004)	環 口縁部 ~底部 %	底部中央は薄い。体部は底部から内彎して立ち上がり 口唇に至る。口唇はやや外反する。 外面、底部、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	赤褐色、赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
10-2 (010) (.0004)	壺 口縁部 ~胴部 %	小形の壺である。ややひきしまった頸部から外面へ屈 折して口唇部に至り、上端で再び屈折して口唇に至る。 口唇は立ち上がる。胴はあまり膨らまず、内彎して底部に 向う。 外面、口縁部~頸部、よこなで調整。胴部、ヘラ削り 整形。内面、口縁部~頸部、よこなで調整。胴部、なで 調整。	赤褐色、黒色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
10-3 (010) (.0004)	高 環 脚部%	脚部の上端である。透しは3ヶ所と思われる。 ロクロ整形。	暗灰色、暗灰色 緻密、荒い砂を少量 含む 良好	須恵器、覆土中
10-4 (010) (.0004)	黒書環 底部片	環の底部である。 外面、底部、ヘラ削り整形。 外面、底部、黒書有り。文字不明。	赤褐色、赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
10-5 (010) (.0004)	土 鏝 断 片	円筒形と思われる。	黒褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 7g

表17 010 出土遺物表

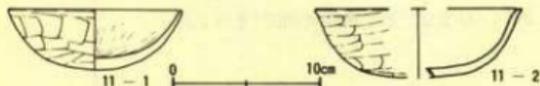


図51 011 出土遺物実測図(その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
11-1 (011) (.0014)	環 全体%	丸底のやや深い環である。体部中央から口唇まで、ほ ぼ一定して内彎する。体部中央が最も厚く、口唇へいく に随って器壁は薄くなる。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。 内面、口縁部、よこなで調整。体部、なで調整。中央に 向ってなである。	赤褐色、褐色 やや密、細砂を多く 含む 良	土師器、覆土中
11-2 (011) (.0014)	環 口縁部 ~体部 %	やや丸底で深めの環である。体部は内彎しながら立ち 上がり、口唇はやや外反する。器壁は全体に薄手である。 外面、ヘラ削り整形。内面、よこなで調整。	褐色、褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中

表18 011 出土遺物表(その1)

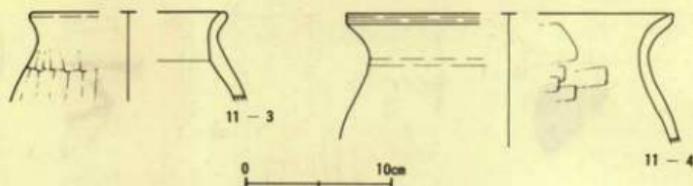


図52 011 出土遺物実測図(その2)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
11-3 (011) (0006)	甕 口縁部 一胴部 ⅔	やや小形の甕である。ひきしまった頸部から口縁部が小さく外反し、口唇は丸い。頸部から胴部にかけて器壁が肥厚し、胴部はやや内彎しながら広がる。尖を受けたらしくもろい。 外面、口縁部一胴部、よこなで調整。胴部、ヘラなどで調整。 内面、口縁部一胴部、よこなで調整。胴部、などで調整。	黒色、黒色 密、細砂を少量含む 良	土師器、床直上
11-4 (011) (0014)	甕 口縁部 一胴部 ⅔	ひきしまった頸部から外反した口縁部をもち、口唇は僅かに立ち上がる。口縁部はやや肥厚する。胴部は内彎しながら広がり、口徑よりも胴径が大きくなると思われる。 外面、口縁部一胴部、よこなで調整。胴部、などで調整。 内面、ヘラ当て。	赤褐色、赤褐色 やや密、やや寛い砂 を多く含む 良	土師器、覆土中

表19 011 出土遺物表(その2)

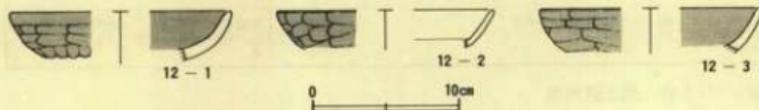


図53 012 出土遺物実測図(その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
12-1 (012) (0003)	赤彩坏 口縁部 一胴部 ⅔	浅い坏である。体部は内彎して立ち上がり、口縁部はやや開く。器壁は厚手である。 外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、ヘラ磨き。 両面赤彩。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、床直上
12-2 (012) (0016)	赤彩坏 口縁部 ⅔	浅めの坏である。体部から屈曲して口縁部が立ち上がる。口縁部はやや内彎し、口唇に至る。 外面、ヘラ削り整形。内面、よこなでヘラ磨き。 外面赤彩。	灰褐色、褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
12-3 (012) (0016)	赤彩坏 口縁部 ⅔	厚手の浅い坏である。体部は内彎しながら開き、口唇はやや外傾する。 外面、ヘラ削り整形。内面、よこなでヘラ磨き。 両面赤彩。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中

表20 012 出土遺物表(その1)

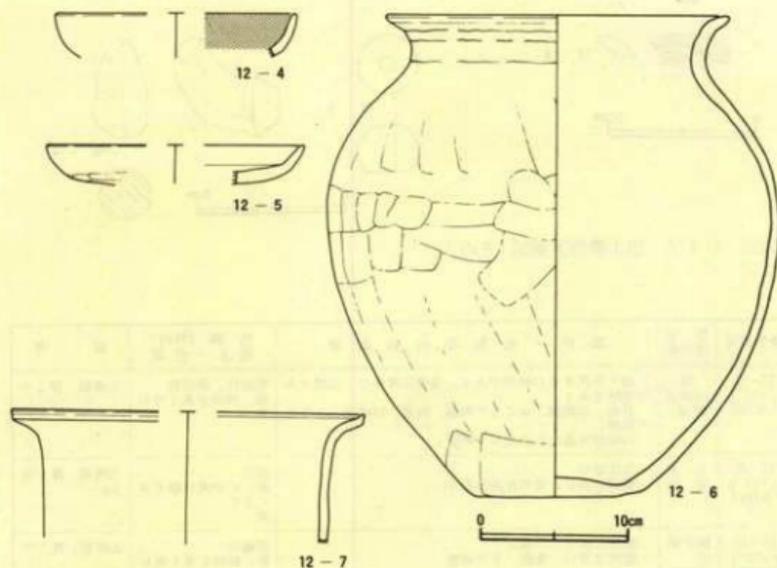


図54 012 出土遺物実測図(その2)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
12-4 (012) (0013)	内黒環 口縁部 片	口縁部はやや内彎して立ち上がり、口唇はやや開く。 器壁は厚い。 外面、ヘラ磨き。内面、ヘラ磨き。 内面黒彩。	暗赤褐色、黒色 密、細砂を少量含む 良	土師器、カマド 内一括
12-5 (012) (0016)	盤 口縁部 一底部 片	やや厚手の底部から低い体部が内彎して立ち上がる。 口唇は丸い。 外面、体部、ヘラ磨き。底部、ヘラ削り整形。内面、 ヘラ磨き。	暗赤褐色、暗赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
12-6 (012) (0010)	壺 全体片	ひきしまった頸部から口縁部が外反し、口唇はやや尖 う気味で、先端は丸い。頸部と口縁部との境に、微かに くびれがある。胴部は球に近い玉子形である。器壁は口 縁部及び頸部は肥厚し、胴部はやや薄い。底部は中央が 厚く、周辺部が薄くなる。最大胴径は、胴部中位からや や上にくる。 外面、口縁部～頸部、よこなで調整。胴上部、なで調 整。胴中位部、ヘラなどで整形。胴下部、なで調整。内面 口縁部～頸部、よこなで調整。 輪積み成形。	暗赤褐色、暗赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、カマド 内レベル、37.08m
12-7 (012) (0002)	壺 口縁部 一胴部 片	頸部と胴部との区別はない。口縁部は強く外反し、口 唇はやや開いて立ち上がる。胴部は内彎して直線的に底 部に向う。 外面、口縁部～頸部、よこなで調整。胴部、なで調整。 内面、口縁部～頸部、よこなで調整。胴部、なで調整。 輪積み成形。	灰褐色、灰褐色 やや密、荒い砂を多 く含む 良	土師器、床直上

表21 012 出土遺物表(その2)

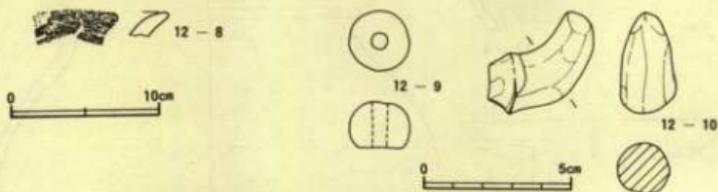


図55 012 出土遺物実測図(その3)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・色調	備考
12-8 (012) (0015)	環 口縁部 断面	強く外反する口縁部である。器壁は厚手で、口唇は夫 り気味である。 外面、口縁部、よこなで調整。内面、口縁部、よこな で調整。 口縁部外面にヘラ記号「  」。	茶褐色、茶褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器・覆土中
12-9 (012) (0015)	土玉 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	褐色 密、やや荒い砂を多 く含む 良	土師器、覆土中 7g
12-10 (012) (0016)	瓶の取 手はほぼ完 形	鉤状に曲っている。 整形は良い。表面、なで調整。	赤褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中

表22 012 出土遺物表(その3)

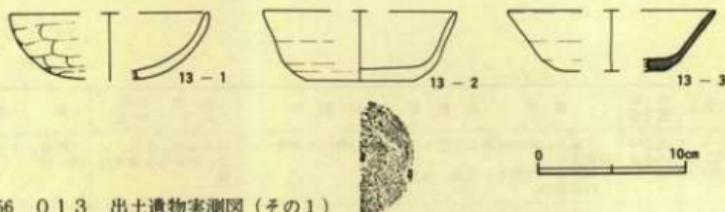


図56 013 出土遺物実測図(その1)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
13-1 (013) (0008)	環 口縁部 一部形	やや深い環である。底部と体部との区別はなく、内彎 しながら口唇に至る。口唇はやや外反する。 外面、体部、ヘラ削り整形。内面ヘラ磨き。	褐色、赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
13-2 (013) (0008)	環 全体形	やや厚い底部から屈曲して立ち上がり、体部に至る。 体部は上半部で僅かに外反し、やや突った口唇をもつ。 外面、底部、回転ヘラ削りの後、ヘラなで整形。 ロクロ成形、右回転。	赤褐色、赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中
13-3 (013) (0008)	環 口縁部 ~底部 形	体部は厚手の底部からゆるやかに立ち上がり、中途で 屈曲して、やや傾斜が急になり、直線的に口唇に至る。 外面、底部、ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	灰白色、灰白色 密、やや荒い砂を少 量含む。 良好。	須恵器、覆土中

表23 013 出土遺物表(その1)

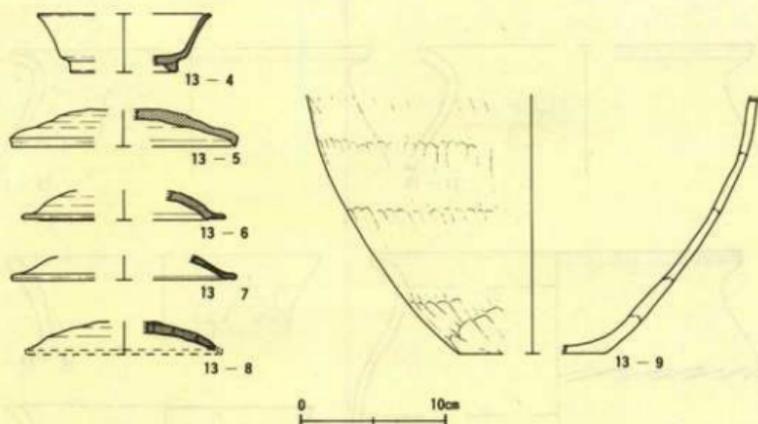


図57 013 出土遺物実測図(その2)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
13-4 (013) (0008)	高台付 環	底部はやや厚く、鋭く立ち上がって体部に至る。体部は外傾して直線的に口縁に至る。口縁は肥厚し、小さく外反する。高台は付け高台で、断面が扇形を示す。 外面、体部下部～高台、回転よこなで調整。高台内面回転よこなで調整。 ロクロ成形、右回転。	灰色、暗灰色 緻密、細砂を少量含む 良好	須恵器、覆土中
13-5 (013) (0006)	環 天井部 ～ 端部 % % %	全体に厚手の蓋である。天井部は平坦である。周縁部は内彎しながら端部に至る。縁端からやや大きなかえりが垂下する。 外面、天井部、回転ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。 須恵器として作られた可能性がある。	灰褐色、灰褐色 緻密、細砂を少量含む 良	土師質須恵器 カマド内一括
13-6 (013) (0003)	環 周縁部 % %	周縁部はゆるく内彎して端部に至る。縁端は丸い。周縁部と端部との境の内側に低いかえりをもつ。 外面、周縁部、回転ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	青灰色、灰色 緻密、やや荒い砂を少量含む 良好	須恵器、覆土中
13-7 (013) (0008)	環 周縁部 % %	周縁部から外反して端部に至る。端部はやや肥厚する。周縁部と端部との境の内側に微かなかえりをもつ。 外面、周縁部、回転ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	灰色、灰色 緻密、細砂を少量含む 良好	須恵器、覆土中
13-8 (013) (0006)	環 天井部 ～ 周縁 部 % %	天井部は厚く、ゆるく内彎しながら周縁部に至る。縁端からかえりが垂下すると思われる。 外面、天井部、回転ヘラ削り整形。 ロクロ成形、右回転。	灰色、灰色 緻密、細砂をやや多く含む 良好	須恵器、カマド内一括
13-9 (013) (0008)	甕 胴部～ 底部 % %	胴部はやや薄い底部から外傾して立ち上がり、上へ行くに随って内彎し、胴部中央ではほぼ直立する。 外面、胴部、ヘラなどで整形。内面、底部～胴下部、よこなで調整。	灰褐色、灰褐色 やや密、荒い砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中

表24 013 出土遺物表(その2)

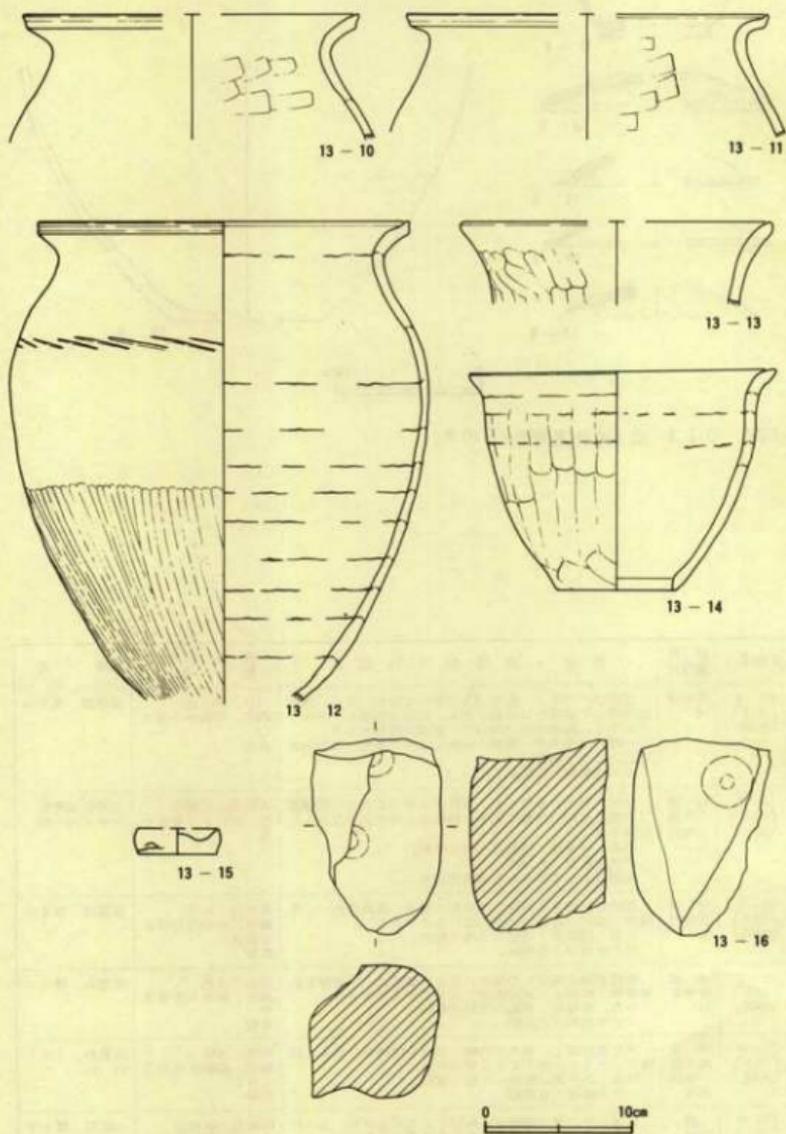


図58 013 出土遺物実測図(その3)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
13-10 (013 0003)	甕 口縁部 一胴部 1/4	ひきしまった頸部から強く外反した口縁部をもつ。口 唇はやや外反する。胴部は頸部から厚さを減じながら内 彎して開く。 外面、口縁部一胴部、よこなで調整。内面、口縁部、 よこなで調整。胴部、ヘラ当ての跡。 輪積み成形。	赤褐色、赤褐色 やや密、荒い砂を多 く含む 良	土師器、覆土中
13-11 (013 0008)	甕 口縁部 一胴部 1/4	ひきしまった頸部から強く外反した短い口縁部をもつ。 口唇は外傾して立ち上がる。頸部は肥厚する。胴部はや や外反して広がり、破片の下端で内彎しはじめ。 外面、口縁部一胴部、よこなで調整。内面、口縁部、 よこなで調整。胴部、ヘラ当ての跡。 輪積み成形。	灰褐色、灰褐色 密、荒い砂をやや多 く含む 良	土師器、カマド 内一括
13-12 (013 0004)	甕 底部欠	ひきしまった頸部から強く外反した口縁部をもち、口 唇は立ち上がる。口唇の内側に段をもつ。胴部は玉子形 で、最大胴径は上半部にある。器壁は口縁部でやや厚く なる。 外面、口縁部一胴部、よこなで調整。胴部上半部、叩 き目。胴部下平部、ヘラなで整形。内面、なで調整。 輪積み成形。	灰褐色、灰褐色 やや密、荒い砂を多 く含む 良	土師器、カマド 内 レベル、37.08m
13-13 (013 0008)	甕 (瓶) 口縁部 一胴部 1/4	口縁部はゆるく外反し、肥厚する。口唇は丸い。頸部 と胴部との区別はなく、内傾して底部に向う。 外面、口縁部、よこなで調整。胴部、ヘラなで整形。 内面、口縁部、よこなで調整。胴部、なで調整。	赤褐色、赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
13-14 (013 0008)	瓶 全体1/4	口径に比べて高さの低い瓶である。口縁部は外反し、 尖り気味の口唇をもつ。頸部と胴部との区別はなく、ゆる やかに内彎しながら底部に至る。 外面、口縁部、よこなで調整。胴部、ヘラ削り整形。 内面、口縁部、よこなで調整。胴部下端、面取り。 輪積み成形。	褐色、褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
13-15 (013 0008)	手捏ね 土器 全体1/4	平底で体部の低い土器である。底部は厚く、中央部が 内側に膨らむ。体部は直立し、尖った口唇をもつ。	赤褐色、赤褐色 密、細砂をやや多く 含む 良	土師器、覆土中
13-16 (013 0007)	石 風 断 片	四隅の一片である。両面に使用痕がある。	灰色	周溝内 安山岩

表25 013 出土遺物表(その3)

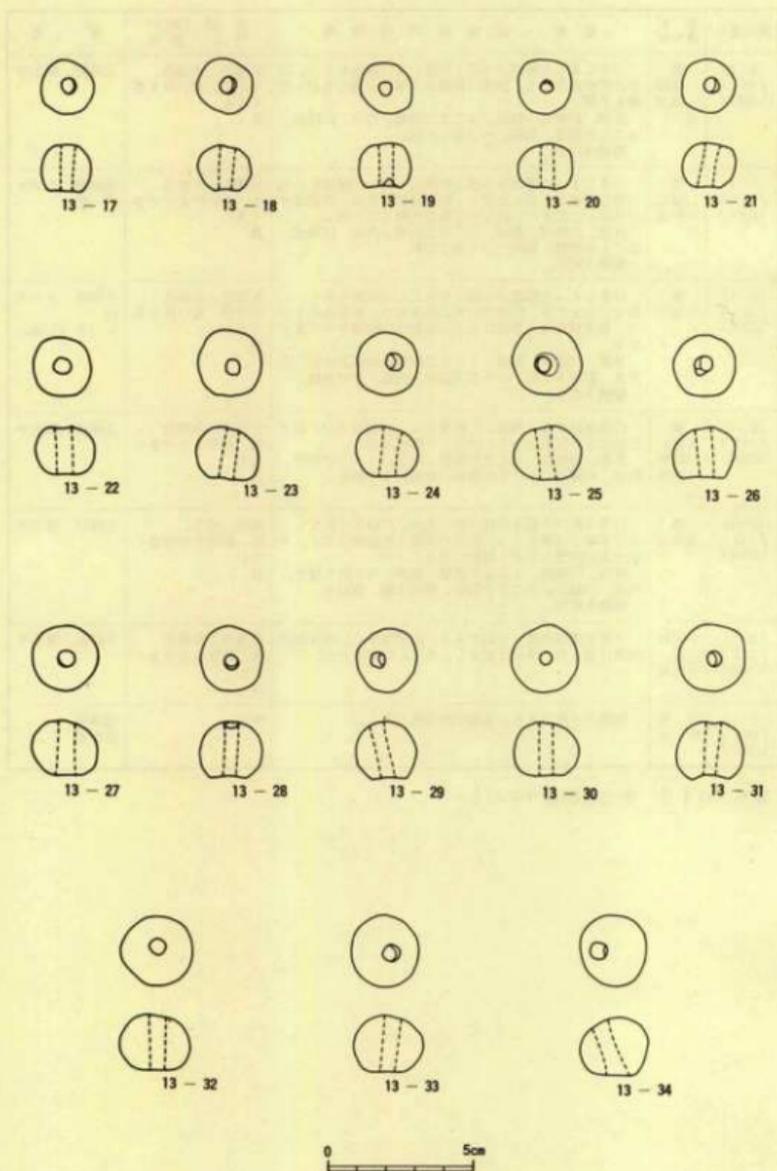


図59 O13 出土遺物実測図(その4)

遺物番号	器形 透存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
13-17 (013) (0003)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形はやや良い。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 5g
13-18 (013) (0006)	土 玉 完 形	ほぼ球形 整形は良い。孔の片側面取り。	黒褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、5g
13-19 (013) (0006)	土 玉 ほぼ完 形	ほぼ球形。 整形はやや良い。孔の片側面取り。	褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、6g
13-20 (013) (0006)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 表面の剝離が著しい。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、6g
13-21 (013) (0003)	土 玉 ほぼ完 形	ほぼ球形。 整形はやや良い。孔の片側面取り。	黒褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 6g
13-22 (013) (0003)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形はやや良い。孔の片側面取り。	黒色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 6g
13-23 (013) (0006)	土 玉 ほぼ完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	黒色 密、細砂を少量含む 良	土師器、カマド 内一括、7g
13-24 (013) (0008)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。孔の位置が端 へ寄っている。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 8g
13-25 (013) (0008)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂をやや多く含む	土師器、覆土中 8g
13-26 (013) (0003)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。孔の位置がや や端へ寄っている。	暗褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 8g
13-27 (013) (0008)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 9g
13-28 (013) (0006)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	暗赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、9g
13-29 (013) (0003)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	暗褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 9g
13-30 (013) (0008)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 10g
13-31 (013) (0006)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、11g
13-32 (013) (0008)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 11g
13-33 (013) (0006)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、カマド 内一括、12g
13-34 (013) (0008)	土 玉 完 形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。孔の位置が端 へ寄っている。	褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 12g

表26 013 出土遺物表(その4)

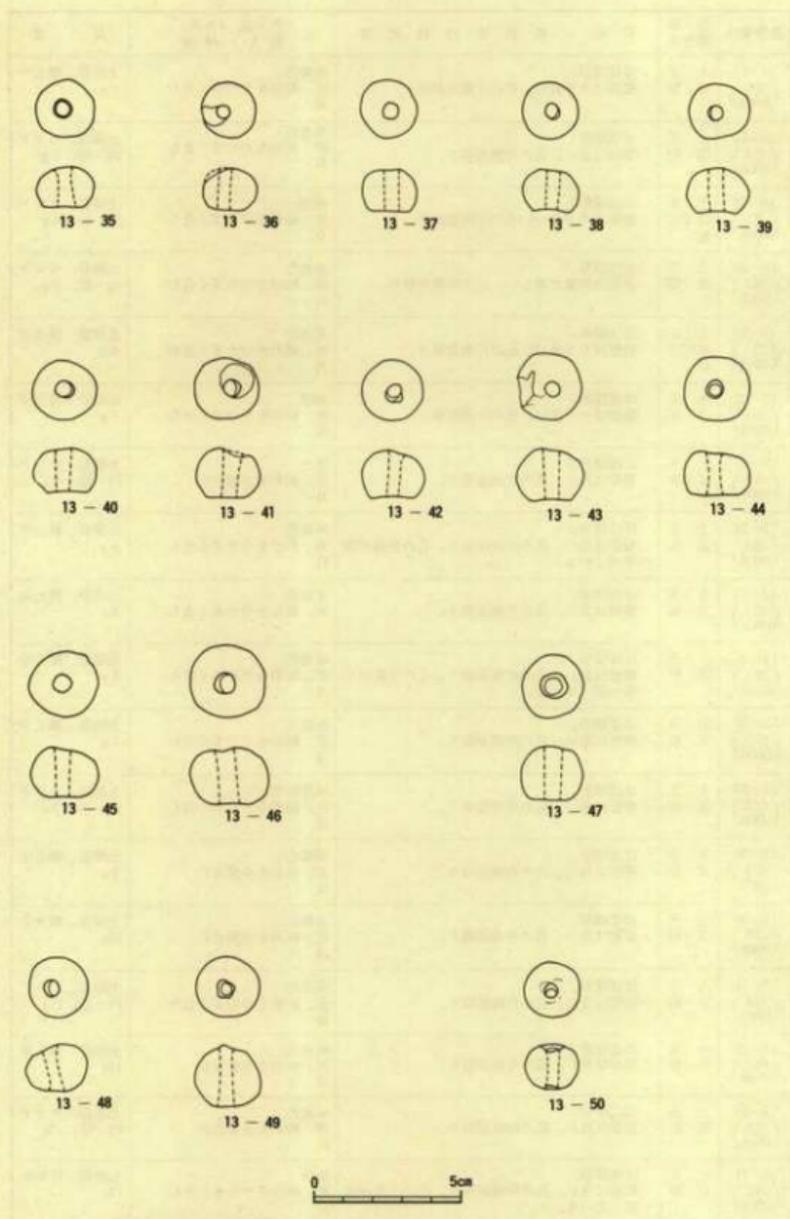


図60 O13 出土遺物実測図(その5)

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
13-35 (013) (0003)	土玉 ぼぼ完 形	やや扁平な球形。 整形はやや良い。孔の片側面取り。	褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 5g
13-36 (013) (0006)	土玉 ぼぼ完 形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、6g
13-37 (013) (0003)	土玉 ぼぼ完 形	やや扁平な球形。 表面の剝離が著しい。孔の片側面取り。	赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 6g
13-38 (013) (0003)	土玉 ぼぼ完 形	やや扁平な球形。 表面の剝離が著しい。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 6g
13-39 (013) (0003)	土玉 完形	やや扁平な球形。 表面の剝離が著しい。孔の片側面取り。	茶褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、6g
13-40 (013) (0006)	土玉 完形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、6g
13-41 (013) (0003)	土玉 ぼぼ完 形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	黒色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 7g
13-42 (013) (0006)	土玉 完形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。孔の位置がや や端に寄っている。	黒色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、カマド 内一括、7g
13-43 (013) (0008)	土玉 ぼぼ完 形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 8g
13-44 (013) (0006)	土玉 完形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	暗赤褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 8g
13-45 (013) (0008)	土玉 完形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色 密、細砂を多く含む 良	土師器、覆土中 12g
13-46 (013) (0008)	土玉 完形	ぼぼ球形。 整形は良い。孔の両側面取り。	赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、カマド 内一括、8g
13-47 (013) (0006)	土玉 完形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の両側面取り。	赤褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、カマド 内一括、8g
13-48 (013) (0008)	土玉 完形	ぼぼ球形。 整形は良い。面取りなし。孔の位置が端に寄 っている。	褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 6g
13-49 (013) (0008)	土玉 完形	ぼぼ球形。 整形はやや良い。面取りなし。	灰褐色 密、細砂をやや多く含む 良	土師器、覆土中 9g
13-50 (013) (0008)	土玉 完形	やや扁平な球形。 整形は良い。面取りなし。孔の位置が端に寄 っている。	灰褐色 密、細砂を少量含む 良	土師器、覆土中 5g

表27 013 出土遺物表(その5)

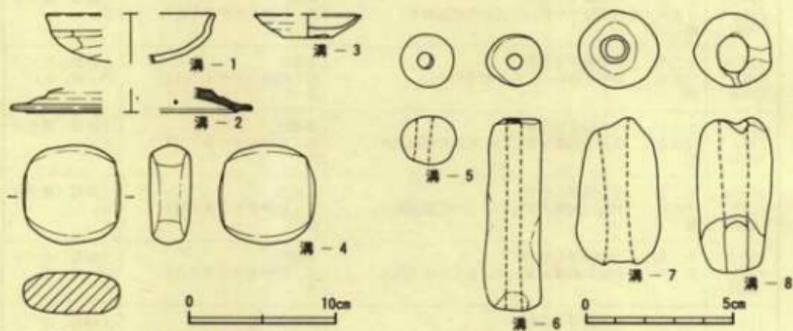


图61 015 出土遺物実測図

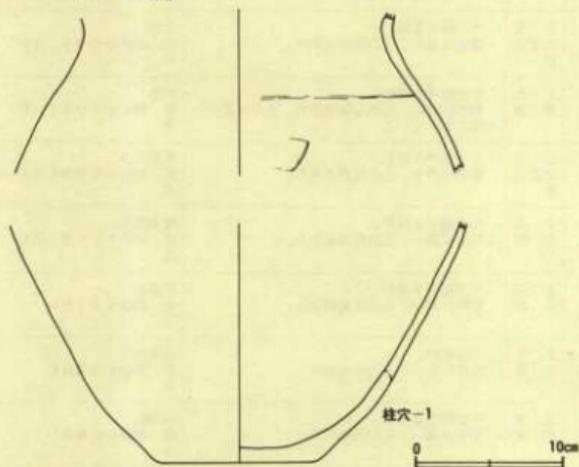


图62 018 出土遺物実測図

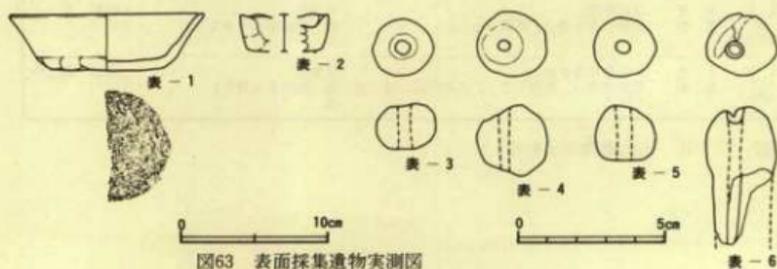


图63 表面採集遺物実測図

遺物番号	器形 遺存度	器形・成整形の特徴等	色調(外内) 胎土・焼成	備考
溝-1 (014 (0001)	環 口縁部 一体部 片	丸底の環である。底部と体部との区別はない。口縁部は体部から、やや外反して立ち上がる。椗状の受部をもつ。器壁は薄手である。外面、口縁部、よこなで調整。体部、ヘラ削り整形。内面、ヘラ磨き。	赤褐色、赤褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、黒色土中
溝-2 (0001)	環 蓋 口縁部 片	周縁部に大きな段をもち、端部はほぼ水平にのびる。周縁部と端部との境の内面にかえりをもつ。かえりは端部よりも下に出る。外面、周縁部、回転などで調整。口縁部成形、右回転。	灰白色、灰白色密、やや荒い砂を少量含む 良	須恵器、黒色土中
溝-3 (0001)	小皿 (灯明 皿) 全体片	浅い椀形の皿である。高台は底部の中央を削ってつくられている。 口縁部成形、右回転。	灰色、灰色内面全体及び外面体部に灰色釉 緻密、砂粒無し 良好	陶器、黒色土中
溝-4 (014 (0001)	磨石 完形	各辺が外へ膨らんだ正方形をしている。四側面が使用され、上下両面は磨かれている。	灰色	安山岩、23g
溝-5 (014 (0001)	土玉 突形	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	灰褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、黒色土中、5g
溝-6 (014 (0002)	土鏡 片	片方の端がやや太くなった円筒形である。 片方の端が平らに整形されている。	赤褐色密、細砂を少量含む 良	土師器、暗褐色土中、26g
溝-7 (014 (0001)	土鏡 突形	片方の端がやや太くなった短い円筒形である。 両端は整形されていない。	灰褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、灰色土中、32g
溝-8 (014 (0001)	土鏡 全体片	円筒形。 片方の端を欠く。残っている端は整形されていない。	褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、黒色土中、27g
柱穴-1 (015 (0023)	竇 胴上部 片 底部	胴部は底部から内彎しながらやや大きく開いて立ち上がる。胴部は玉子形を示し、ひきしまった頸部をもつ。外面、剥離のため整形不明。内面、なで調整。ヘラ当ての跡 輪積み成形	灰褐色、灰褐色粗、荒い砂を多く含む 良	土師器、018内レベル、35.84m
表-1 (016 (0001)	環 全体片	体部は底部から内彎して立ち上がり、中位からやや外反して口唇に至る。底部は内面中央がややくぼんでいる。外面、体部下端、ヘラ削り整形。底部、ヘラ削り整形。口縁部成形、右回転。	赤褐色、赤褐色密、細砂を少量含む 良	土師器、表面採集
表-2 (016 (0001)	手摺ね 土器 全体片	小形の環形である。底部は厚く、内面中央が膨らむ。体部は底部からはほぼ直立し、低い。	灰褐色、灰褐色密、細砂を少量含む 良	土師器、表面採集
表-3 (016 (0001)	土玉 突形	やや扁平な球形。 整形は良い。孔の両側面取り。	赤褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、表面採集、6g
表-4 (016 (0001)	土玉 片	ほぼ球形。 整形は良い。孔の片側面取り。	赤褐色密、細砂を少量含む 良	土師器、表面採集、12g
表-5 (016 (0001)	土玉 突形	ほぼ球形。 整形は良い。面取りなし。	灰褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、表面採集、8g
表-6 (016 (0001)	土 新片	円筒形と思われる。 端は未整形。	灰褐色密、細砂をやや多く含む 良	土師器、表面採集、18g

表28 015、018 出土遺物、表面採集遺物表

第4章 まとめ

1. 縄文土器について

本遺跡出土の縄文土器は、大半が三戸式に属する。第1群第1・2・4類は各々の、基本文様構成と思われるものを示した。また、三戸式に伴う条痕文を有するものは、一点のみ検出され(78)小破片中においてもみられなかった。近似する施文を中心として分類したが、3・8・23・49・53は田戸下層式に含まれると考えられる。波状口縁及び口唇部に施文されており、これらは田戸下層式に含まれよう。

第3類は田戸下層式と考えられる。本類土器の全体は、三里塚No56遺跡出土資料の中にみられる。

三戸式と田戸下層式を区分する際に、口縁部の内削ぎが指摘される場合が多いが、必ずしもとらわれ過ぎる必要はないようである。明らかに内削ぎを示すものは、第2類19、第4類45～48・78のようにかなり鋭いが、3・5のような直線的なものも多くみられる。三戸式に伴う貝殻条痕を有するものは78の1点のみで、本遺跡出土の土器の中には他に例をみることはなかった。数量的にその比率が低いのであろう。

これらの土器については、一応三戸式とするが、三戸式から田戸下層式にわたって、かなり共通する基本的文様構成が継続する点、田戸下層式において強く意識する縦の区画のあり方は、本遺跡出土土器では、第1類中において多少ながら入り始まる様子もみられ、両者共時期的に接近しているのかも知れない。

補足的に述べたが利根川流域には縄文早期の良好な遺跡が多く存在し、西ノ城・城ノ台の両貝塚までは各々直線距離にして7～8kmの所にみられ、また佐原市周辺・大須川流域においては三戸・田戸を認められる遺跡は10ヶ所以上みてとれるが、まだその調査は十分とは云えない。今後の調査の進展と共に、千葉西北部、北総台地における縄文時代早期の様相が明らかになると思われるが、まだここでは資料的に遺物のみであり、全体的な様相をつかみ切れない。今後、東京湾方面及び内陸部における諸様相との対比を今後の課題として進めねばならない。

2. 008出土墨書土器について

本遺跡出土土器の中で、特徴的なものとしては、008から出土した墨書土器及び硯がある。墨書は、「神宮」「毛神」「石」「十」の4点である。「神宮」は、「じんぐう」あるいは、「かみつみや」と読めるであろう。「じんぐう」とすれば、佐原市周辺で考えられるのは、香取

神宮である。

香取神宮は、8世紀始め、藤原氏がここより春日社を氏神として移しており、その成立は、かなり古く遡るとされている。延喜式には大社として挙げられている。本遺構の年代は、香取神宮の成立以後であり、「神宮」の墨書は、同社との関連をうかがわせるかとも考えられる。

「毛神」は何を意味するものであろうか。「毛」の文字自体は、八代代市村上込の内遺跡から約30点出土しているが、本例のように意味の与えられる形のものはない。「け(の)かみ」なのか「もうしん」なのか、あるいはまた別の読み方を考える必要があるかも知れない。「毛」自体では、いわゆる「け」であり、その組合せ方により多数の意味が考えられるが、日本書紀中に、「毛人」「毛野国」とあり、「毛人」は人を、「毛野」は土地をさすわけである。本遺跡出土の墨書が、「毛野国」に関係したものとするには、現在資料的にも相互の関係を明らかにすることができず、今後の課題とせざるを得ない。言葉自体の意味も改めて問われればなるまい。

「石〇」は、どのように読むか、意味があるかは不明である。

「十」は数を表わすものとしてよいだろう。類例は各地にみられる。

墨書土器の性格については、鈴木仲秋氏は、下のよう分類されている。

- | | | | | |
|---------|---|----------|---|------------|
| (1) 官衙跡 | ┌ | (a) 古来信仰 | ┌ | 信仰対象を表わすもの |
| (2) 寺院跡 | | (b) 今来信仰 | | 祈願を表わすもの |
| (3) 集落跡 | | | | 供献物を表わすもの |
| | | | | 使用者を表わすもの |
| | | | | 祭祀日を表わすもの |

この場合遺物出土のあり方が問われるが、本遺跡の場合、カマド正面左側に2点並んで出土しており、使用しないしは収納状態にあるものとして考えられるので、分類はその他の要素を組み込んで考えることが必要であろう。

ここに述べたことは文字の読み方、言葉の意味をはじめ、現在仮定にすぎず、香取・鹿島両神宮のあり方、同地域における集落のあり方、「神」の持つ意味等々、全体的にみていかねばならない。単に資料の提示にすぎないかも知れないが今後、本地域における調査研究の進展と共に新たな検討を待ちたい。

3. 竪穴住居の時期

本遺跡の住居跡の時期は、編年上、鬼高期、真間期、国分期の3期に区分される。

鬼高期に属する住居跡は、003、006、007の3遺構である。これらに共通する器形の土器は坏である。よって、坏の新古に従って住居跡を古い順に並べると、007-006-003、となる。003出土の坏は、受部が消え、体部と口縁部が曲率と整形の違いによって区別されるのみで、3住居

跡の中で、最も新しいと考えられる。006は、前に述べたように、攪乱がはげしく、遺物の帰属に問題があるが、6-1の環から考えて、007よりも新しいと思われる。

真間期に属する住居跡は最も多く、001・002・004・005・009・011・012・013の8住居跡である。8住居の中で最も古いものは、011と考えられる。011出土の土師器環は、丸底で、口縁部まで同じ曲率で内彎するものと、口縁部が僅かに外反するものの2種類がある。土師器の甕は、口唇の丸いものと、断面が三角形になるが、立ち上がりのほとんどないものの2種類がある。これらは、真間期の古い方に属するもので、8住居跡の中で最も古い形を示している。

他の7住居跡については、共通する器形の新古を基に考える。ただし、002は、前述したように実測図を載せるに足る資料がなかったので、一応、除外して考える。よって、6住居跡の遺物で全部に共通する器形は、土師器環である。土師器甕を出土した住居跡は010を除く5住居跡である。また、真間期の特徴的遺物と考えられる赤彩盤は、005・012から出土している。これら6住居跡から出土した土師器環は、ロクロ成形による椀形のものを含むものと含まないものとに分けられる。ロクロ成形の環を伴うのは、009・004・013であり、012・005・001には伴わない。ロクロ成形の環を伴わない3住居跡の中で、005・012からは、土師器の甕と赤彩盤が出土している。001は、土師器環は鬼高期の環であるが、須恵器環蓋、および、高台付盤が出土し、この二者は真間期の土師器と共伴すると考えられる。よって、001を真間期に位置づけた。001出土の須恵器は、3住居跡の中で最も新しいものである。鬼高期の環からみると、鬼高期の住居跡、007・006・003の中で、007と006との間に001は、位置づけられると思われる。005と012とでは、甕の口縁部の形により012の方が古いと考えられる。よって、古い順に、012-005-001と考えられる。

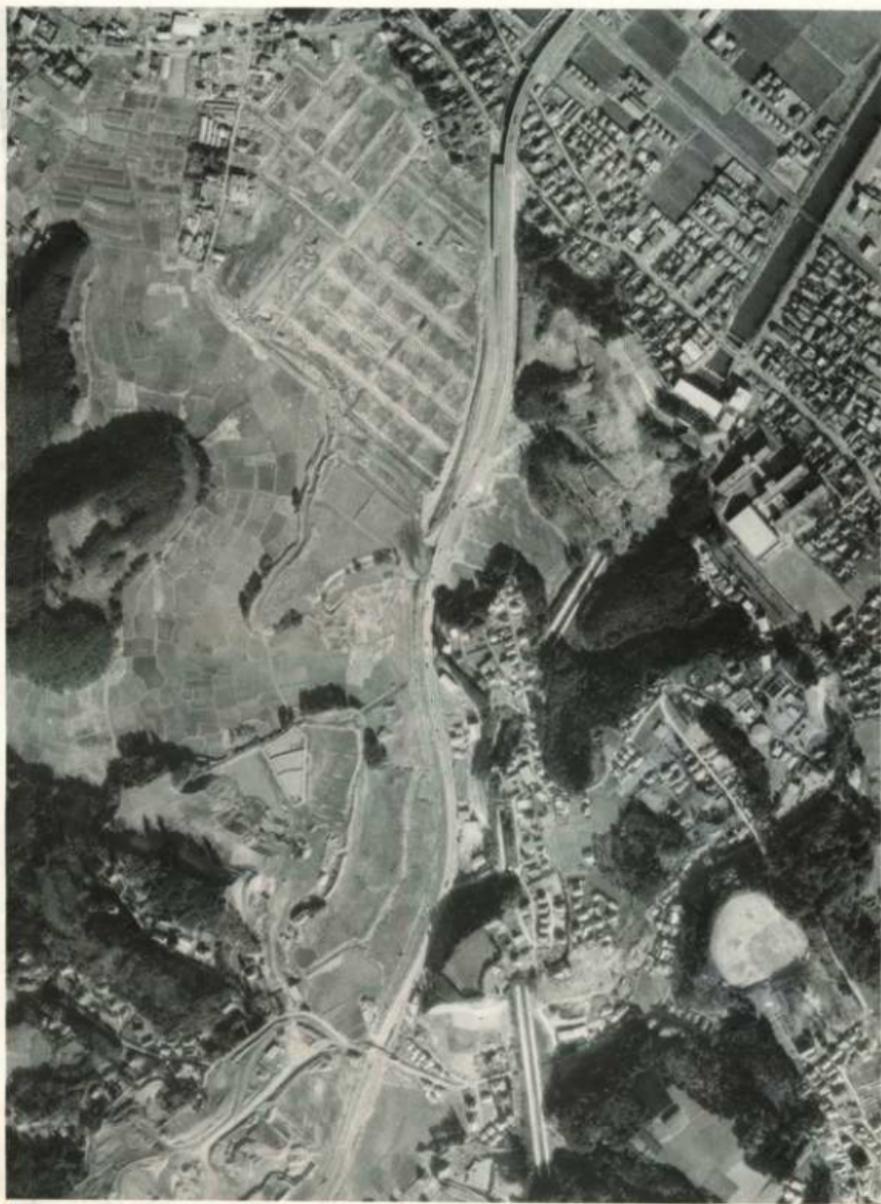
次にロクロ成形の環を伴う、004・009・013について考えてみる。009と013は、ロクロ未使用の環が伴うが、ロクロ成形の環の形より、古い順に009-013と考えられる。

004からは、ロクロ未使用の環は出土していないが、土師器の甕から考えて、013よりも古く009よりも新しいと思われる。よって、古い順に、009-004-013となり、本遺跡の真間期の住居跡は、古い順に、012-005-(001)-009-004-013となる。

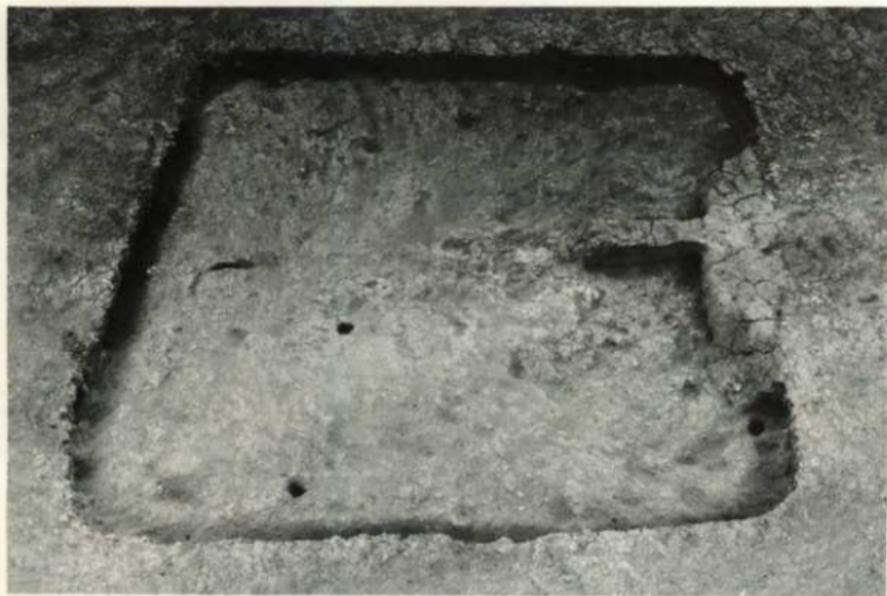
国分期の住居跡は、010と008とである。両者ともロクロ成形の土師器環と墨書土器が出土している。土師器環の形から考えて、古い順に、010-008となる。よって、全体として、この遺跡の住居跡は、鬼高期、007-006-003、真間期、012-005-(001)-009-004-013、国分期、010-008、の順に並ぶと考えられる。

参考文献

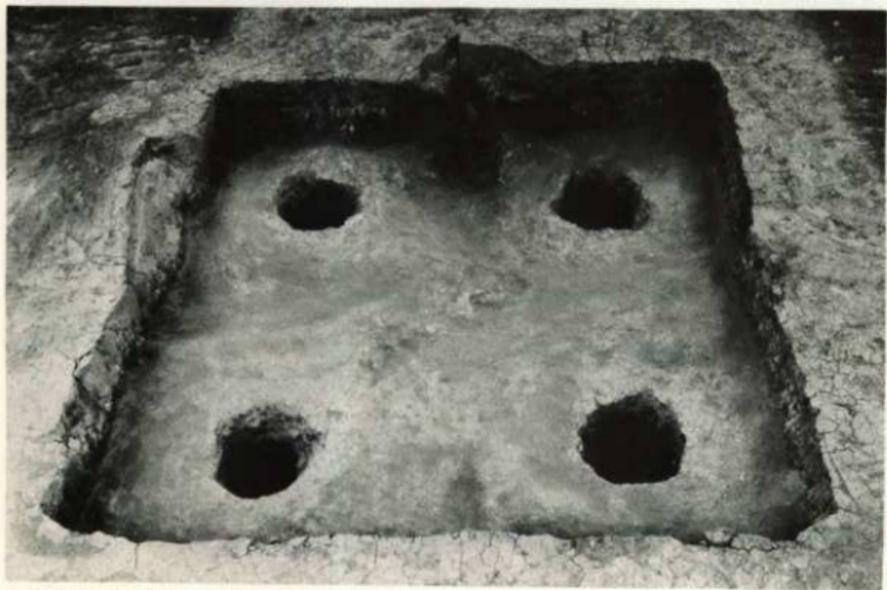
- 赤星 直忠 「横須賀市田戸先史遺跡調査報告」(『史前学雑誌』第7巻第6号) 1935
- 赤星 直忠 「古式土器の一型式としての三戸式土器」(『考古学』第7巻第9号) 1936
- 天野 努他 「八千代市村上遺跡群」 1974
- 池田 健夫 「城の台貝塚出土早期縄文式土器の細別」(『広島医科大学論文集』2) 1950
- 岩堀角次郎他 「香取郡誌」 1920
- 海野 道義他 「将門鹿島台」 1975
- 菊池 利夫 「利根川流域の開発」(『利根川』) 1971
- 桑原 護他 「飯重」 1974
- 渋谷 典平他 「仏師台遺跡」 1973
- 鈴木 仲秋 「房総における墨書土器の一考察」(『史館』第5号) 1975
- 中山 吉秀 「No56遺跡」(『三里塚』) 1971
- 中山 吉秀 「縄文時代の遺物」(『清水谷遺跡』) 1975
- 西村 正衛他 「千葉県西之城貝塚」(『石器時代』No2) 1955
- 西村 正衛 「千葉県香取郡神崎町西之城遺跡」(『古代』45・46合併号) 1965
- 西村 正衛 「利根川下流域における縄文文化編年的研究の概要」(『利根川』) 1971
- 沼沢 豊他 「東寺山石神遺跡」 1977
- 浜名 徳永他 「旧久住中南・右田岡遺跡調査報告書」 1976
- 松村 恵司 「出土土器の分類と編年」(『山田水呑遺跡』) 1977
- 山内 清男 「縄紋土器の起源」(『ドルメン』第1巻第5号) 1932
- 山内 清男 「古式縄紋土器研究最近の情勢」(『ドルメン』第4巻第1号) 1935
- 山内 清男 「縄紋土器型式の細別と大別」(『先史考古学』第1巻第1号) 1937
- 山内 清男 「日本先史土器図譜」 1939~1941
- 吉田 格 「千葉県城ノ台貝塚」(『石器時代』No1) 1955



遺跡周辺(約 $1/500$)提供千葉日報社



1. 002(東側から)



2. 003(南側から)



1. 004 (南側から)



2. 002~005 (南側から)

図版4 遺構



1. 005 (東側から)



2. 005 遺物出土状況(手前は勾玉)



1. 006 (南側から)



2. 007 (東側から)

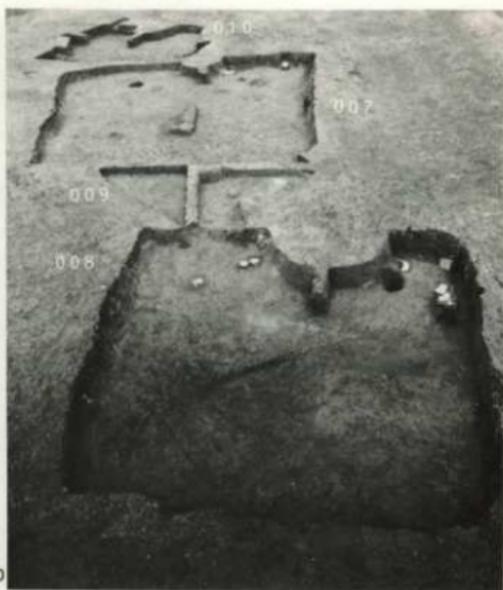
図版6遺構



1. 008(南側から)



2. 009(西側から)



3. 007~010

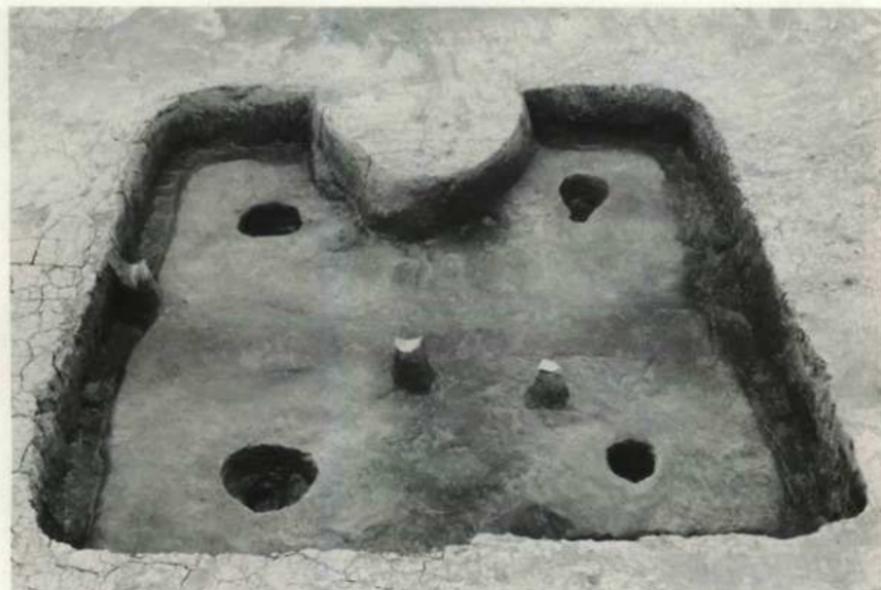


1. 011(南側から)

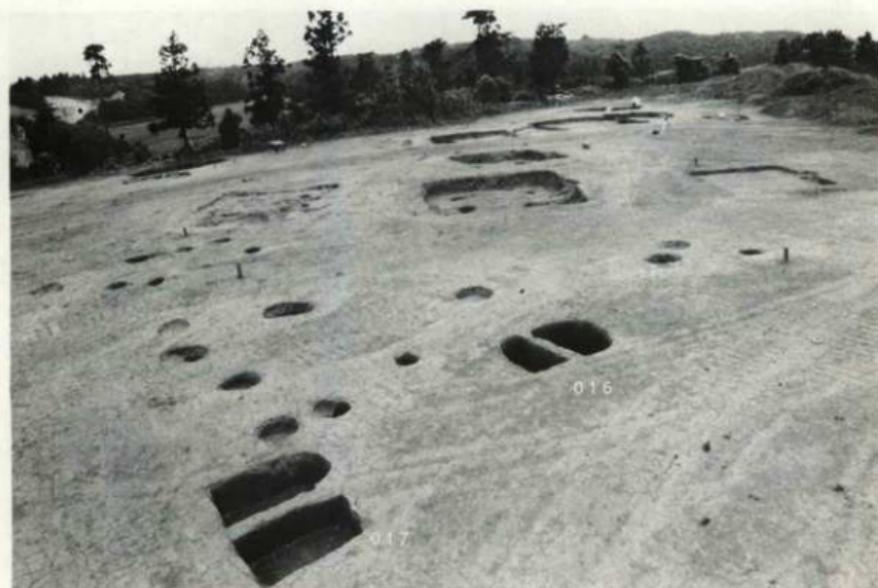


2. 012(南側から)

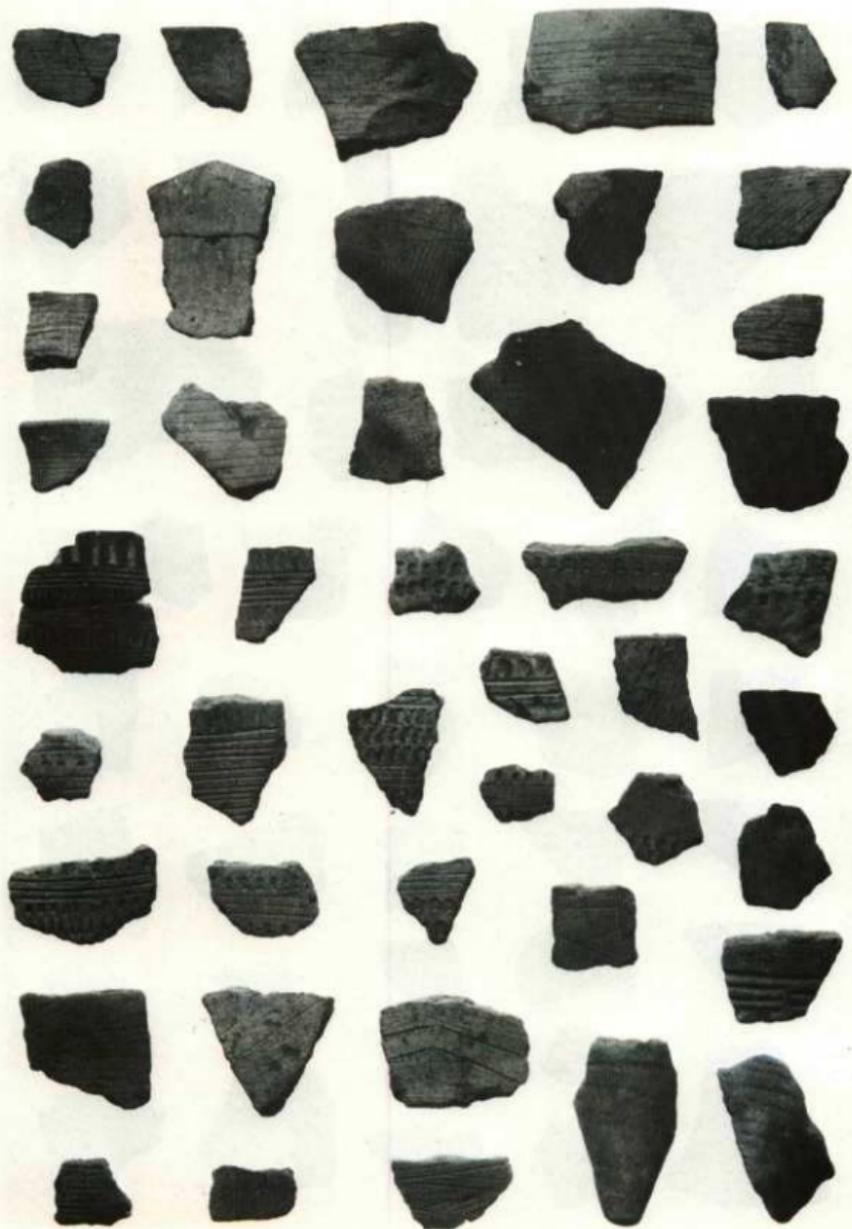
図版8遺構



1. 013(南側から)



2. 南側台地全景016・017・018(東側から)



縄文土器(1)

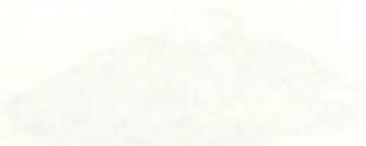




1-5



1-6



1-10



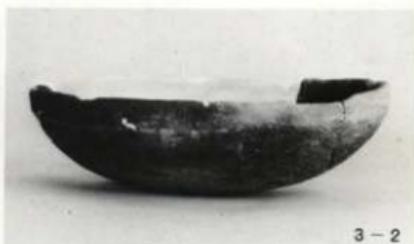
1-9

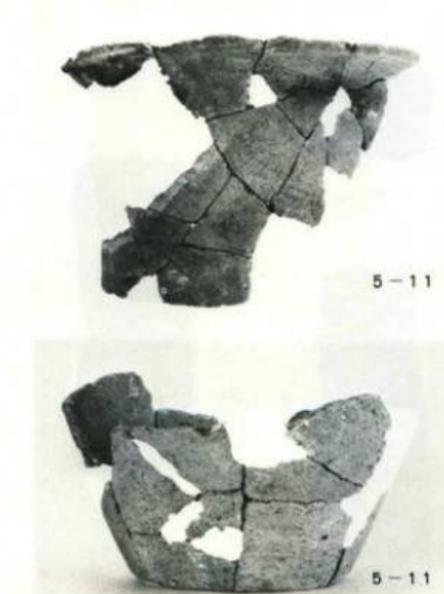


1-7

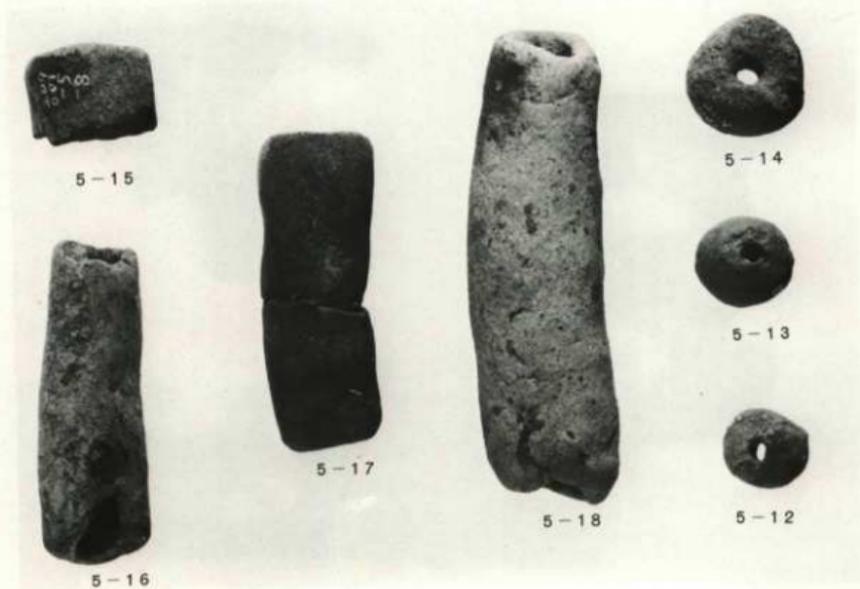
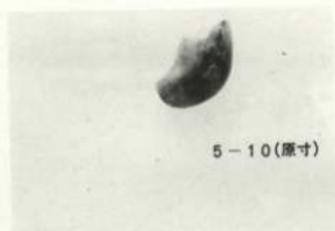
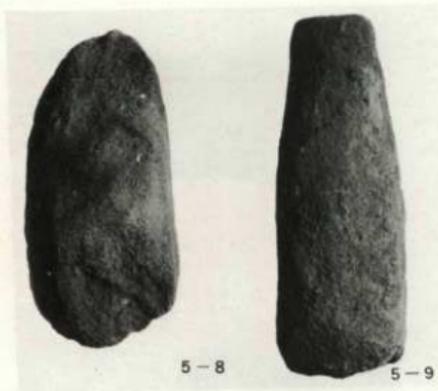


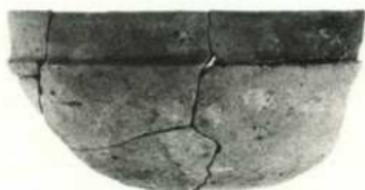
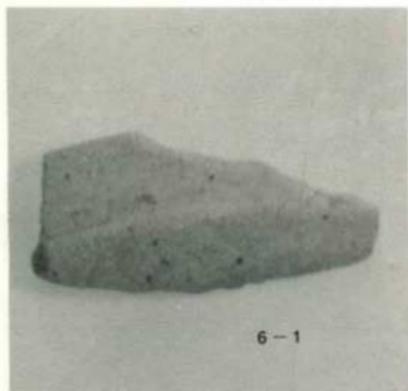
1-8





図版14 遺物







7-10



7-11



7-12



7-13



7-14



8-1



8-2



8-1



8-2



8-4



8-5

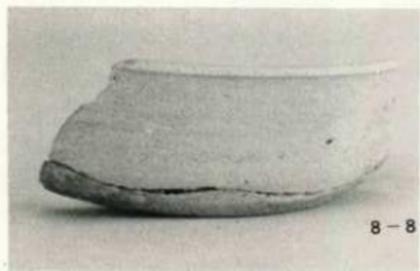
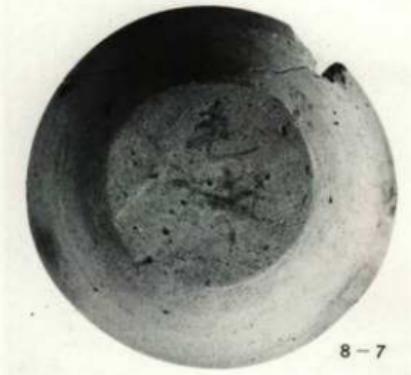


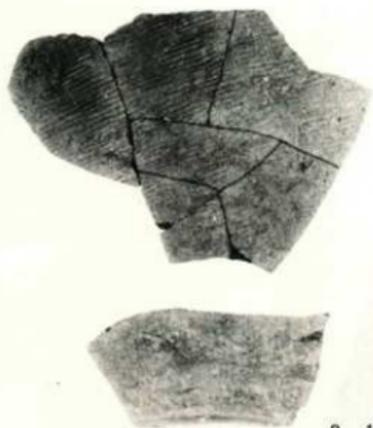
8-4



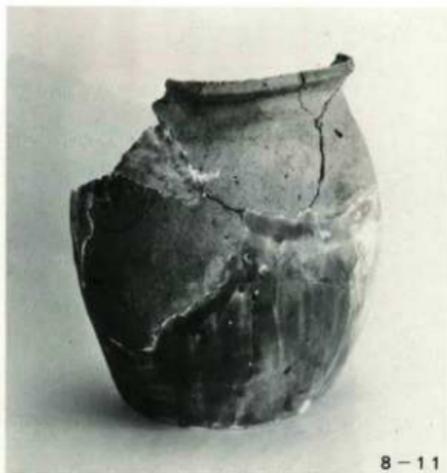
8-5

図版18遺物





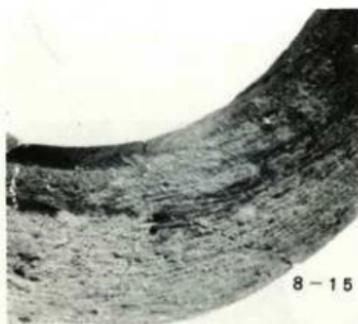
8-14



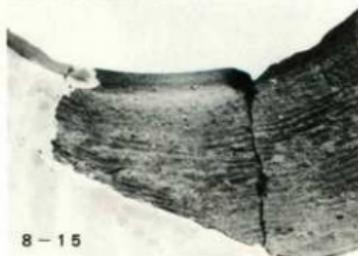
8-11



8-15



8-15



8-15



8-16



8-20



8-18



8-19



9-7



9-6



9-5



10-3



10-3



10-4



11-1



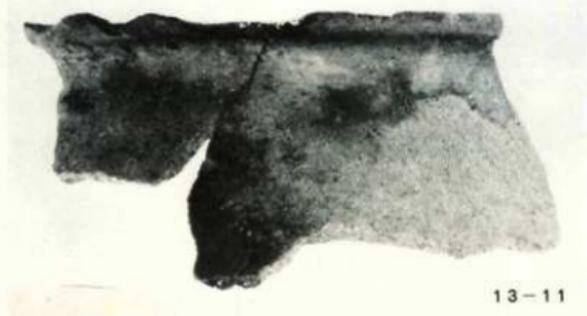
12-10

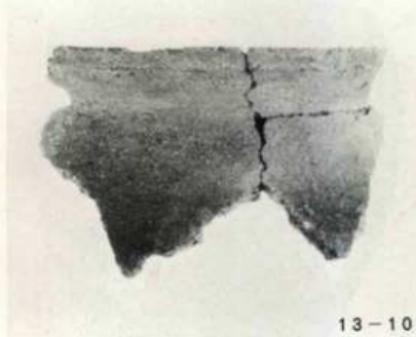


12-7



12-5





13-10



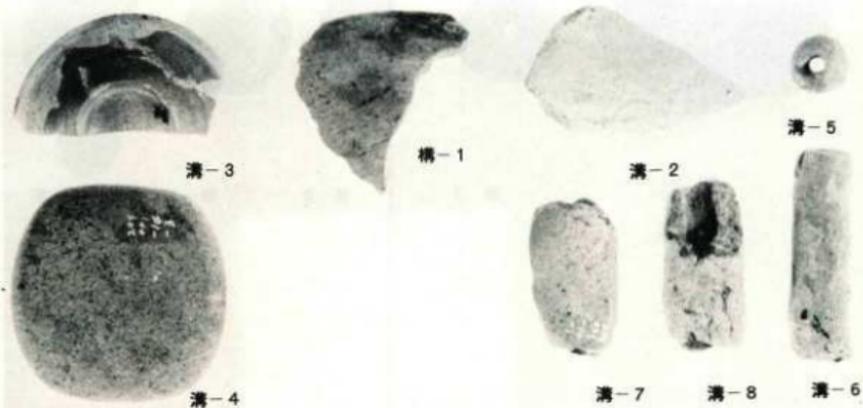
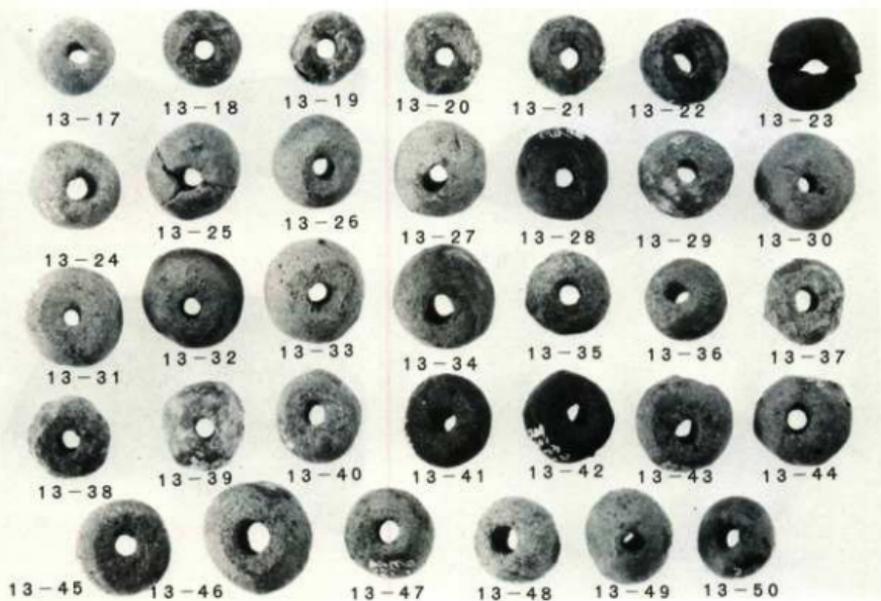
13-9



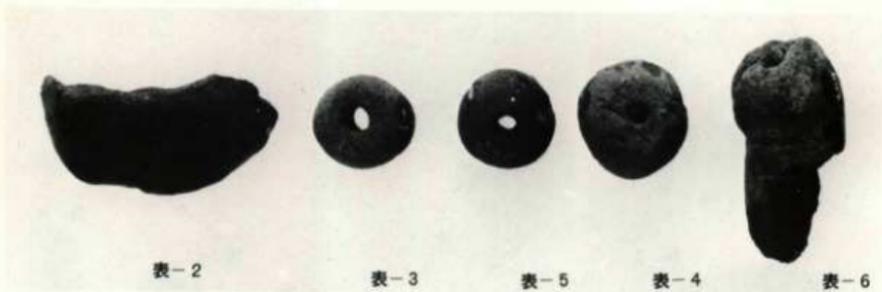
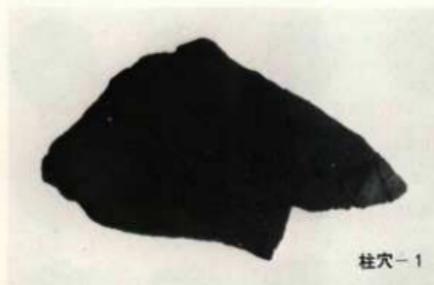
13-14



13-16



図版26遺物



昭和53年12月15日印刷

昭和53年12月28日発行

佐原市神田台遺跡

著作 財団法人千葉県文化財センター
編集 千葉県教育委員会
発行
印刷 旭印刷株式会社
千葉県神明町60 ☎0472-42-2572代